

05.03.14

9:00~12:00

ロチェスター工科大学

NETAC サービスについて

説明担当者(4名)

Pat(パット):NETAC プロジェクトコーディネーター(聴)

Denise(デニース):シニアプロジェクトアソシエート(ろう)

現在 PEN 関係の仕事を担当。以前は NETAC で勤務。

Desiree(デズリー):NYC サイトコーディネーター(聴)

NY 周辺も少しサポートしている

Jane(ジェーン):マサチューセッツ州のサイトコーディネーター(聴)

1. 協議事項の説明

PEPNet と NETAC の組織について

PEPNet-Japan 構築の際に検討すべき課題について

NETAC サイトコーディネーターの仕事について

理想的なサービスについて

PEPNet で作られた資料やパッケージの紹介

2. PEPNet の組織について

PEPNet は、アメリカを 4 地域に分割し、それぞれに地域センターを置いている。それぞれ予算も別で、独立して運営がなされている(アメリカ教育省の管轄)。ただし、PEPNet の目的は「大学に対してアウトリーチやテクニカルアシスタントを提供すること」であり、4 地域間で共有されている。地域によって、組織は異なる。2 地域 (NETAC・PEC) では 12-14 のサイトを置いて州ごとにサポートしている。それぞれの州は近接しているが、州によって土地の大きさや大学の数は全然違う。Ex)メイン州:非常に田舎!

一方の 2 地域 (WROCC・MCPO) では 3-4 のサイトを置いて、それぞれ 5~6 個の州をカバーしている。それぞれのサポートセンターは、聴覚障害学生に対してどのようにサポートしていいかわからない大学に対するサポート(アドバイス・トレーニング)を行う。4 つのセンターは年に数回集まって協議している。4 つの地域センターを設立した際、政府としてはそれぞれが独立して運営するものと思っていた。しかし、我々から 4 地域が共同して動くことを提案し、今のようない理想的なプログラムになった。現在 5 年間で 500 万ドルの助成を受けている(現在 2 期目の 4 年目)。初めは大学にだけ提供してきたが、それだけではなく、中学校や高校などにもサービスが必要であることに気づき、今は大学周辺の機関にもサポートしている。

3. NETAC の目的

聴覚障害学生に対して: 大学に入る機会を増やし、トランジッションのサポートを行う

教職員に対して: 聴覚障害学生のニーズを理解し、どう接したらいいかを伝えていく。教員には、ちょっとした工夫で聴覚障害学生が参加しやすいクラスを作ることができるように (NTID が開発した ClassAct などを活用) 援助する。

サポートサービス: 聴覚障害学生サポートに関する Material を作成し、必要に応じて情報を提供する。

この3点により、聴覚障害学生の入学者数を増やし、在籍率を高め、卒業率を高めていく。

4. NETAC が成功を収めている理由

NTID には、たくさんのろう関係の専門家がいて、多くの質問・問題に対応することができる。

Central Office スタッフたちが優れた資質をもっている。

サイトコーディネーターの資質もあるが、その資質には次の3点が挙げられる。

- 1) 障害学生関係の勤務経験を持つこと、
- 2) その障害関係のうち聴覚障害学生関連のことを多く経験していること、
- 3) 聴覚障害に関する専門性の指導を受け、彼らのニーズを把握し、彼らの視点で物事を考えられること、である。

サイトコーディネーターのほとんどは、BA、MA 取得者で PhD を持っている人は一人だけ。それでも、こちら側に聴覚障害学生サポート関係の経験があれば有名な大学の先生達と張り合っていける。要するに、いい人がいることが仕事の質を決める。人と上手く関わる人を選んでいくことが重要であるということ。

5. サイトコーディネーターの選択方法

初めに各州を訪問し、障害学生サポートに経験のある人を探した。結果的に聴覚障害学生に多く関わってきた人が選ばれ、その人たちの多くは従来から、ある障害学生オフィスで勤務していた。多くの大学では、障害学生オフィスに一人の職員がいて、他のいろんな障害を扱っている。それゆえ、聴覚障害について知らない人もいたが、NETAC スタッフなど関係者と共同で聴覚障害学生サポートについて勉強し、応用して貰った(アメリカの大学で一番多いのは LD。ただ、聴覚障害学生サポートは、一番お金がかかる)。サイトコーディネーターが決定された後、その大学と契約(1年契約、毎年更新)を結んだ。ほとんどの場合、サイトコーディネーターは既に大学内で他の仕事を持っていた。そのため、何割かを NETAC の仕事に費やし、残りを大学の仕事に費やすなどの形とし、その割合にあわせて NETAC から給与保障を受けている。こうした契約は、大学と NETAC の契約になっていて、個人契約とは異なる。

っている。大学の職員として、大学に所属しながら NETAC の仕事をしている (NETAC が彼らのサービスを買っている形)。契約は毎年更新され、NETAC オフィスが、それぞれのサイトに対して、毎年 Basic plan を提示し、それを受け取ったサイトコーディネーターが各自、このプランをベースとして独自にやりたい内容を加えて計画を立てる。同時に、NETAC オフィスは目的を達成するための予算案を提示する。その後、NETAC オフィスで提示された内容を吟味し、翌年の契約を結ぶ。サイトコーディネーターの置かれている大学は、オフィススペースや電話代など基本的な設備だけを提供している。

Jane, Desiree は NETAC の専属。大学での仕事はない。

Jane:「以前は、大学で 50 人の聴覚障害学生に対してサービスを提供しつつ、他の多くの大学に対しても、サポートを行っていた。しかし、充分やりきれないので、今のように専属になることになった。大学側は、NETAC のサイトが自分の大学にあることを非常に喜んでいる。NETAC からいろんなメリットが得られるからだ。」

サイトコーディネーターの活動内容は、当初どの州も同じようなやり方でやっていったが、州ごとのいろんな事情にあわせて柔軟に変えていった。

6. NETAC オフィスがサポートしている対象

NETAC は、直接聴覚障害学生をサポートするわけではない。大学で聴覚障害学生サポートを行っている者を対象にして、サポートを行っている。初めは大学を対象にしていたが、今は中等教育レベルの機関にもサポートを行っている。それは、中等レベルで十分なサポートを受けてこなかった学生は、大学に入ってこられないため。ただし、一番の重点は高等教育にある (連邦政府も中等教育レベルでのサポートを求めている。ただし、その連邦政府の考えは、PEPNet からのフィードバックによって問題を認識することから始まった。)

7. NETAC の活動

以下の活動メニューは全てまとめて実施するのではなく、大学の実態やニーズに応じて、必要とされる各メニューを選択して行っている。

1) ワークショップ、トレーニング

2) 地域での会議・講習会開催 (ex)「聴覚障害学生のリテラシー」など

3) 情報提供

- Basic academic preparation (読み書きそろばん)

- interpreting (いろんな通訳方法の情報や、どこでいい通訳を見つけてくるかなど)

- notetaking

- tutoring

- 情報機器の使用方法 (FM システム、赤外線補聴器、C-print)

- トランジッション (中学校・高校 ~ 大学、大学 ~ 就職)

4) One to One Consultation 相談活動 (対面、メール、電話等)

大学がはじめて聴覚障害学生を受け入れ、通訳の提供方法がわからないとき、サイトコーディネーターが大学を訪問して担当者と話をする。すぐ解決策を提示するだけでなく、他にもこういう方法があるというリストを提供する。

8. NETAC の活動がスムーズにいく理由は？

第一に、多くのサイトコーディネーターは、聴覚障害学生と長く関わってきており、なおかつそれぞれの州の事情をよく知っている。例えば、聴覚障害に関するどのような専門の人が、どこにいるか、など。

第二に、アメリカの大学には、障害のある学生にいろんなサービスをすでに提供してきた、という土壌がある。

第三に、アメリカには ADA がある。20 年前には聴覚障害学生はごく限られた大学にしか入っていなかったが、ADA ができて以来、他のいろんな大学に聴覚障害学生の進学が広がっていった。

< DeCaro 氏による補足説明 >

NETAC センターは、大きなリソースセンターであり、コーディネートセンターとなっている。コーディネーターに対してリソースを提供する。コーディネーターは州にとってのリソースとなっており、問題解決者であり、アドバイザーになっている。また、問題解決を行う過程で出てきた課題や成果を、NTID にフィードバックしている。これを受けて NTID がさらにリソース開発を行う。つまり、センター→(リソース)→コーディネーター、センター←(提案)←コーディネーターといった構造になっている。

NTID では聴覚障害学生への教育に関するいろんな知識を持っており、RIT ではインテグレーション環境でのサポート内容について、十分な知識がある。ただし、相手にする大学はそれぞれ異なる環境にあり、違った問題を持っている場合もあるため、それらをサイトコーディネーターが発見してきて、NTID に提示してくれる。NETAC オフィスとサイトコーディネーターは、お互いに助け合う形で運営されているが、そもそも予算が連邦政府から来ているので、組織は非常に Formal な形式になっている。サイトが契約を履行しなかった場合には、契約を解消することもできる。

9. 大学独自の方針と NETAC の方針が違う場合は？

サイトコーディネーターにとって最も難しい問題。コーディネーターとしては、何かを指導するのではなく、それぞれの問題を解決するための関係作りに努めている。お互いのやり方を尊重しあえる関係を作ること、プロのコーディネーターとして認められるのではないかと思う。当初は、PEPNet の存在を各大学に知らせていくこと自体が非常に大きな課題だった。レター、メール、パンフなどで活動を知らせてきた。

Q. サイトコーディネーター業務にかかる予算は？

A. 州内の大学数によって異なるが、20000 ドル～90000 ドル(だいたい40000 ドルぐらい)

10. サイトコーディネーターの仕事

コンサルタントサービスを始める段階における業務内容

この段階では、まず Best practices を行う。最初に、大学がどの程度聴覚障害学生サポートのことを知っているのかを把握する。

次に、はじめて聴覚障害学生を受け入れる大学に対して、通訳者の確保の仕方や、活用の仕方を伝える一方で、サポートの質をより高いものにするためのモデルやサポートプログラムを提供する。

次に、これに必要な Material を作った。その Material には 3 点あり、1 つ目は、Tip シートである。聴覚障害学生への教育、教員、サービス提供者などいろんな目的に使用可能である。2 つ目は、Faculty Handbook である。教職員に対して、たくさんのインタビューを行い、その中から(サポートに関する)いい事例を取り上げてハンドブックとした。その内容は、例えば聴覚障害学生に資料を読む時間を与える必要がある、など。3 つ目は、Exhibit Materials で、展示用資料である。例えばパンフレットやサインなどがある。

現場の状況に合わせてサービスを提供していく段階

この段階では、次の Material を提供する。

- 1) Newsletter. イベント情報、新しいトピック、Web 情報等。紙媒体だけでなく、メール、Web でも配布可。これまでにもらっていたニュースレターを元に、NETAC に連絡してくることが良くある。
- 2) Online Training. ノートテイカー養成や、聴覚障害学生にどう関わるかを指導したりする。
- 3) Illustration of Success. 聴覚障害学生にロールモデルを示す。たとえば、就職して成功している聴覚障害学生の様子を見せるなど。

こうした Material があると、人がよってくる。一方で、NETAC が来ることを大学が嫌うこともある。なぜなら、大学が今までやってきたことに対して、あれこれ言われるのが嫌であること、もう 1 つは、初めて聴覚障害学生を受け入れてまだ何もできないので、サービスを強制されるみたいで敬遠されるからである。

データベース

NETAC の Web 上のデータベースに、これまでにサポート関係で会った人(現在は 25 名ほどのコンタクトパーソンがいる)のリストが掲載されているので、どこにいても参考になりそうな人を紹介できる。質問を見ると、これから作るべき Material がよくわかる。各サイトがどんな活動をしているか、月刊レポートを見て確認できる。年間レポートを作成する際に、これらの記録を参考にしてレポートが作れる。

11. NETAC はどうやってネットワークを作ってきたか

まず、もともとあるいろんな協会とコンタクトを取った。例えば、障害学生関係の会議等に出向いて行って、NETAC のことを伝えていった。多くの大学はいろんな種類の障害学生を受け入れているので、聴覚障害学生だけを対象にした大会には出席できないことがある。そのため、障害学生全般を対象にした大会（Ex. AHEAD）に NETAC 側が出向いて行って、いろんな情報を伝えて行くことが大事だと思った。それらの大会やイベントで NETAC の宣伝を行い、そこで名刺をもらったら、その裏にその人が抱えている問題を書いておいて、帰ってきてから必要な情報を送ることにしている。

サイトコーディネーターで担いきれない部分については、他の専門家の力を借りて講演やワークショップをひらいたり、Material を作る時に手伝ってもらうこともある。例えば、Access program のようなワークショップをひらいて、ALDs FM システム、ループシステムについて説明するプログラム（ALDs の専門家の援助で作った）。その他 ノートテイク、C-print、CART、Distance Learning など特定領域に関する質問に対して、コーディネーターが十分に回答できない場合は、専門家と質問者の間を取り持ち、答えてもらったりもする。実際は、通訳や字幕に関する質問が最も多い。

このネットワーク作りにおいて留意していることは、コーディネーターがすべて指示すると関係が悪くなるので、専門家を連れてきて説明してもらうというような方法をとることである。その方がよくわかってもらえる。特に、ろう者である専門家（特に Ph.D を持っている者）が来ると、大学にとってのいいモデルになる。しかも、専門家の話を、通訳を通して聞くことになるので、通訳の使い方も同時に理解してもらうことができる。

以下は、ネットワークの定着化をめざして行っている活動内容である。

- 1) Advisory groups: 年に 4 回障害学生支援サービス提供者やカウンセラーなどを集めて、サービスの内容について検討する。NTID で作成された新しい Material について検討し合ったり、個々のニーズについて話をしたりする。
- 2) Newsletters: NETAC ニュースレターと州内のニュースレターの 2 種類のニュースレターを作成し、各州に配布している。
- 3) istserver: ML を作って情報交換をする (PEPNet ML: 聴覚障害学生サポートについての議論をする ML。一人が質問すると、全米各地から答えが返ってきて、みんなでその内容を勉強することができる。/ 州内の ML: イベントのアナウンスをする)。
- 4) Workshops: よりフォーマルな形態で提供している。ワークショップ、トレーニング、講演会など。テーマは例えば、「聴覚障害学生に開かれた大学を作るために」「聴覚障害学生のリテラシー向上のために」がある。
- 5) SCS 研修・各地域での研修会。
- 6) フォローアップ: 一度情報を送った人に対して、その後必要な情報が入

ったら、その情報を提供する。

ここで、コーディネーターにとって本質的で重要な仕事とは、周りの人が持っている問題を的確に把握し、それにぴったりとはまる、シンプルで使いやすい良い Material を提供していくことである。もし、Material のない領域に関する質問があったときには、それに対応できそうな専門家を探して解決する必要がある。問題を解決してあげれば、大学側は NETAC の重要性をわかってもらえる。また、Peer の存在があれば、同じ問題を持っている人たちの集まりを持つことで、お互いに解決していける。NETAC とは、聴覚障害学生サポートに対して大きな関心を持っている人の集まり。あるいは、「ここがよくわからないから教えてほしい」と言える人の集まりなのである。

サポートサービス

・ RIT で提供しているプログラムについて

RIT は 8 つの学部からなっている。NTID はそのうちの一つであり、準学士を提供している。

学士のレベルには、3 つのレベルがあり、その中の AOS、AAS は、学生が実際に職場で働くためのもので、職業専門学校的である。AAS プログラムは、3 ~ 4 年前にできたプログラムであり、聾者と難聴者が編入学できるようにするための教育を行っている。

NTID の他の 7 つの学部では、基本的に学士レベルの教育を提供しており、もしろうの学生が学士を取得したいのであれば、7 つの中のどれかから教育を受けなければならない。うち 4 つは、それぞれ別々の入学条件がある。それに関しては、後で説明をする。

もし聾の学生が、学士を取得しようとするならば、この学生サポートサービスが提供される。現在 NTID には、1,100 名の学生がおり、その半分の 500 人から 600 人程度の人たちが、主に学士取得のために学習している。

今回は、4 つのサービスのうち、一つのサービスについて説明する。他の 3 つもほぼ同じ内容である。

・ 学生サポートサービスについて

そのサービスの内容は大きく 2 つに分けられる。一つはアクセスサービス、もう一つはアカデミックサービスである。ここでは、アクセスサポートサービス、主にノートテイキングサービスについて述べる。

ここには多くの通訳をする人がおり、この人たちは 100,000 時間の通訳サービスを提供している。ノートテイキングに関しては 50,000 時間を提供している。なぜ、通訳とノートテイキングの時間に差があるのか。それは、ソリューションテクノロジーすなわち C-print などの技術的なサポートがあるため、ノートテイキングの方が時間が短いのである。そのほかにノートテイカーが 4 人いるのに対して通訳は 2 人しかいないというのも時間に差ができる理由で

ある。ひとつのクラスで2人通訳がいる場合は、2時間で換算するのに、ノートテイキングの場合は1人とするので、それが時間の差になって現れてきている。その他、スタジオやラボでの授業に関して、ノートテイキングは必要ないけれども、通訳は必要になる。これも時間の差になって現れる理由だという。

白澤記録:通訳時間とノートテイク時間の差は? 一つのクラスで手話通訳は二人つくが、ノートテイクは一人しかつかないので時間数が少なくなる。また、実習などは手話通訳だけでノートテイクをつけないことも多い。さらにC-printなど文字通訳を利用するときはノートテイクが不要になるので数が少ない。

1. ノートテイカーになるための必要条件

ここに提示しているのがノートテイカーになるための必要条件である。ここに書いてあることをノートテイカーを受ける学生がやらなければならないことである。すべてクラスで行われていることを記録しなければいけない。それがノートテイカーの役目である。

2. ノートテイキングの提供方法

学生はオンラインを使って、所定の記入をする。

学生がリクエストすると自動的にコーディネーターのところにリストが出来上がる。

それを使い、通訳が必要であるという募集をかけたり、このクラスにはノートテイカーがつかますよという手紙を先生方に送ったり、学生に対して、ノートテイカー派遣の報告を送ったりすることが自動的に楽にできるようになるコンピュータシステムになっている。

これだけ多くの学生がいて、クラスが多いのでオンラインで依頼することは理にかなっていることだと思われる。昔は、一つひとつリクエストの依頼を用紙に記入し、手渡して行っていた。現在は、学生数が多くなり、オンラインシステムによって、便利になってきている。

3. リクエストプロセス

一端ノートテイカーのリクエストがされると、オンラインシステム上に「ノート」というマークがつけられる。それをクリックすることで、学生は、オンラインで自分のノートテイカーの状況を見ることができる。実際に講義でとったノートはスキャンされ、システムの中に組み込まれていき、ノートテイカーの書いたノートをみることができる。

全クラスの内容などの詳細は、すべて一覧で出てくる。毎週毎週コースをとるたびに、授業の内容が記録として残り、毎日記録更新が行われている。スキャンされたノートは、4年間保存される。かつては手書きでコピーをしていたが、現在は先端技術を使い、便利になってきている。かつてはコピーしていたので、紙がたくさん必要で、もったいなかったが、コンピュータの利用でその問題は解消された。このオンラインシステムができた背景としては、学生の要望が大きい。

4. ノートテイカーの養成について

ノートテイカーが必ず受けなければならないコースがあり、2つのトレーニングの方法がある。出向いてトレーニングを行う方法と、オンラインを使った方法である。

1) コースで指導する内容

- Writing:間違いなくスペルができる、読みやすく書く、など
- Page Formatting:どんな風にノートテイカーがノートテイクをするのが理想であるか。Formattingとは、ノートテイキングの形式。
- Formatting ストラテジー:学生はすべての情報を知りたいので、ノートテイカーは、すべてを書く必要がある。
- Emphasis: ノートテイクをするにあたって強調したい箇所・ポイントなどを示す。
- Listening Cues: クラスで何が起きているのかを知るための手がかりとするために、場所、声の調子、動作など、大事なことを記入する。大事なことを話すときには、教師は間をおいたりする。こうした時には書き漏らさずに、きちんとノートテイキングする。また、教師のつかっている声のトーンや繰り返して言っていることなどもきちんとノートテイキングする。これらは、健聴学生が聾学生のためにノートテイクをするにあたり常に意識しておかなければならないことである。
- Class ストラテジー: ノートテイカーがクラスの中で必要とされるテクニックのこと。
- Expectation: ノートテイカーに期待されること。10分前にくる、授業が終わった後も10分後にも残る。これは授業後も重要なことが起こるかもしれないからである。強調したいことは、ノートテイカーは1時間6ドル42セントのお金をもらって雇用されているということ。他の職業と同様にお金をもらっていることなので、ノートテイカーにもしっかりやってもらわないといけない。

5 . ノートテイカーに対する評価

ノートテイカーは、学期が終わるごとにコーディネーターにあってノートテイカーとしての質のチェックを受けるシステムとなっている。またコーディネーターと会う前に、ノートテイクを受けている聾学生からのチェックを受けている。そしてコーディネーターは、聾学生からの情報をもとに話を進めたり、ノートテイカーに対して質疑応答をしたりする。コーディネーターとして聾学生が言っていること、ノートテイカーが、これまで指示したことをしっかり守っているのかをチェックし、評価するようにしている。これは、コーディネーターがノートテイカーを雇い、仕事をしていく上で、非常に大切なところである。

また、ノートテイカーに対する評価は、コーディネーターによる評価のほかに、チューター（指導員）による評価と、クラスを教えている教授の評価もある。

授業が終わった後に手書きのノート、あるいはコンピュータで処理したものをコーディネーターに渡さなければならない。コーディネーターへのコンタクトは、手書きで書くこともできるし、コンピュータによるキーインもできる。ノートテイカーの人たちは、自分のコンピュータをもってきている。コンピュータの利用は増えつつある。その他にノートテイカーの組織からタブレット PC が提供されることもあるが各自のコンピュータを使っている人が多くなってきている。1,200 ドルでタブレット PC は購入できる。仕様によって値段は異なる。

アカデミックサービス

・現状について

ノートテイキングの他に音声認識についての技術が開発が進められている。それが提供されるようになれば、さらにサポートが発展すると思われる。その音声認識の利点は、より直接的な情報提供ができることである。しかし悪い点もある。話した内容がすべて情報となり、情報が多すぎて困ることにもなる。ノートテイクの場合にはノートテイカーが話す内容をまとめた提供するので、情報はすべてではない。しかし音声認識は、音声技術で話した内容が情報として変換されてしまうので、多すぎる情報ということになってしまう。10年後にはこの技術どうなるのか。

・アカデミックサポートサービス

・指導員について

アカデミックサポートサービス、学習サービスについて話す。サポートサービスには、にはいくつかの組織がある。この組織には、サポートファカルティというものがあり、聾の学生をサポートする特別な指導者がいる部門である。そしてその指導員は、ひとそれぞれに専門的な分野をもっている。私の部門には3人の特別指導員がいる。一人はマーケティング、会計、もう一人はマネージメントや国際ビジネスである。サポートサービスは、いくつかの部門をもち、それぞれが専門分野をもつ。それらの指導員は、NTIDの中の指導員である。指導者は、ほとんど1対1、あるいは少人数でサポートをおこなっている。サポートサービスのためのリストがあり、どこに聾学生がいるのかがわかるようになっている。このように指導員は、できるだけ聾学生をサポートができるようにしている。ひとりの指導員は、2つとか3つとか、4つとか、5つとかの異なった授業を担当し、また聾学生の指導を行っている。リストの中には、ノートテイカーのリストのほか、ノートテイカーは誰か、指導員は誰かがわかるようになっている。更に指導員は、アドバイスやカウンセリングも行っている。指導員としての労力は、実際にクラスを行っている先生とより協力的に行っていくことである。実際に聾学生が、受けている授業の教員と良い関係をもつことが大切である。聾学生を指導する人たちは、聾学生の指導もあるが、実際にクラスを教えている教員たちへの働きかけを行っている。リエイゾンのサービスがあるが、クラスを教えている教員たちへのサービス、働きかけ、役割を担っている。

教員の中には、聾学生を初めて受け持つ人もおり、聾学生とどう接していいのかわからない教員もいる。こうした教員に対して働きかけをしていかなければいけない。教員も聾学生をどのように教えたらいいのかわからなければ、オンラインでコールアクトというサ

イトや、クラスアクトというサイトがあり、それにアクセスして、私たちとコンタクトをとることが可能である。その他にも分野がいろいろあり。教え方やコミュニケーションの取り方などができるようになっている。このように指導員が教員を指導する。

昨日、NITAC と PEPNet について話を聞いた時に、インフォメーションシートに関して話しを聞いたと思うが、NTID もオンラインシステムでファカルティに対して情報を提供できるようになっている。もちろんこの情報は、聾を担当する NTID の教員だけではなく世界中からアクセスがあり、聾者への教育の情報を得ている。PEPNet の人たちもこのウェブサイトを通じて、小冊子、ガイドブックを作り日本や中国、ロシアなど世界などへ提供する事業を行うようにしている。PEPNetJAPAN ができ、ウェブサイトが完成すれば世界中に提供は可能となる。ウェブサイトの中の情報はプリントアウトもされて提供できる。

2. サポートの成果について

IMPORTANT BENCHMARK : NTID の 86% の学生が次の学期も大学に残り、長期休暇後も大学に戻ってくる。また 68% の聾学生は学士をもってしっかり卒業している。健聴学生は 60% が卒業しているが、聾学生の方が多い。

誇りに思うことは全米一般の聾の学生の卒業率は 25% になっているのに対して、RIT は多くの学生が卒業している。これは誇りである。

この数字は、いままで 2 つのサポートが学生に反映されている証拠である。どのように RIT に入学できるのか。RIT に入学できる条件は、聾学生も同じである。全国テストがありその結果である。高校時代にとった成績表なども関係する。その他に高校からの推薦書などを見て学生にあったところに配置するようにする。

3. 履修方法について

学生の入学レベルは 3 つあって、学士レベル、準学士レベル、学士コースに編入のための AAS (編入学) コースがある。入学した学生の中には、夏に特別なコースに参加をすることが必要な学生もいる。入学許可を得た学生は RIT の 3 つのいずれかに配属されるようになっている。たとえばアメリカには ACT 試験と SAT 試験の 2 つの試験がある。そのうちの 하나가表示される。聾学生の筆記能力についての記述がある。RIT で筆記試験があり、その点によってレベルが決まり、ライティングクラスに入る。聾の数学の能力についても調べられ、学生の力にそって配属される RIT 内にはビジネススクールがあり、RIT とビジネススクールに入るにしても、その条件に見合った条件がなければならない。学生は、入学許可を得たら、自分の専門学部に入るが、学力レベルにあったクラスに配属されていく。学士のプログラムで入学してくる学生にはオリエンテーションがある。その時に聾学生は、特別指導の教員に会う機会がある。その時に聾学生に対して、サポートサービスについて情報を提供している。また聾学生のとるべきクラスや、卒業までに必要なプロセスについても話をする。もちろん学生によって、1 年間のスケジュールは異なる。学生のスケジュールと指導員のサービスとが、どのようにマッチするのかについても学生に話をする。たとえば、金融関係のコースが 4 つセクションがあり、どの教員が聾学生を教えることができるかを見て、私たちがそのうちの 1 つを選ぶ。そして、4 つのうちの一つを決めた場合、聾学生にそのクラスをとるように勧める。そして金融のクラスは春、冬、秋のクラスの 3

学期があり、私たちは2つの学期を選ぶかもしれない。たとえば秋と冬、そしてあとの1学期は別なクラスや先生を選ぶ。したがって私たちがどれを選ぶかは、聾にそれを伝え、聾学生がどのクラス受講をとっていけばよいかを指導している。3つの学期にそれが可能ではないかということは、NTID や RIT にいる多くの学生に対してすべて行うということは、なかなかできない。他の大学は、聾学生が3人とか4人とかで少ない人数であるからこのようなことに関して問題はない。RIT のように聾学生の多い学校は、よりパット氏やジム氏の負担が大きくなる。このようなこともあって、聾学生は、4つか5つのコースをとることになる。聾学生との話し合いの中で、コースをいくつとるかが決定される。

4. 指導員と学生との関係作りについて

指導員は手紙や e-mail などによって、「私が指導員をしていますよ」と知らせ、聾学生に指導教員の元にくるように促している。また指導員も学生がくるのをまっているのではなく、学生がいるクラスに出向いていくこともある。そうすることで私たちが学生に対してしっかりしたサービスを提供していることや、またチュータの意義を示すこともやっている。チュータは、ボランティアのようなもので、学生にとって強制力はない。無理に学生は、指導員のところにくる必要はない。もし学生が、私たちのところに来た場合、私たちが提供するものは、どのような宿題がでるのかを提供したり、コースにおける試験などや模擬テストを提供したりしている。そのような提供をするが、授業内容を教えたり、指導したりすることはない。コースに出てしっかり学習する責任は学生にある。もちろん学生に問題の答えを教えたりすることはない。責任は、学生にも教員にもある、私たちにもある。学生たちは勉強する義務があり、私たちは、ルールにしたがった指導をしていかなければならない。学生の中には、異なった期待をもつ者もないことはないが、私たちが行っていることは、学生によりよい学生生活を教えるのであって、答えをすぐに求めるようなことはしない。すなわち、私たちが提供するものは、私たちが、どのようにによりよい学習能力をいかに身につけるかであり、どのように答えを出すのかは提供しない。プロセスを教えるのが機能であり、答えを出すことはしない。

レイゾンプログラムを例にとる。コースの中には、参加点数、授業中に一番多く発言をした人にはポイントを与えるシステムがある。クラス内での発言だけではなく、学生が指導員に出向くことで、ポイントをもらえるようになっている。したがって、クラス内の学生とクラス外のチュータとの意識・協力によって行っている。もちろん私たちの仕事は、ビジネススクールでクラスを指導することではない。私たちの仕事は、聾学生に情報を提供することであり、それ以外に学生たちがキャンパス内外で使える情報を提供することである。たとえば聾学生の中には、「こうしたことを知っていますか？」と答えを求めてくることがある。この時、私たちはあの先生にこうしたことを聞きましたか、他の先生に聞きましたか？など質問をして他の先生の意見を聞くように指導している。もしその学生が聞いていませんと言ったら、あの先生に聞いて来なさいと他に先生に聞くことを促したりすることを行う。難しいのは、どこでどう判断を下すかである。私たちが答えを出していい部分か、ほかところで情報が提供できるのであれば私たちは出してはいけない。そのあたりのバランスが難しい。私たちが情報を与えないかわりに、自分の力で情報を見つけることができるようにするかのバランスである。私たちは情報を提供するけれども、私た

ちをたよりにして欲しくない。学生たちの自主性に任せたい。私たちは学生をサポートしたい。しかしそれより学生たちには、より独立性、自主性を育ててほしいと思っている。そのあたりのバランスが大切である。自主性、独立心を促すというバランスがチャレンジさせる部分である。たとえば一つのクラスがあって聾の学生が一人だけ健聴学生の中にいるとすると、教員の中には自分に責任があるのではなく、サポートサービスに責任があると思ってしまう。しかしこれは実際にはそうでない。もちろん聾学生にサポートサービスをするが、実際に聾学生を教えているクラスの教員も責任がある。教員の中には、聾学生に対してどうしていいのかという質問をする教員がいる。私は、こうして聞いてくる教員に、健聴学生にはどのようにしているのかと聞く。そうすると具体的に答えてくる。そうしたら聞こえる人と同様に聾学生にも対等に接したらどうですかという提案をする。学校として健聴学生も聾学生も同じレベルで受け入れることを期待している。ただ私たちは、大切なバックアップとして聾学生をサポートするという機能をもって存在している。聾学生に対して言っていることと同様のことを、教員にもいう。教員も私たちを頼りにして欲しくない。教員には、聾学生を教えることに対して、より自主性や独自性をもってもらいたいと思っている。もちろん教員の中には、聾学生をすぐ受け入れる人もいれば、抵抗をもつ人もいる。世の中にはいろいろな人がいるからこれは仕方ない。

Q：サポート部門の使命の範囲はどこまでですか？健聴学生と聾学生の指導する範囲、ボーダはどこか

A：ポリシーや規律は、学校に規律があり、私たちが決めることはできない。情報提供に関しても情報提供できるものとできないものがある。こうしたことは、やってはいけないなどの判断は、経験にまかせてやっていることもある。なかなか難しい。聾者と健聴者との境というのも、学校側が責任をもっている。その境に判断を下すことはできない。学校とは college of business の方が境界を判断する。この人たちは NTID から college of business に派遣されてきているので、どこからどこまではどちらの仕事というまでは、この指導員たちは決めないで、このホストである college of business が決定する。すなわち NTID の決定にしたがう。もちろん健聴学生にもサービスを提供しているが、境は学校側に任せている。もちろん学生が受けるサービスは年ごとに少なくなってくる。そして教員についても同じようなことが言える。聾学生に対してはじめのうちはサービスをいろいろと情報提供をしていくが、年数や回を重ねるごとにだんだんサービスを受ける回数は少なくなっている。重要なのは、私たちが求めているのは学生たちがより自立的に独立心をもって欲しいということで、そうやって欲しいと思っている。指導員が行うことは、答えを教えることではなく、答えをどのように導きだしたらよいかということある。技術などを提供するのであって、いちいち答えを出すことなどはしない。

Q：ノートテイクはいつもで期限なく、いつでも受け入れ可能であるのか。期限がなくいつもで希望すればノートテイクを手にいれることができるのか。

A：ノートテイクの依頼は、学期の前までに申しこみが条件である。ノートテイクは自分の専門学部でなければいけない。もしくは、これまでに1回クラスをとったこと

がある科目に関してはノートテイクを依頼することができる。いつでもノートテイクを依頼することはできる。通訳は異なる。もちろん質のよいノートテイクを求めるには学期までに申し込みが必要である、

Q：学校では、ノートテイクはどれほどの時間を担当するのか。

A：ノートテイクは、上限20時間までできる。

Q：学生はどれだけノートテイクを使うことができるのか。

A：学生は依頼すれば必要なだけノートテイクをつけることができる。しかし、例えば2クラスがあり、ひとつはとらなくてもいいにもかかわらずノートテイクを使う場合がある。そうした場合、私たちがアドバイスをしてちゃんととらなければならないクラスを学生に教え、そのクラスでノートテイクをつけるようにアドバイスをする。どのクラスをとるべきかの指導をする。

Q：ノートテイクの指導を学校側の体制のもとにおいているが、ノートテイクの評価基準は州レベルか、学校レベルか。

A：条件はRIT、NTIDの中で、基準をもっている。長い歴史とこれまでの長い経験で、聾者をこれまで多く受け入れてきている。ノートテイク自身、私たちがはじめたと言っても過言ではない。質は私たちの基準は全国レベルではない。ノートテイクに関する試験などもない。けれども経験と知識は、他の学校の基準になって出ていく。

Q：ノートテイクと聾学生との相性との問題はないのか。相性が悪いと思うようなノートテイクが期待できないのではないか。これは実際どうか。

A：ミノルの例をここに出す。彼はいいノートテイクを採用した。こだわった。何回も私のところに来た。学期の始まる前にどのクラスにどのノートテイクをつけたいのかという話をした。もし気にいったノートテイクがいて、以前にそのノートテイクにノートテイクをしてもらい、いいと思ったら個人的にそのノートテイクのところに行ってお願いすることをしている学生もいる。その他、クラスを教えている先生が特定のノートテイクを選ぶということもある。これは、そのノートテイクが担当の先生の助手をしていたとか、教科に対して特別な知識があるため、先生がそのノートテイクを選ぶということがある。コーディネータが個人的に依頼することもあれば、個人的に選ぶこともできる。ノートテイクに大切なものがある。一つは質であり、ひとつは相性である。質は悪いことはない。ノートテイクと相性が悪いということもあるが、すごくうまいノートテイクもいる。相性が合わなくても質の高い人であれば、そういう人と一緒に活動することも大切である。まわりを見渡しても、相性がわるくてもいい仕事ができることもある。学生には、相性が悪くても一緒に活動することで独立性を養ったり、人間性を養ったりすることができる。あってはならないことは、質を悪くすることである。質と相性は、質の方が大切である。ミノルは、コーディネータに会っているいると相談をしてきた。

Q：学生はノートテイクについて相談をしに来るのか。

A：多くの学生が相談にくる。こうした相談にくることを私たちは望んでいる。学生がくることで、信頼関係が生まれてくる。サービスにおいては、大切なことである。質の高いものを得ようとする人は、それだけ高いものを望んでいる。

Q：聾学生の隣にノートテイクがいるのであれば、相性の問題が発生するが、ノートテイクが会う機会がなければ相性の問題はないように思えるが。人と合う、合わないというのは人種差別、民族間問題とかによって生まれるのか。

A：人種関係などはない。ノートテイクによって依頼学生の隣でノートテイクする人もいる。聾学生はノートテイクと離れて座りたければすわってもいいし、そうでなければ一緒に座ればいい。ノートテイクを見たくない人もいる。聾学生に選択権がある。よいノートテイクは、聾学生とのコミュニケーションがよい。クラスが始まる前に、聾とノートテイクが話す必要がある。それに関して質の向上のコミュニケーションが大切となる。

日本の現在のノートテイクの状況は、ノートテイクだけが唯一の通訳方法であると聞いている。日本は、聾者の隣でノートテイクをみながら行っているので、そこから相性という問題が発生するのではないかと思われる。アメリカの場合には、ノートテイクの他にいろいろなサービスがある。それだけの問題が発生しても、他の方法でカバーできる。それだけで問題となることはない。むしろ技術の方が重要である。

Q：ノートテイクが終わった後、聾学生から評価を得るということだが、その評価の内容や方法はどうなっているのか。

A：学期の4～5週後目に聾学生にノートテイクに関する評価表が送られてくる。評価表はノートテイクに渡されて、その評価表を聾学生に渡さなければならない。その質問の最初には、たとえば聾学生に自分がノートテイクであると自己紹介をしたかがある。ノートテイクについて他の質問に関して行われる。ノートテイクについてしっかりした情報があるか、ノートテイクがどのようにしたら質が上がるかの質問もある。評価表をもらったならノートテイクはその質問表をもって私のところ（コーディネータ）のところにくる。そして受け取った質問を見ながら、コーディネータとノートテイクと話し合いを行う。新しくきたノートテイクであれば、試用期間のノートテイクに問題があればノートテイクをかえることができる。

4～5週目の後は多くのノートテイクが私のところにくる。

クラスで教えている先生は、オンラインでどのようにノートテイクが行われているのかをみることができる。そのノートをみていて変えなければならないものがあれば私のところに連絡して内容を変えたりできる。これがコンピュータをつかって印刷したノートである。

Q：現在正規のクラスをいくつ担当しているのか。担当している聾学生の人数はどれほどか。

A：5～6つのクラスで、その中に2～6人の聾学生がいる。一つのクラスには13人もいる。教えているのは1クラスだけである。

Q：教えている教員は、オンライン上の情報をチェックする必要があるか

A：必ずしもアクセスする必要はない。多くの教員はアクセスをし、自分がどのように学生がノートをとっているのかを見たり、授業内容を確認したりするためにアクセスする教員も多い。アクセスしない教員もいる。

ノートテイクには賞がある。一番いいノートテイクをした人には卒業式のときに賞を与える。教員の中にはノートテイクの書いたものをもとにして、次の授業を計画する人もいる。ノートテイクが作ったものを学生全員に配布した例もある。アクセスできるのはすべての学生ではない。アクセスできるのは聾学生だけである。前学期にあった例として、ノートテイクした内容を学生に配布した。教師はアクセスする権限があり、印刷して配布してもかまわない。

いま3つの異なったノートテイクの例を示したが、クラスによって書き方や要約の書き方が違う。ノートテイクによって書き方がすべて異なる。これが正しいというノートテイクの書き方はない。ノートテイクのスタイルがあり、そのスタイルを続けることで、ノートテイクを受ける聾学生もよい情報を得ることができるようになる。クラスや講義の内容によって、ノートテイクの仕方が異なる。例えば、このクラスはノートテイクにコンピュータを使ってはいけないということもあり、この場合は手書きである。

Q：ノートテイクトレーニングをして、そのノートテイクがいい評価でなければ、質の向上を期待できるトレーニングプログラムはあるのか。

A：コーディネータとノートテイクとの間で、1対1で対応を図るようにしている。ノートテイクのトレーニングのためのクラスはない。

ノートテイクについて

10年前は教師がノートテイクをしていた。またノートテイクサービスが10年前に始められた。そしてトレーニングの質の向上は、一人ひとりにコーディネータが話をしたりしている。(20年前には教職員がコーディネータを自ら担当していた。しかし10年前に専属のコーディネータがつくようになって、そこからノートテイクとコーディネータがコミュニケーションする中できちんとノートテイクの方法を教えたり、何が問題であるかを話あったりして質の向上に結びつけてきた)

Q：スキルアップの指導があると聞いた。ノートテイクが技術的に足りないから、指導してくれということで指導が得られるのか。

A：1対1で面接の中で、技術の向上はその時に話される。トレーニングというものはない。

アクセスサービス

(スティーブ氏より：25年間、通訳の仕事をしている。彼はASL(アメリカ手話)と音声通訳の資格をもっている。これまで一般教養やスタッフメンバーの中でインタープリタサービスをどのようにするのかの仕事をしてきた。かつて1991年に筑波にきた。)

．サービスの概要

1．通訳サービスの構成

通訳は、重要なサービスの1つである。一般教養、映像、ビジネス、コンピュータ、科学のマネージャーがいる。それぞれのセクションにはチームが作られ、そこにはマネージャーやコーディネータといった上司がいる。コーディネータの役割は、リクエストを集めたり、評価をしたり、何を優先すべきかを決定したりする。一番下のチームインタープリタは、通訳の所属する部門があって、それぞれ所属する分野で活躍し、通訳を行っている。

それぞれのコースの内容や語彙は、熟知している。学生の要求はいろいろがあるが、たとえば一般教養で出されたものは、科学分野にいたり、その逆もあったりする。他の分野に情報がいくこともある。C-Printは、新たにアクセスサービスに加わり、C-Printは音声と字幕、テキスト、スピーチで情報を得る。

1週間のうち100人の通訳が活躍し、2,000時間の通訳サービスを行っている。もう一方の、1,000時間は地域での通訳の仕事である。学校が雇用している通訳者以外に外からとってくる。それが1,000時間である。1,000人の通訳者で使い果たしてしまってもっとさらに依頼があるときには外に頼めるから、そういうリソースが外にあることは大変便利なことである。外部の通訳をたよりにしている。それでもまだ十分ではない。最近ではビデオリアルタイムキャプションサービスを使用している。いつも何かがでてくるという状況である。

2．サービスの種類

メインのサービスは、手話の通訳である。サービスは、学生のニーズのもとづいて行われる。あの人は好き、あの人は嫌いという学生の好き嫌いによっては行われぬ。

対应手話通訳というものがあり、それは主として英語に書いてある文で、口で英語に直して、手では手話をおこなっている。対应手話であるが口では英語をしゃべり、ASL(アメリカ手話)をやっているけれども文法は英語の文法のままである。これがトランジットレタリズムというものである。状況に応じて修正も行ったりする。さまざまな学生ニーズにあうようにしている。

ASL(アメリカ手話)は、サインで行うが、ASL(アメリカ手話)を意味する。しかし英語のもとづいた手話はこのような方法を意味する。学生の状況によって異なるが、ASL

(アメリカ手話)に慣れている学生はそれで大丈夫であるし、口話による学生はまた別の通訳をしたりする。

他のサービスもあり、タクタイルは、触手話がある。これは目の見えない盲聾者のために行う手話で、手の上に手を置いて行う手話である。クローズビジョン、これは視野の狭い弱視者のために行う小さくして行う手話である。こうしたサービスもある。

C-Print は、サインをしない学生にも対応できる。学生によっては、キュードスピーチを時折さまざまな場面で、必要とする学生もいる。いろいろな学生がおり、何がなかで必要でないか、必要に応じてサービスを提供している。

コンピュータベースのウェブシステムがある。このシステムは、コースのレジスタをおこなったりするものである。このコンピュータシステムは、ノートテイキングの依頼システムと同じもので、これで通訳の依頼ができる。2番目のインテグレートクォータリレジストレーションは、これは学生がクラスをとるときに、このクラスをとりたいという依頼と同時に通訳も依頼することができるというシステムである。それぞれの学期ごとにどのコースをとるか選択をする。他にも授業以外の活動、たとえば課外学習などに対しても依頼できる。これが一番下のスペシャルリクエストである。

3. 通訳サービスの所属について

通訳の所属する部門は、コンピュータオペレーション部門である。コンピュータオペレーション部門は、通訳以外にメディアやコンピュータ関係アクセスサービスを行っている部門である。その部門に通訳は所属している。それ以前には、コンピュータ関係ではなくアカデミックプログラム部門にという所に所属していた。現在は部門が変わったことで試験中であり、これからどうなるのかわからない。

4. 通訳スタッフの待遇について

学校に雇用されているフルタイム通訳スタッフは、10ヶ月で契約している。フルタイムスタッフは、1週間で40時間を働くのが条件であり、そのうち40時間のうち20時間は実際に手話を使って仕事をするのが条件である。20時間というのは年々減っている。

私がここに来た1986年には28時間が必要であったが、現在では25時間までに減ってきた。80年代後期になって20時間になった。これは、手話通訳の腱鞘炎など手話通訳者の健康を守る意味で少なくなった。その20時間は担当者の人たちにとっては、周りに理解をもらうのが難しい。というのはフルタイムで40時間働かなければならないということで雇用されて、実際には20時間しか労働しないというのは、手話関係者以外の人たちからは、フェアではないと見られてしまう。このあたりは、なかなか問題というか難しいところである。

他の学校と給料と比べてもなかなか難しいものがある。たとえば1時間と言っても実際に手話をしている1時間の時もあり、手話をしていない1時間もあり、なかなか他の学校と比べようがない部分がある。金銭問題があるが、20時間に減らしたことによって健康状態がしっかり守られるようになったのはよいことである。

通訳の分野は、まだまだ成長し、新しい分野である。私が当初、所属したときに25年後にこの通訳という仕事が残っているのか心配だったくらいである。実際私たちは、カレ

ッジの中退者、中退して手話の通訳養成プログラムに入ったものですからおどろきますよね。通訳者全部が中退者ではなく、私に関しては中退者である。そして通訳プログラムを通して通訳者になったという経歴がある。実際、私たちのところにいる通訳者は平均して13年間働いている人たちである。この人たちが13年たった今、やっと通訳のプロフェッショナルとして認められるようになった。経験も積んできた。実際、通訳士レベルには4段階がある。一番上までいくのに20年間かかるくらいのもになってきている。したがって手話通訳士というものがだんだん認められてきていると言える。通訳の分野にも新たなジャンルがでてきていて、通訳になる人たちの魅力なものになってきている。それゆえに現在も13~14人のフルタイム通訳を雇用できるようになってきている。学校外から通訳士を雇用している。今現在では1人だけ外からフリーの通訳士を雇用している。

5. 予算について

NTID に関する予算であるが、他の学校に比べて恵まれている。それは、国から予算が直接出ているということである。実際予算が多くあってももらえるのは幸運であるが、毎年予算以上にその予算を使ってしまう。というのはメインストリームにいく聾学生が増えていくということがある。事実、毎年もらっている以上にお金に費やしているのが現状である。

1年間に通訳のためのいくら使われているのかというと、600万ドル、日本円で6億円弱がその費用に使われている。とても多額の金額である。通訳者のお金に関して、もし学生がNTIDに所属している場合は、国からお金がでるので学校は払わなければいけない。もしNTIDに所属していない学生が通訳を必要とするときには、RITじゃない人の場合にはどうなるのかというと、どこから通訳のお金がでているのかというと、NTIDにいる学生は条件を満たしてNTIDにはいつてきている。その学生は、RITと同じものとして扱われる。もちろんNTIDに所属している人たちの専門分野は、RITの分野に所属している。これは特別な条件となっている。

これからNYUなど他の大学は、大学が通訳士に対してお金を支払わなければならないが、NTIDは、特別な条件があり、国からお金がでることになっている。実際NTIDにいる学生は他の大学から比べものすごい数であり、RITからお金を払うことは無理である。このような人数のこともあり、国から直接聾学生をサポートするお金がでることになる。しかし他の大学は、学校側が通訳に対してお金を支払わなければならない。NTIDの条件は、アメリカ国内の中でも特別な学校であるということがわかる。

6. サービス提供方法について

提供されるアクセスサービスは、どのように提供されるのか。それは、学生からの依頼ではじまる。事実、学生があまりにも多いので同じクラスをとる聾学生を同じにするようにする。これをチャンネルングという表現をする。学校が始まる以前の段階で、コンピュータなどを使って聾学生がどのクラスに通訳が必要かを調べ、できるだけ同じ授業をとる人たちが一緒にクラスになるように分けるよう取り組みを行っている。理想的には聾学生がどこにでも、いつでもいけることである。実際、聾学生や難聴学生には、見えないバリアがあり、必ずしも全員がすべてのものにサービスを受けたりアクセスができたりするこ

とはない。学部の中には同じ内容にコースがあり、たとえば4つのコースがあり、同じ内容であっても教える先生が違うことがある。しかし学生の中には、この先生がいい、この先生にしたいということがあり、必ずしも聾学生と一緒にできない。学生の専門分野が決まっている以上、これをとりたいクラス、とりたくないクラスというのがあり、それに合わせて同じ内容にクラスでもばらばらにして配属しなければいけないということもある。したがってすべての聾学生をひとつの同じクラスにまとめることはなかなか難しい。聾学生は、この先生がいいと選べればいいけれど、そこまではしきれないからこちらからお願いして通訳サービスをつけるため、できるだけ一つのところに集まってもらうようお願いしている。もちろんとれるクラスは、制限がある。しかし学部を決めることに関しては、まったくそういうバリアはない。聾学生はどのカリキュラムの、どの分野でも専攻ができるのは事実である。

学生のニーズによって C-Print と通訳が同時にサービスが提供されることもある。ある学生は、ASL (アメリカ手話) に堪能であるからサイン、ある学生は、ASL (アメリカ手話) がまったくわからないために C-Print を要望することもある。学生の要望によってサービスが異なる。聾学生といっても ASL (アメリカ手話) がまったく役に立たないこともある。そうした学生は、C-Print に頼るという方法もある。もし学生が手話を理解できる場合は、C-Print をつける資格はない。手話ができる学生は、まず手話通訳を使いなさいということである。

22 人の学生は、C-Print と使ってもよいと判断され、450 人はだめであると言われている。それでも C-Print に対するニーズはどんどん増加傾向にある。C-Print にニーズが広がっている理由は、新しい技術に興味があるからである。新しい技術は、できるたびごとに使ってみたいという要望で自然なことである。

最大の課題である。C-Print のニーズが大きくなってきていることは ASL (アメリカ手話) ができない人が増えているということではない。通訳状況がかわってきている。今では高校で C-Print を使っている学生もいる。高校時代に C-Print に慣れて NTID に入学してくる。そうした学生が増えているという状況もある。それによって C-Print の必要性が増えているということもある。そのほかに ASL (アメリカ手話) に堪能な学生に加え、英語に堪能な学生がいる、そうした学生たち C-Print の方を望んでいる学生もいる。英語に堪能な聾学生は、何を実際に英語で言っているのか通訳をかいさないで、教師の口で言っていることが何なのかというのを聞きたいということがあり、そうした学生は言った言葉がそのまま変換される C-Print を好むということである。このため NTID も通訳環境の変化にうまく動じていかなければならない。

C-Print の要望が多くなれば NTID も C-Print のサービスを提供し、通訳環境の変化にうまく対応していたいと思っている。NTID も通訳環境の変化に応じていかねければならない。もちろん学生がかわれば、私たち教員のサービスもかわってくると言える。かつて手話のできない学生がいた場合、字幕もなく、口話通訳をしていた。20 年まえあたりの話である。

最大の課題は、新たらしいサービスが増えれば増えるほど、その聾者のコミュニティやグループ、すなわちこれを好む人たち、あれを好む人たちが、通訳を好む人たち、C-Print を好む人たちなどだんだんと分かれてきているのがひとつの問題あるいは課題となって

きている。今の状況は、ひとつのグループが多くに分かれる前に、手話ができたり、対応手話を好むグループができたりと、もうひとつまったく手話ができない人たちが使う C-Print、すなわち C-Print と手話の2つの分野にするようにしている。口話通訳やキュードスピーチというのは、クラスの選択によって必要である。もし水泳のクラスをとっている場合、コンピュータは使えない。こうした場合にはキュードスピーチ、口話通訳が必要になることになる。

もっとも最大の課題は、通訳士の数が不足していることである。必要とする数に対応できないことである。難しいのは、何人の通訳が実際に必要かを明確に答えられない。依頼は来るけれども実際に何人が必要な数なのかを聞かれるのが難しい。聾の学生たちは NTID に入り、上の教育をうけるようになってきている。通訳が不足してきているというのは聾学生の成功に対する被害者となっていると言えるのでしょうか。どんどん聾学生が RIT に入ってきてその増加によって、通訳の必要性がたかまり通訳不足となってきた。それが聾学生の成功に対する被害者となっていると言えるかと言える。それに加えて RIT は、学部を増やしたり、プログラムを増やしたりしており、それによって私たちが受ける影響も大きい。それによってサービスも変えていかなければならないし、サービスを提供していかなければならない必要がある。

7. デカロ先生の助言

聾の学生があまりにも多すぎてサービスをいくつか制限しなくてはならない。C-Print、通訳と制限が必要になる。もし大学に 5,000 人いたら 5,000 人の好みに応じた対応することは難しい。ニューヨーク大学では 10 人しか聾学生がいない。したがってニューヨーク大学では 10 人に対応する教育が可能である。これからニューヨーク大学で話すことと違うかもしれない。NTID には聾学生が多く、少数の聾学生しかいない大学とは異なる。しかし、もし 5 人が入学したら、5 人がそれぞれのサービスを受けることができるかもしれないが、キャンパス内に 5 人の友人しかできないということになる。NTID に入ると得るものも多いが、失うものもある。それはニューヨーク大学に入学しても同じことである。もちろん得るものもあるし、失うものもある。みなさんの大学では、スティーブ氏が話したような問題はないとおそらくないと思われる。それはみなさんの大学に入学している聾学生の数は NTID にくらべあまりにも少ない。したがって起きる問題や課題には違いがある。金曜日、月曜日、火曜日に視察する 3 つの大学で聞く話はまた、私たちが話したことと違うことを、違う問題点を聞くかと思う。そして直面している問題点は、新しく作り出してきたサービスとかに関することもある。提供は、他の大学に提供でき、役立つものとなってきたものである。いまからスティーブ氏に今からすべての大学にも役立つものをいくつか質問をしてみようと思う。

第一に、どのように通訳を評価するのかということである。そして、もし通訳に問題があって、聾者との間に問題点があった場合どのように改善していったのか、その2つの点について聞いてみたい。

スティーブ氏 / 最初に評価という問題について話をする。それには2つある。評価の一つは、技術評価である。ビデオなどをみせて、通訳士の技術を見る。このことは別に新しい

ことでもなく、昔から通訳士に対して行っていることである。ビデオをみて、通訳したり、人の話しているのを見て手話に直したりする。その姿をみて、通訳士の問題点や改善点を探し、どこを直して行かなければならないというテストである。

2つ目はどのように質をあげていくのか。そのことに関しては、通訳者を現場に立ち合わせ、他の通訳者たちがどのように仕事をしているのかを視察をしたり、見たりというのがある。

大学には、1年間、定期的な視察があり、1年間の中でステップアップしていく順序があり、この年はこういうもの、次の年はこういうものと通訳者を育成していく、年ごとに順序が組み込まれている。通訳者を育成していくプログラムをもっている。

この他に、スタッフとして雇用された人たちに特別の個別指導や、経験のある通訳者と一緒に働かせて先輩の通訳士から指導する。こうしたサポートも行っている。その他に、プログラムの中にはコーディネータ、ワークショップや研修会を開催したり、手話通訳を向上させるクラスを設けたりして、各通訳士の技術の向上に力をいれている。これはどこの大学にも言えることであるが、聾者が少ない小さな大学においても言えることであるが、一番すごい影響力のあるよい方法というのは、メンタリング、すなわち先輩の通訳士に新しい通訳士がついていって一緒に仕事をする。そして経験のある通訳士からいろいろなこと学んだり、技術を学んだりすることであり、これは若い通訳士を育成する一番効果のある、役にたつ、影響力があることであると思っている。

その他、1年間定期的にコーディネータとともに視察があったりとか、聾学生の意見を採り入れた質疑応答だったり、話し合いも行われている。もちろん現在の状況では通訳士の人数が少ないので私たちは常に成長し、向上していくという環境ができてきている。

質問

Q：ワークショップはどのように行うのか。

A：ワークショップの内容に関しては、いろいろな特別分野があり、その分野は細かく、たとえばテクノロジーに関してのワークショップが開かれたりとか、個別に開かれることもあるし、歴史的な背景から手話通訳はある程度、確立している分野があったりし、手話通訳であっても細かくわけることができたりする。音声通訳、手話通訳、手話から音声通訳にする、音声通訳から手話通訳にするなど、細かく分けたりしてワークショップを行ったりする。

Q：通訳の質をたかめるワークショップの内容等について州の基準などがあるのか。

A：国や州でのワークショップでの基準はない。大学内においてもっとどのような分野に質をあげていかなければならないのかなどをベースにして、そこからワークショップを開いたりしている。そのため外から基準となっているものはない。学内での質の向上のためのワークショップである。3時～5時の間の研修で、通訳養成に関しての話を受けると思うので、その時に聞いて欲しい。これから会う人たちというのはスティーブ氏が雇用した人たちで、この大学に入ってきたときにそのようなワークショップやトレーニングを受けて来た人たちであり、そのような人たちの話をきくことでよりわかるかと思う。スティーブ氏が行っているのは、まさにトレーニングを受けた通訳

士に対してのサービスを行っているのであって、新しく入ってきた、あるいはこれから通訳になる以前の人たちを対象にしていない。常にトレーニングを積んできた人たちのトレーニングである。すでに経験を積んだ、トレーニングを積んだ通訳士には基準はもうない。これから通訳士になろうとする人たちに対しての基準はあるが、すでにこの大学で雇用している人たちは、トレーニングを積んであり、通訳の経験があり、基準を設けることは難しい。現場において、向上する部分を上げていく。スティーブさんが行っているのは、個人な指導であったり、学校で新たなテクノロジーができたりにして、それに関してあたらしい言葉を学びましょうとか、新しい語彙を学びましょうというときにワークショップを行う。通訳になった時に、より素質を上げていこうともに関してのトレーニングを行っている。デカロ氏は、ここの学部長であったので、私たちが行っていることをすべて把握している。

Q：ビデオリレーインタープリティングについての話がありましたが、もう少し詳しく聞きたい。

A：ビデオリレーサービスは、だんだんと広がってきているサービスである。これはインターネットを利用したサービスである。たとえば聾の人が耳の聞こえない人が、通訳者を通してコンタクトをとり、そして通訳者の仲介を経て聞こえる人と会話をする、コンピュータ上で通訳が行われる。これがビデオリレーサービスというものである。コンピュータのところでマイクを使って手話のできない人が話し、コンピュータを通して通訳者をスクリーンに映し出し、スピーカから声が聞こえて、手話通訳者がウェブカメラを使って手話通訳をし、それが今度は聾学生のスクリーンに映し出されるというサービスである。かつて 1980 年代ごろに使われたリレーサービスというものがあり、これはビデオリレーサービスとは異なる。リレーサービスは TTY (テレタイプライタ) 電話を使った、電話にタイプライティングがついたようなもので、それでやっていた。現在は、これにかわるものとしてインターネットを介して、ウェブカメラを介して手話通訳の方法が広がってきている。そしてビデオリレーサービスというのは、電話料金に含まれない。聾の人たちにとってはお金を支払わない、無料でできる。したがってかつて電話を使っての TTY (テレタイプライタ) よりも、聾の人たちにとっては使い勝手がよいものになってきている。

Q：筑波技術短期大学においても、同じような試みを始めてきているところである。こちらではどうか。

A：ミノルを含めた 4 人の職員のうち、みなビデオリレーサービスのウェブカメラをもっているのので、この講義が終わった後に、実際にリレーサービスが行われているのを見ることが可能である。

Q：ビデオリレーサービスは、実際にクラス内で使用されているのか。

A：ビデオリレーサービスは、クラスでは使用されていない。ビデオリレーサービスは、クラスで使用するものではなく、耳が聞こえない聾学生が外に対して電話を使うときに使用するシステムであり、クラスとは別ものである。かつては TTY (テレタイプラ

イタ)で電話を介して、自分の電話回線を使って行っていたものが、現在は自分の家のコンピュータを使って電話をかけるようになってきている。

Q：筑波技術短期大学では電話のリレーサービスではなく、ビデオ会議システムを利用した遠隔地通訳の開発をやっているが、RITの授業で実際に行われる例はあるのか。

A：それは、やっていない。RIT内にはキャンパスの中で働いている通訳者が大勢いるので、テレビ会議システムを利用しなくても実際に通訳現場に出向いていくことができる。このため会議のためにテレビ会議を利用することはあっても授業では使用していない。ただ、この大学では使われていないが、病院などでは通訳者が出向いていなくてもいいようになっている。このシステムは広がってきている。そのようなビデオリモートサービスは、通訳者が直接行くことができないくらいの遠くの距離にある場合に使われる。またある地域、特定の場所に通訳者がいない場合には、利用できる。その他病院など専門的な分野で通訳ができる人がいない場合、コンピュータを介して医療分野にすごく強い通訳士を使いたいときなどにはビデオリレーを介して、遠くにいる通訳士を介して仕事ができる。

Q：今のようなサービスは、RITの中では今行われているのか。

A：RITの中では行っていない。他の学校では行っているところがある。RITの授業では通訳者がクラスに出向いている授業をおこなっている。RITの中に108人通訳士がいるが、学生のサービスに対しては問題が発生しない人数がいる。しかしノースダコダのような州であると、実際に一人も通訳士がいない場所もある。こうしたところではビデオリレーサービス、あるいはビデオリモートサービスを使ったサービスが必要になっている。その他、スウェーデンではコンピュータを介した通訳提供が行われている。こうしたことは、地理的な問題がある。人が大勢いるところ、いないところに関係してくると思われる。

Interpreter Education at NTID

Rico Peterson 氏

デカロ氏:(講師紹介)ASL IE (American Sign Language and Interpreter Education)の責任者である。このプログラムには二つのコースがある。一つは学生向け、もう一つは教員向けである。

・手話通訳に求められるもの

手話通訳にとって必要な質というのがある。例えば、文化や言語に関するスキル、責任感、人間関係(特にろう者との)を保つ力である。文化を知らずに言語獲得は、出来ないし、その逆も言える。これらは技術的側面である。

ここに入学してくる学生は、はじめ、ろう者文化や言語としての手話に関して間違った認識を持って入ってくることが多い。まずは、それを変える事から始める。「手話は簡単に覚えられる」、「ろう者は良い人だ」、「手話を覚えさえすれば手話通訳も出来る」などである。これらの認識違いは、アメリカ特有のものではなく、おそらく世界共通であろう。

・学ぶ上での課題

ASL を学ぶ上で最大の課題は、アメリカ人が外国語を学ぶ経験が少ないところにある。例えばスペイン語でもフランス語でも、その言語を獲得の為に、実際にその国に行って学ぶ者に成功者が多い。しかし、『手話の国』は、どこにも無い。NTID には、ろう者がたくさん居て、ここが手話の国に変わるものになるのかもしれないが、ともかくカリキュラムだけでは決して充分ではないことは確かである。魚を捕ろうと思ったら、船に乗って実際に海に出なければならないように、手話も積極的にろう者の中に入って、自ら学び取らなければならない。

しかし、ASL を学ぶ事そのものだけが難しいのではない。第一言語の能力によって、第二言語の習得は、大きく左右される。ASL を学ぶにあたっては、まず母国語である英語力をあげることである。ここでは、それにも非常に力を入れている。通訳をする上で、英語に対する柔軟性は、非常に重要である。

・手話通訳とは

さて通訳とは、「言葉と言葉を直訳ではダメ」、「文法の違いを踏まえた通訳」、「発言の意図を捉えた通訳」といった事を踏まえた作業になる。このことを話すと生徒はたいがい驚く。その責任は、初めに話した CD にもあるのかもしれない。CD には、英単語と手話表現を対応させて収録してあるので、英語に一つ一つ当てはめれば良いのだと思われてしまう。だが実際には、全く違う。単語、文法、慣用句は、手話に直すと全く違ったものになる。

発言に隠された意味をとらえた通訳が必要になる。日本手話通訳にも同じ事が言えるのではないかと思う。

例として「May I help you?」を挙げる。「何かお手伝いしましょうか?」といった意味である。この表現は、幅広い意味を持ち、英語では同じ表現で事足りても、手話にすると大きく変わる。例えば、落ちているものを拾う時には『/want/me/help/you/want/?/あなたが落としたの?拾おうか?』となる。大学などの講義中に教員から言われたら『/two/of/you/finish/話を終わらせなさい(私語は慎みなさい)』となる。病院に行って医者から言われた時は『/you/here/for/for/?/どうしました?どんな症状なのですか?』となる。英語に対応させた『May/I/help/you?』の表現だけ(対応手話)では伝えられないのである。CDによって、間違っただけでよいと思ってしまう生徒も居る。そこで私達は、英語の考え方と手話を切り離すよう強調している。

・手話通訳のニーズ

アメリカでは、手話通訳の75%が教育場面で行われるため、必然的に私達は通訳養成のニーズを満たさなければならない。NTIDで情報保障開始以来、通訳者不足が明らかになり、手話通訳者をいくらかでも育てなければならない状況になった。1968年にNTIDで教育場面の手話通訳養成を開始したが、当時としては他に例の無いことだった。ただ、教育現場だけでなく、医療・法廷・企業・政治場面でも手話通訳は必要になる。元々は講義通訳を育てる為に養成を開始したが、今ではそういった教育場面以外の通訳も養成するようになった。

・通訳養成プログラムの概要

通訳養成プログラム(ASL I E)のセクションは3つあり、まず、一つ目はデフ・スタディ、これは必修で社会人(夜間)コースにもある。二つ目は教職員向けの手話指導である。ご存知の通り、この職員は皆手話を学ばなければならない。つまり私達には、指導する責任もある。そして3つ目が手話通訳のコースである。2年間の準学士をとった後、同じく2年間で学士をとることもできる。他の大学で、通訳コースを受けて戻ってくる学生も居る。NTIDの手話通訳養成の教員は、他大学に比べ、フルタイム契約の教職員が最も多く(他大学ではパート契約が多い)また、手話通訳資格を持ち、さらに現役の手話通訳者として活動している者が採用される。NTIDでは、聞こえる専門家がろう者に関われるフィールドを提供するよう心がけている。ここには、多くのろう学生や100人以上のろう教職員が居る事が利点なのである。年間カレンダーを見てほしい。クォーター制度がある。コースアップには良いが言語習得にはよくない。資料には無いが、夏学期にもASL習得のコースを実施している。学士取得には2年間で90単位を取る必要がある。またその前には、準学士が必要であるが、それは、NTID以外でとったものでも構わない。手話通訳トレーニングコースの前には、中間レベル(ASL 4)の手話技術を持っていないと行かない。また、異文化コミュニケーション、通訳に関する導入、読み書き、文学も必須科目である(読み書き・文学はRITでも必修である)。冬学期にはASL 5をとる。ASLの構造に関して学ぶ。そして

春学期には ASL 6 をとる。この辺りで、通訳についての基本的なことも学び始める。2 年目は、手話のコースは無い。ろうコミュニティで、それぞれ手話を学ぶ事になる。1 学期には春学期に続いて手話と英語の翻訳という第 2 レベルに進む。

Q 松崎：『ろうコミュニティ』を具体的に教えてほしい。

A : これはあくまでもカリキュラムではなく、ろうコミュニティの中で交流するよう促すということ。例えば、ろう者が働く職場やろう者の交流会、ろう学校に行かせたり、デフクラブ（ろう者が集まるバー）でウェイターをさせたり、RIT 内のサークルでチューターをさせたりする。学生の立場でなく、個人として生の状態を体験させ、ろう者が求めているものは何かを現場で感じ取ることが目的である。また、ろう者から手話を教わる代わりに、ろうコミュニティになにかを返すというような、ろう者と自分とのギブアンドテイクの関係も体験させる。他大学では 1 年目にやっているようだが、ここではあえて手話能力がある程度ついた 2 年目になってから促す。

最後の春学期にプラティカムというのがある。これは、実際に外部で通訳経験をさせる。決して 1 人でさせず、あくまでも先輩と共に働く事になる。主に、RIT や幼稚園から高校までの教育現場での通訳が多い。医療現場に行く事も稀にある。フリーランスで働く人も居る。

3 年次ではより専門的分野の通訳に関する内容となる。4 年次では 1 学期まるごと通訳現場に出て働く、この場合も 1 人ではなく、必ず誰かしらの管理下で働く事となる。

何か他に質問は？

Q 菊池：ASL 習得前の教員の扱いは？

A : ここの方針として新任教員で手話を知らない方には、1 年間はみっちり勉強して頂くことになる。その 1 年目の 1 学期は講義を持つことは出来ない。2 学期は他の授業を見学はできるようになり、3 学期になってやっと授業が出来る。実際には、ほとんどの教員は配属された時に既に手話が出来た。なぜなら、ほとんどの教員が卒業生であり、ろう者であるからである。まさにここにふさわしい人材なのである。

Q 岩田：実務経験をカリキュラムに入れているが、その評価方法は？

A : 評価方法は様々ある。まず評価票を先輩がチェック、養成の教員も現場を実際に見て評価、さらに生徒が自身でも評価を行う。これらを総合して評価される。

TeachingASL (アメリカ手話)

．通訳養成の概要

6つのASL(アメリカ手話)のクラスがある。それぞれは10週間のプログラムで、全体で60時間である。

はじめは、6つのうち3つの基礎的なクラスを履修する。そのクラスは、通訳になりたいという学生がとるもの、あるいは単にASL(アメリカ手話)を知りたいという学生がとるクラスである。この1～3のクラスが終了したあと、試験がある。この試験にパスすると通訳コースに行くことができる。テストは、ビデオテープによる面接試験である。その試験が終わるとそのビデオテープは、試験を受けた本人ではなく、他の人に手渡される。他の人というのは、ASL(アメリカ手話)を母国語としているか、ASL(アメリカ手話)にたけた人が見ることになっている。2人の聾の人がビデオをみて、この試験者はしっかり手話ができているかどうかを見て、テストの可否を決定する。もし学生がテストに合格出来ない場合には、どちらのコースにいったらよいのか、伸ばすべき課題は何であるのかを学生に伝える。

．各クラスについて

1．ASL(アメリカ手話) 1

ASL(アメリカ手話)の構造とサインの顔の表情や、どのように質問をしたらよいかの質問の仕方を主に教える。このクラスで重要なことは、日常生活、たとえば仕事に関することや家族構成、それぞれの場所、たとえばどこに何があるのかが言えることである。

どこに何が位置しているのかを学んでいくことになる。テストを受ける時に、どこをみるのかというと、読みとりを重視している。表現する力は、ほんの少しだけである。

2．ASL(アメリカ手話) 2

ASL(アメリカ手話)も他の言語と同じように文法がある。とりわけASL(アメリカ手話)ではスペースの使用のしかたに重点を置いている。サインとサインの間のスペースである。ASL(アメリカ手話)2は、天候や季節や月々、週、今日、明日など時の概念について学ぶ。また病気や健康状態、日常の挨拶、質疑と応答のしかたなど、許可関係についてもどのようにしたらよいかを学ぶ。このクラスではひとつのトピック、たとえば「家族構成を教えて?」などについて、手話で話ができるなどについて学ぶ。このクラスでは、テストがある。その際にASL(アメリカ手話)1と違い、読みとりも表現もする力ともに重要視される。

3．ASL(アメリカ手話) 3

ASL(アメリカ手話)3もASL(アメリカ手話)の構造と、これまで学習してきた内容

を統合してものを学ぶ。ASL(アメリカ手話)3は、クラシファイヤー(CL)などについて学習する。このコースでは日常会話に焦点を当てたもの、基本的なクラシファイヤー(CL)や趣味、興味、お金に関することを学習していく。テストではなく学生たちはリハーサルなくして、実技ができるようにする。それをビデオテープにとられる。そしてそのビデオを教師が評価する。何でこのようなテストのようなことをするのかというと、たとえば通訳になる人は、どこかに突然派遣され、突然あげられたトピックについて話していかなければならない。このためにこのようなことを行っている。ASL(アメリカ手話)3のテストは、よりASL(アメリカ手話)1と比べより表現する力が問われる。バランスが逆転している。読みとり重視から表現力が問われてきている。

これまで説明したASL(アメリカ手話)1~3は、会話重視であるが、ASL(アメリカ手話)4からは通訳の方向に重点がおかれた方向となる。

4. ASL(アメリカ手話)4

このASL(アメリカ手話)4のレベルは、だんだんと学習内容が難しくなっている。たとえば英語とASL(アメリカ手話)の意味論について学習する。たとえば、英語のRUNという言葉があるが、「走る」というRUNがある。次に「水道から水が流れる」というRUNがある。英語の場合の「RUN」は一つの言葉で2つ以上を意味することがある。ASL(アメリカ手話)は、これに対応した手話はまったく異なる。たとえば人が「走る」ときに、「水が流れる」という手話をやってしまうことは誤りである。この手話の対応のしかたなど、更に難しい部分を学習していくクラスである。2つの意味があれば、それに応じた手話をする必要がある。たとえばASL(アメリカ手話)から英語に直す場合、この手話がある。たとえば値段の高い車を見て、このような手話を使う。英語での高いはEXPENSIVEであり、このような手話をする。ASL(アメリカ手話)に直すときには、これだけで「高い」を意味する。より英語的な手話を使う。ASL(アメリカ手話)から英語に直すとき言葉よっての使い分けを行うような学習を行う。たとえば同じ手話で家が「高い」がある。これはASL(アメリカ手話)でこのような手話を使う。ASL(アメリカ手話)の違いによって意味が違い、それを理解していく。ASL(アメリカ手話)を見て英語に直す場合と、英語からASL(アメリカ手話)に直す場合と、こうしたことに通訳者は注意してやっていかなければならない。それば通訳者の責任であり、プロとしての通訳士となる。そのほか、事前に何も知らされていないトピック、たとえば今朝の新聞から出てきた病院に関する記事、その新聞記事をもとにディスカッションを行ったりする。すなわち予備知識のない中での議論で手話会話も行うことも行う。このような記事は、特別なトピックというものではなく、世界の情勢についてなどいろいろな者に関して学習していく。

その他に、このクラスでは、手話の文法についても学習する。ある特定の状況によって文法が変わる場合もあるし、違った使い方もある。このような文法に関して学習していく。その内容は、状況においての語彙の使い方、たとえば教育現場においての手話の使い方、英語でいうイントネーションに関係する手話についても学習する。その他に手話やCL、指文字の使い方などを学習する。指文字は印刷物で配布され、それを真似ているのをビデオテープにとって学習するというものもある。そのような指文字やCLが書いてある用紙はロイ

ドイという人が描いた絵であり、その絵というのは言葉が全然必要がないものであり、絵だけを見てそれだけで勉強にもある。さらに詳しくCLについて学習する。たとえばより複雑なCLの使い方、表現の仕方を学習する。健康に関する語彙を新しく学んだり、医療関係の難しい言葉を学んだり、たとえば病院に行ったときに手術がどのように行われたのか、もっと深く医療や身体関係などの語彙を学習していく。おもしろいことも学習する。たとえば物事を比べることも行う。たとえばナイキとリーボックのシューズの違いを手話で話すなども行う。その他、ASL(アメリカ手話)4では読みとりテストが3つある。そのうちの2のテストは私が担当し、手話表現し、読みとりを行う。もう一つは他の人が手話しているのを読みとる。ですから学生たちは、私ではない人の手話をみて通訳をしなければならない。表現力テストは、4つの試験がある。これまで学習してきたこと、たとえばこれまで学習してきたことをひとつずつ、たとえばCLのことの表現力があったり、医療・健康関係のテストであったり、物を比べるなどのテストがある。最終的には、総合的なテストが期末テストとして行われる。

5 . ASL (アメリカ手話) 5

ASL(アメリカ手話)5は、内容は4の内容と同じである。ASL(アメリカ手話)4に加えて顔の表情など体の動かしかたなどについて詳しく学習していく。たとえば遠くに行くという手話で表現の違い、たとえば友人などが、とても少ない人数でカジュアルな使い方と、それに現在ここに立っているように大勢の前で話す手話のしかたなどについて学習する。このようなカジュアルな手話の使い方とフォーマルな手話の使い方を学習し、学生全体の中で行う。というのは通訳士になるにあたって、みんなの前に出ていくわけであり、緊張しないような訓練にもなるし、のちのち自信をつけてくれることを願っている。中には意志決定、転職をすべきか、結婚すべきか、職業について方がいいのかなど仕事に関しても含まれる。次に車を運転する際のルール、いろいろなゲーム、クラス内での役割なども学習する。次の例として不慮の事故があった場合、たとえば馬から落ちた場合、車で事故してしまったときなど、その状況について説明ができるように訓練していく。ASL(アメリカ手話)5のテストでは、表現することに重きが置かれている。

6 . ASL (アメリカ手話) 6

ASL(アメリカ手話)6は、今までの中で恥ずかしかったことや恥をかいたことなどについて手話で説明するなどである。彼女は、毎年日本で起きたちょっと恥ずかしい出来事について話題として話をしたりする。またこのクラスでは子供に読み聞かせる本について、たとえばシンデレラなどをどのように手話で表すかも学習していく。インフォーマルではないものは、これまでに読んだ物語について手話していったり、フォーマルなものはアメリカ文化ではない、他の国の文化について手話で話をしたりする。その背景についてわからない場合には、そのグループでリサーチを行って発表をしていかなければならない。他には、イディオムなどについても学習する。たとえばそのままでは直訳できないものをどのようにASL(アメリカ手話)に直していくのかを学んでいく。すなわち英語で表現できないものをどのようにして手話表現にしていくのかである。学生たちは、難しいのでいやがっている。ASL(アメリカ手話)6では、ここでも表現する力が多く問われる。5つの

表現力テストと2つの読みとりのテストを行う。

Q：クラスは3つあるということですが、どういうことですか？

A：一つのクラス、10週、6つで60週である。それぞれのクラスで60週間である。木曜日に出るピーターソンがより詳しく説明する。学生は、はじめのASL（アメリカ手話）で1～3をとり、2年生でASL（アメリカ手話）4～6を学習する。この段階で通訳の学習をすることになる。3年目になってはじめて通訳だけのコースをとることになる。

職業指導サービス

1. NTIDの職業指導

職業指導としては、1対1のアドバイス、履歴書の書き方、ワークショップの提供とその活用の仕方、ウェブサイトへの提示などを行っている。

まず学生へのアドバイスは、秋に入学する以前の夏に会って、行なう。新入学生だけではなく、両親とも会って話をする。そのときに、学生が私たちと協力的に働くことができるのかを話しあうことになる。2学期前から、学生がどのような職業につきたいのか、どのような場所で、どこで働きたいのかの詳細な話までし、決定していく。合わせて、コミュニケーションについてどのような問題が発生するのか、職業につくにあたって起こりうるのか、滞在する場所などについても詳しく話していく。大切なことは、学生自身のように自分が聾学生であることを認識して、自分を主張できるかどうか、そして職場における人間関係で活躍できるのかといったことである。学生は様々であり、個々人の必要性が違う。個々人にあったサービスを提供しようとしている。人によって要求するものは違うので、そのために重点を個人おいている。時には、学生は問題をどのように問題を解決すべきか、職場でどのような質疑応答で対応したらよいのか、こうしたことなどについても話をする。またこうした経験のある先輩としてアドバイスを رفتりしていく。職業指導の部についても話をする。

この部は、NTIDに所属し、8名の職員がいる。何人かは特定の学部の専門に所属している。たとえば専門分野であれば、美術関係であったり、コンピュータや科学関係などの特別な分野に携わっている。NTIDには約1,200人の聾学生が在籍しており、カウンセラー1人当たりで、100人程度の学生を担当している。私もこのRITの卒業生であり、修士の学位もとっている。

2. カウンセラー個人の経験談

個人的なことであるが、私がこのサービスを使いはじめたのは卒業する2年前である。残り2年になって、このサービスを使いはじめたのは心残りだった。なぜ、残念だと思ったのかは、学士レベルで会社を探すことは大変なチャレンジである。他の学生たちは自立的で、チャレンジしている。チャレンジがどういうことかということ、聾学生がアイデンティティをもち、職業意識をどうもっていくのか。それは健聴学生くらべるとチャレンジである。それが健聴学生と聾学生とは違う。私は5年かけて学士を取得した。サービスをつかっていればもっと早く職業につけたと思っている。だから5年もかけてしまった。もっと早くサービスを使っていればよかったと思っている。

実際に職業を探すにあたって、会社とどのようにコミュニケーションをとるのかということに関して、答えることができなかった。そういうことで、サービスを使って聾であることを主張することによって、どのようにコミュニケーションをとっていくのかという説明ができたかもしれない。こうしたことをサービスを利用することによって、助けてもらったと思っている。別の例として、企業からのインタビューを受けた際に、どのような援助が必要であるのかを問われた。サポートサービスにきて、その問いに関して、どのように答えたらよいかを相談した。もしこのような NTID のサービスがなかったら、私はここにはいなかった。どのようにして、仕事を見つけたかということ、投資関係の仕事をもつ人が NTID におり、その時にインタビューを受け、その時に仕事を得ることができたのである。

3 . COOP について

COOP のこの意味は、個々の学生が専攻に関した仕事を見つけるのを手伝うことである。ここの RIT では 10 週間の労働経験が必要とされており、学生たちは、スーパーバイザの監視下で、労働経験をする。定期的に私たちのメンバーが訪問して、学生が職場でどのように働いているのかをチェックをする。多くの学生は 2 ~ 3 の COOP が必要になることもある。このサービスは、学生にとって利益がある。それは RIT で学んでいることがすばらしいことかどうかを見極めることができる。もう一つのメリットは、それを通して経験を得られ、職業を得る段階でその経験がいき、それをもとに履歴書にも書くことができることである。実際に NTID の COOP のプログラムを使って、私は現在の職業を得た。私はクリデンシャルという会社に就職し、3 年間経済アナリストとして働いた。現在、どうしてここにいるのか。はじめはお金がすべてであると思っていたが、実際そうではなく、そのために職業をかえ、RIT にある大学院に入学した。18 ヶ月間 NTID で働く機会があった。その後、雇用主と学生がどのようにわたりあっていくのがよいかという教育をしたいと考え、この職業に就きたいと思った。このようなきっかけで、私たちはここにおり、大切なことだと思っている。

Q : COOP は学生が行かなければいけないサービスか。それとも学生が自由にできるサービスであるのか。

A : ほとんどの RIT の学生がこれをとることが義務づけられている。それを受けることで学生にとってはよい経験を積むことになり、重要な機会である。

Q : あなたは、どの程度のデシベルか。さしつかえなければ。

A : 左 80 右 85 である。

Q : どのようにアイデンティティを確立したのか。

A：生まれた後、はしかになり聾になった。両親は、2歳になるまで聾であることに気づかなかった。どのようにしてわかったのか。私には妹がいて、妹と一緒におもちゃを使って遊んでいた。その時、犬がほえていた時に、妹は後ろを振り返ってみたが、自分はなにも反応がなく遊び続けていた。そこで両親が自分をおかしいと考えたが、母親は、「問題ないよ。ジョンはなんてたって男だから」、「言葉なんて後で覚えるもんだよ」って母親はとりあわなかった。母は、聾であることを納得しなかった。父親はある実験を私にした。私と妹はリビングルームで遊び、そして父親は、別の寝室でトレイの上にコップを置き、そして父親はトレイを床に叩きつけ落とした。父親の部屋は床がすごく堅く、もし叩きつけたらすごい音がする。私は何も聞こえなかったが妹は聞こえた。私の母親は、新聞で見た聴覚欠損を多く扱う所につれていき、そこでテストを受けさせた。そこで両親は、2つの選択をせまられた。一つは話す方、一つは手話である。両親は、話す方を選択した。

話すことはとても大変な作業であった。聾の私にとって話すことを勉強することはすごく大変なことであった。何年もかかって話すことを身につけて学んでいった。ご存知のように映画館に行っても、聾であるから音がでていることはわかるが、内容を理解することは難しい。耳が聞こえないからである。デシベルは左耳が80、右耳が85である。補聴器をつけてもわからない。私の聴力というとは深刻な聴力障害で、全く聞こえない状態に近いという意味で厳しい状態の間の聴力である。

4. 履歴書とカバーレターについて

カバーレターは、履歴書と一緒に添付して会社におくものである。履歴書に書いてあることを補足するためのものである。カバーレターの内容は、会社の求人情報をどこでみつけたのか、インタビューに出かけることができるのかなどを記入して、会社に送る。履歴書とカバーレターの書き方について、学生に対してサービスを行っている。時には書き間違いやスペルの間違いのチェックをしたりもする。それに文法の使い方も指摘し、違いも指摘する。おそらくみなさんの学校でもやっていると思う。私たちは、このようなサービスをしたり、学生のお手伝いをしたりする。もし履歴書やカバーレターで間違いがあると会社側では雇用してくれない。それに面接の時の技術についても指導しており、練習、練習、練習、ただそれだけである。何回でも練習を行う。本番を想定して模擬面接も行う。模擬面接では、通訳をつけて行う面接と、通訳をつけない面接をおこなう。面接の方法はいろいろとあり、1対1でやったり、時には、面接にコンピュータをつかって行ったり、ウェブカメラを使って行ったり、ビデオリレーシステムを使って行うこともある。重要なのは、私たちは、学生のために仕事をみつけることはしない。中立的な立場で考えてみてください。学生と企業との間に私たちはいる。学生に仕事の紹介はしないが、それに対するトレーニングを行う。COOPは、インターシッピング的に行う、また仕事先はどのように見つけるのかというと、アメリカ国内の企業と提携している。学生が自ら仕事をみつける

手段や方法を教えることがこの重要なサービスである。また提携している企業のリストがあり、またかつて学生が就職した企業のリストもあり、それを学生に提示するが、私たちが学生のために自ら動いたり、会社に出向いたりはしない。私たちの役目としては、授業料がどんどん減っていけばよいと思っている。学生が自ら自立心をもって行動すれば、サービス料を減らすことができる。学生には、自ら独立的に行動できることを期待している。COOP プログラムとインターンシッププログラムとの違いはどこにあるのか。ほとんど同じことであるが多くの場合、インターンシップの場合は無料である。COOP は有料でトレーニングができるものと思っている。それ以外はやっている内容は同じである。私たちは、会社と学生との間にたち、もし学生と企業が出会えば私たちは去っていく。私たちは、仲介役である。ですから練習、練習、練習と面接を何回でも重ねて行うことが重要になる。ご存知のように学生がよい面接をしなかったら、会社は学生を採用しない。

5 . 指導方法

このビデオは、面接で会社と学生、それに通訳者を交えた面接である。もちろん、これは模擬面接である。ここで分析して欲しいのは、学生の面接で、どこが間違っているのか、どこを改善しなければならないのかという点である。

ビデオでは、会社の面接試験の最後に「他になにか質問がありますか？」に対して、多くの学生は「他に質問はありません」と答えてしまう。あるいは質問してはいけない質問を会社側にしたりする。実際に学生に面接が終わったときに聞くと、間違った答えはしていない、間違った質問はしていないという。しかしビデオをとって、みせることで、面接で誤った答えをしていたり、間違った接し方をしたりしていることが発見できる。ビデオにとっておくことが確実な証拠となる。

ビデオ

「職業に関して柔軟ですね。他の人と仕事をするとき、あなたはチームワークをどう思いますか？」

「私は、協力的であると思っています。それに私は前向き志向です。コミュニケーションに関しても積極的に取り組んでいます。」

「私の会社には聾職員がいないのですが、コミュニケーションに問題はないでしょうか？」

「私は口話ができます。私は忍耐力があるので、筆談によることも大丈夫だと思います。それに E-mail アドレスももっているのです、会社の人たちとメールのやりとりもできます。ですから、私が聾であるが、この会社で働くことに関して問題がないと思います。」

「どれだけの給与をのぞんでいますか？このポジションです。」

「あまりお金に関しては関心がありません。」

インタビューを行っているビデオの登場人物は NTID の職員である。質問は簡単な質問

ではない。あえて難しい質問を与えて、学生に答えさせている。ビデオテープで模擬面接が終わったあと、学生はビデオをみながらよいところ、悪いところ、ボディランゲージの仕方などの分析を行う。この練習によって、本番に向けて役立つものとなる。模擬試験では、私たちは、学生には間違ってもらいたいと思っている。間違えることは悪いことではない。しかし、本番の面接で、まちがってほしくないということである。

私たちの学部では、仕事を探すためのワークショップを提供している。例えば、COOP EXPERIENCE。COOP を経験した学生が、何が大変だったのかその経験を話すという内容である。すなわち経験をした学生がパネルディスカッションを行うのである。何が役立つ、何が悪いのかのパネルディスカッションにて、発言してもらう。

現在は、多くの会社がオンラインで求人募集をしている。オンラインでは1回しかチャンスがない。1回しかない求人募集のチャンスを逃さないようにしたい。その1回のチャンスを大切にするために最善のサービスを行う。テレコミュニケーションについても指導する機会を与えている。あらゆるテレコミュニケーションの使い方、利用のしかたを教える。すべての学生がすべてのテレコミュニケーションの方法を知っているわけではない。

6. ホームページについて

ホームページには2つのカテゴリがある。仕事をさがしている人と雇用主である。学生は、仕事を探すJOBSEEKERを見る。こちらがトピックであり、多くの情報が提供されている。

ここは、WEBの中のアメリカ国内の求人情報のサイトがあり、人気がある。3つのエリアがあり、一つのエリアであるオンキャンパスは、企業が学校に出向いて求人活動を行う。2番目のエリアは、履歴書の要求等である。たとえばカリフォルニアにある企業が、こちらまで来て求人活動することは大変なことであり、学校に来たりしない。それでどうするのかというと、学生たちの履歴書を集めて会社におくるということを行う。たとえば会社がそこから2、3の人を選び、電話やメールをつかってインタビューを行うこともできる。最後のエリアは求人募集というお知らせの欄である。例えば、ここには5つの企業が学校に出向いて面接を行うという情報がある。更に求人内容といったものもある。例えば、これはP-PRESSという印刷関係の会社の技術者を求めているという求人情報で、面接の日取りや面接の時間、仕事の内容に関する事柄がのっている。

このように私たちは、仕事を見つけて学生に仕事を提供したりしない。学生の自主性に任せている。私たちは、リソースを提供するだけである。学生はそれを見ていいものを取り込んでいく。

次に雇用主に関するHPである。このページで聾学生と面接するのがはじめてという企業では、どのようにしたらいいのか聴いてくることもある。こうした時、聾学生との面接に関するウェブサイトの場所を教える。そこには聾学生との面接の方法が書かれている。これらはリソースであり、学生を支援するための情報である。

質問

Q：面接のとき通訳は企業が準備するのか、それとも学生が準備するのか。

A：時と場合による。NTID に企業がくる場合には NTID が通訳を準備する。学生が企業に行くようであれば、企業が通訳を用意するのが責任である。このような場合、学生が企業に対してどのように通訳をさがすのかを検討したりする。これも学生を育てる教育の一環である。企業が通訳を提供できない場合は、別な方法で面接手段を考える。

Q：企業から NTID の学生をとりたいというアクセスがあった場合、その求人はどの部署にその情報はいくのか。

A：ウェブサイトに乗せる。仕事というカテゴリがウェブにある。学生のメーリングリストに求人情報を提供する。求人情報も掲示が学内にされている。それ以上はしない。

カウンセリングサービス

・学生の成長とは

それぞれの学生は、疎外感を感じることなく、一人ひとりがどこかのグループに所属している。学生たちは、人々や環境から影響を受けている。また学生は、人々、すなわち家族や友人などから影響を相互に受けている。学生がおり、そして彼、彼女の健康状態がある。そして成功していくための要素が中心にある。次に大切なものは、心理面である。体が健康であってもストレスを受けて問題を生じて心理面で影響を受ける。次に家族である。学生は、NTID におり、そのうちの何人かは家族と離れて暮らしている。しかし家族からの影響を受けている。20 年以上前とくらべ大きな変化は、技術の変化がある。ページャや e-mail、ポケベル、コンピュータを使ってコミュニケーションを行っている。遠くはなれていてもこうした媒体によって家族と連絡をとり、そのため家族の影響は大きい。とりわけ 18 歳から 22 歳の学生は、友人関係を主としている。学生は、家族とはなれて暮らしているため、より関係を友人に求めていく。次に学生は、それぞれのやり方で教員との関係を築きあげていく。学生によっては、ラボやクラスで、一人の先生一緒に 3 時間も 4 時間も何時間もいることで、いろいろな話をするすることで、より強い関係を作っていく。最後に、カルチュラルポリティカルと言い、学生たちをとりまく町や国、州、世界と学生たちの関係となる。すなわち、個々人は、いろいろなグループに所属していき、身体的なもの、認知的なもの、そしてだんだん世界にひろがっていくということである。しかし、学生の中で問題となることがある。

・カウンセリングモデルと理論

1. カウンセリングとゴール

ここでは、学生の内省的な心理面の、すなわち学生が内に秘めている問題に関して、その学生が育ってきた環境、バックグラウンドについて理解するということが大事である。それぞれのステージにおいて、人格の発達に焦点をおいて学生の心理面プロセスを話していく。内面の問題を解決していくためには、心の構造を知ることが大切である。そこに重点をおく。このアプローチは長く時間がかかる。それは年単位である。残念なことにそれほど時間を多くとれない。こうしたアプローチは、学生にたいして有効に働いている。これは学生の思想、世界をどうみているのかに焦点をあてている。カウンセラーを通して自分のアイデンティティを確立したり、自分の行動、行動に悪いところがあれば直していったりする。例として、時間の管理、カウンセラーは学生にどう時間をコントロールしてい

ったらよいのかをアドバイスしたりする。カウンセラーは、学生に大学生生活の成功をするためのスキルを教えていく。過去に関して理解していくことは特別必要はない。そしてこれまで話した3つの方法というのが、認知行動学の理論である。

2. 現実理論

これは、主に学生が自分自身をどのように受け入れていくのかを示している。そしてどのようにストレスを自分で扱っていくのかということを示している。そして自分自身の周りに選択の余地があるのかということである。これらに関して知っていくことである。

3. システマティックの理論

家族をシステムとしてとらえた理論で、個人と他人との関係を調べていく。こうした方法である。新入学生がこの大学に入ってきて問題のある人たちは、主に誰とも関係をしないで、自分一人で悩んでいることが多い。私たちの仕事は、こうした一人で寂しい思いをしている学生に、いろいろなことを教えていく。そうした仕事である。

4. 2つのカウンセリングモデルについて

最初のモデルは、アーサーチッカリングの考え方である。有名なリサーチを行っている人である。彼は、どのように学生がアイデンティティを確立していくのかの手順を調べた人である。彼は、アイデンティティを確立していくためには、7つのステージがあることを提示している。これらのステージは、すべての人が通るステージである。主にほとんどの学生たちは、この7つのステージを通ると言ってよい。

まず自信をつける。つまり自信をつけることは、技術をみつけることである。技術をみつけることで、自信をつけていくということになる。それが重要な過程である。

次に感情のコントロールをすることである。ある学生は、自分をコントロールできない。そのため、先生と会って感情を抑えることができないため、怒鳴ってしまったりする。彼の感情は正しいものである。ただ感情を抑えることができない場合などの問題がある。つまり、自分自身について知っていった自分自身をたよりにし、自分自身でやっていけるようになる過程である。つまり単なる独立心や自立心をつないでいくことだけでなく、時と場合によって人に頼ることもいいということを学ぶステージがある。つまり必ずしも自分自信でやっていかなければいけないということではなく、時と場合は人に頼る技術、たとえばチュータを頼ったり、自分一人でお金を稼ぐのではなく、奨学金をもらったりすることを学んでいくことが求められるステージがある。また成熟した人間関係を身につける。成熟した人間関係を身につけ、自分自信のアイデンティティを確立していく。すべてのステージは、アイデンティティ確立にとって大切である。しかし、このステージというのは、よりアイデンティティ確立にとって重要となる。聾学生には、様々なコミュニケーションを好む学生がいる。また人それぞれのバックグラウンドは違う。聾学生の中には、聾家族

をもっている。そうした人たちは、聾学校で育ってきている。そして聾学生の中には、親が聞こえる人でメインストリームの学校で行って育ってきている人もいる。つまり、人それぞれが異なるということは、人それぞれがアイデンティティをもっているということである。つまり自分の将来、目的に対して考え方を向上していく、そういうステージである。

最後のステージはいかに自分の環境に所属しているか、所属している文化に関して向上させていくというステージである。

第2のモデルとして、キャリアディベロプメント、すなわち仕事などの成長に関わるモデルである。私たちのところに来る聾学生は、将来何をしたいのかわからない学生もいる。この理論は、ジョンフォーラムの理論である。この理論は4つの考え方を有している。その考え方は、6つのカテゴリーに振り分けられるとしている。たとえば、ある特定の職種に所属している人たちは、特殊な感情表現をもつ。職場によって、異なる感情表現をもっている。つまり環境が人の性格に与える影響というものがある。職場が個人に影響を与える。成功している人は、職場で自分の能力や自分の価値を見いだせる人である。ジョンフォーラムが出した答えというのは、もし人が環境とマッチしていると自分自身の価値を上げたりして、能力に自信をもって成功につながる。成功の意味は、ひとつの仕事をつづけ、そして仕事に対して満足感があり、そして仕事に一所懸命取り組むことができるというものである。

6つの性格のタイプがある。最初は、体を使ったタイプである。次は問題を解決するのが得意なタイプで科学者などは数学的なもので解決していく。3つめのタイプは、より芸術的な環境に置かれている人たちのようなタイプである。それらには、音楽的、ダンス、演劇、文学などの携わっている人たち、そして自己表現が豊かな人たちである。4つめのタイプは、社会的な面で人を助ける人の性格といったタイプである。たとえば、学校の教師やカウンセラー、ソーシャルワーカーなどの職業に携わっている人たちである。次は、エンタープライズというカテゴリーにあてはまる人たちで、会社でのリーダー的な役割をもつ性格のタイプである。たとえばセールスを行っている人たちであったりする。最後の2つはビジネス関係である、最後の性格は、コンベンショナルと言われるもので、リーダーを助けていく性格のタイプである。

ジョンフォーラムは、すべての職業は6のカテゴリーに入ると考えた。そして、それをもとにあるモデルを考えた。これが六角形でつながりがある。エンタープライズはビジネスに関係している。ビジネス関係は、コンベンションとつながっている。

NTIDは、この図を使っているいろいろな職業にふりわけて学生に見せている。これを使って学生の興味ある職業分野をさがしている。たとえば、学生の筆記技術能力を知るのに、このような図を使って知ることができる。この他、コンピュータを使って能力を知ることができるようなものも用意している。能力に応じて様々なテストを行っている。コンピュータプログラムは、より深く知ることができるためコンピュータを使うのを好んでいる。学

生がテストを受けるとレポートが出てくる。そのレポートによって自分がどの部分に自分が所属しているのかを知ることができる。自分がどの職業に近いかわかることができる。自分の興味ある分野と自分の価値観というもので調べることができる。他に出たレポートをこのコンピュータにプログラムすることで、自分自身を分析でき、このコンピュータによって、異なる職業分野に振り分けられる。そして仕事を個人で調べることができるようになっている。そして、その仕事に必要な教育を調べることができる。そして実際に仕事をコンピュータで探すこともできる。とてもすごいプログラムである。

このようにカウンセリングでもさまざまな方法を使って提供している。ほとんどの場合1対1で行っている。グループで行うこともある。たとえば私たちがクラスに出向き、学生たちと話し合うこともある。たとえば夜や夕方に行われる特別授業でカウンセリングを行うこともある。また入学生のオリエンテーションに出向いて行って指導をしたり、カウンセリングを行ったりしている。その他、キャリアディビジョンメイキングというのがあり、自分の仕事を決定する、あるいは見つけだすときに行うワークショップがあり、こうしたワークショップがあるときに私たちが出向くこともある。事実、ここに来る学生は、半分の学生たちが自分の専攻分野を変える人たちである。このため彼らが専攻を変えたとき、これらのことを行って指導をしている。彼らが私たちの仕事である。学習に対するアドバイスやどのようなクラスをとっていったらいいのかのアドバイスをしたり、その他に将来どのような職業につきたいかの相談にのったりする。どのようなクラスをとっていったらいいのかを話し、このコースをとることで、自分が将来どのような職業についていけるのかのカウンセリングを行う。アカデミックデパートメントという学部とも近い関係にあり、共同作業のようにしてサービスを提供している、ウェブサイトをもっている。(ウェブサイト参照)

まず学生は、多くのメニューから、誰が自分のカウンセラーだろうというのと、このトピックからいろいろな情報(学生の姓名等)を入れることで、自分のカウンセラーを知ることができる。たとえばクリストファという名前を入力すると彼のカウンセラーがでてくる。新しく入学してくる学生は、ウェブサイトを見てもらい、そこをクリックすることで必要な情報を得ることができる。

質問

Q：カウンセラーはどのように決定されるのか。

A：アカデミックデパートメントがあり、そこで決める。学部の専攻によってその学部にあったカウンセラーが用意されている。たとえばアンが映像に関する専門が映像であれば、彼女がカウンセリングを担当する学生は、同じ学科の学生である。それぞれ学生は専攻学科が違うわけであるからビジネスであればビジネス専攻のカウンセラーである。カウンセリングもそれも関係する教員と関係をもっている。

Q：今のシステムは、聾学生だけではなく、RIT のすべての学生が使用するのと同じシステムか。

A：健聴学生のためのものであり、健聴学生は別のシステムである。

NTID にいる聾学生は、カウンセラーのサービスと学業上におけるアドバイスを与えるサービスがある。聞こえる学生には、大学側にカウンセラーが別にいる。他の7つの学部にある聾学生は、異なるアカデミックアドバイザーを受ける。

Q：オリエンテーションやフレッシュセミナなど、いろいろなワークショップなどで、学生にアドバイスを与えるということであるが、それはどのように行うのか。もう少し詳しく話して欲しい。

A：それには2つのコースがある。一つは、フレッシュマンセミナーで、新入学生は、必ずとるコースである。どんな風にして、大学生活をしていくのか。そして学業上で、どのようにすすめていくのかについて話をする。そして学内にあるリソースをどのようにアクセスしていくのかについても話をする。はじめの1年間は、いろいろな問題が発生するが、それに対して、どのように対処していくのかについても行う。他のクラスの学生との関係作りも提供している。

もう一つのコースは、学生のキャリアについて話すコースである。ここに来る学生は、どこの学科に所属したらいいのかわからない学生もいる。そういう学生たちのお手伝いをしたり、こういう人たちが、どの学科に属したらいいのかというお手伝いや、ずっとこの大学にいて変えたいと思っている人たちについても同じようにふさわしい学科を見つけるお手伝いをする。

メインストリーム（Mainstreamed Student Issues）

．カウンセラーシステムの概要

最初にカウンセラーは、専攻している学部によって異なるということである。カウンセラーは、聾学生を助けるサポートプログラムチームの一部として協力的に働いている。例えば、ビジネススクールでのノートテイキングや通訳のサービスを提供しているところの一部である。この部門は、学長的な人もいるし、チェアパーソン、アドバイザー、チューターがそれぞれの決まった学部にいる。そのほかにノートテイカーをコーディネートする人が一人いる。もちろんカウンセラーもいる。通訳は他の部とも一緒に働いているが、ここでは一人であり一緒ではない。私たちは1対1のカウンセリングサービスを行う。学習面でのカウンセリングを行う。職業カウンセリングも行う。新入学生と2年生がどのように専攻を決めていくのかのカウンセリングも行う。私たちは特定の学部にも所属し、先生方のカウンセリングも担当したりする。

．メインストリームの学生の問題

これらがメインストリームに所属している学生の問題点である。これらは、アイデンティティの問題である、アイデンティティとは、「いったい自分は誰なんだ」というものである。コミュニケーションの問題もある。どのような積極性のある学習者になっていくのか、学習に対してどのように準備をしているのか。環境からくるプレッシャー、そして自分をサポートしていくことについて、自分の中でいかに作っていくのか、そして職業についての心配ごとや考えなければならないことなど、新入学生は、ほとんど考え方が若いですが、入学した段階では自分では何になりたいのかわかっているつもりでいる。しかし、学生生活を通してだんだんと年を重ねると自分は、将来何になりたいのかわからなくなってくる学生が多い。多くの学生は、アイデンティティの問題を抱えている学生が多い。メインストリームにいる学生の中には、自分がどのグループに属しているのかわからない。たとえば自分が聾のグループに所属しているのか、健聴学生のグループに属しているのか、あるいは口話を使って特定のグループに所属するのかなどである。こうしたことが新入生に多くみられる。

．学生の立場から

学生のクリストファです。私が育った環境というのは、聞こえる環境の中で、さらに聾プログラムをとっている学生もいる環境の中にいた。そのプログラムの中では、どのように話したらいいのか、スピーチセラピーなどあったりして、どのようにして聾の人たちと

話しをしていく中で、助けていったらいいのかということもプログラムの中で学んだ。はじめは、聾プログラムに入った。そのプログラムを行っている聾学校は、自分の家から遠かった。しかし、両親がいつも疲れている私を見て、大変だと思い聾プログラムをやめてメインストリームに移らせた。メインストリームの学校では、自分一人だけが聾の学生であった。メインストリームにいる間、すなわち大学に行く前まで、いっさい通訳やノートテイクもいかなかった。ずっと、口話で授業を受け手きた。常にひとりぼっちであった。もっともチャレンジしたのは、まわりに手話ができる人が誰もいなかったから、私自身も話すことを学ぶことをしなければならなかったし、自分が小さな時は、話すことができなかったが、メインストリームの学校で学ぶなかで、スピーチの言葉も伸びてきた。だから大学に入学するときには、聾の世界に戻ってきたいと感じていた。それで、RIT を選んだのである。なぜなら、RIT の環境は、聞こえる人と聾の人の両方がいる環境だったからです。ギャローデッド大学といった聾者だけの大学があることも知っていた。その大学に行きたいとは思わなかった。それは、私はずっと健聴学生と一緒に育ってきており、健聴学生と離れたくなかったという理由もあります。ここに来てからすぐ、単語の手話を覚えた。まわりの人たちは、私は、はじめ聾ではなく難聴学生だと思っていた。なぜなら聞こえることはきこえるが難聴の人よりは理解できない。私はずっと口話で育ってきているので、私がずっと難聴であると思っていた人たちが多かった。現在は補聴器をしているが、もし、はずしたらまったく聞こえない。したがって聾であると思っているし、それが自分のアイデンティティだと思っている。この大学では、ほとんど聾学生と遊んだり、つきあったりしている。私が思うに、難聴の学生は主に聞こえる人のグループと一緒に交流をしているように感じる。私は聾学生とも交流するし、健聴学生とも交流している。なぜならずっと聞こえる人たちと育っているからである。

メインストリームにいる多くの学生は、どこのグループにいるのかわからない人がいる。聾のグループでもないし、難聴のグループでもない、間を歩いている人が多く見られる。

ほかの問題は、まわりの人たちが聾の自分のことをどう思っているのかということである。私の立場が聾というグループで見られているのか、聾個人としてみられているのか。そのような問題が学生の中にはある。その他に起こり得る問題として、自分が聾の人のコミュニケーションと合っているのか、聾の人たちから自分がどう見られているのかなどもある。

私の場合、初めは手話ができなかったので、ASL (アメリカ手話) を使っている学生たちからは、グループに所属していないと思われていた。この学校に入学した新入学生のころの友達というのは、聾者であるけれども話すことができる、口話で話す人たちと交流をしていた。手話、ASL (アメリカ手話) を使う人たちとも交流をするようになった。

他に起こりうる問題は、先生が自分をどのようにみているのか、先生が自分の能力や個性を疑っているのではないか。自分のことをどう思っているのかという問題である。メインストリームにおいて、次に起きる問題は、コミュニケーションの問題である。同じメイ

ンストリームのクラスにいて、他の聞こえる学生とは少し壁がある。違ったグループにいるのではないが、実際に聞こえる人たちと参加できているのか、そのような問題がある。

もちろんクラスの中では、聾学生との方がうまくいく。それはコミュニケーションが簡単であるからである。しかし、時に聞こえる人と仕事をしたい、活動をしたいと思ったが、どうしてもコミュニケーションが、バリアになってしまっていてできないことがある。時には、聾の人を敬遠してしまう人がいる。彼らは、手話をつかうことができないため、聾者を嫌う。

これは、彼の好むトピックである。私のとっている学部は、めずらしい。エンジニアの学部には聾の学生が多くいるので、通訳を簡単に得ることができる。私のいる学部であるパブリックポリシーというところは、一人しか聾学生がいない。このため通訳もカバーできない。たとえば、パブリックポリシーの基本的な授業、パブリックポリシーの分析の仕方のベーシックな部分でも、聾者は一人しかいない。ここ学生には、1100人もの聾者がおり、通訳者がこれらの学生のすべての分野をカバーできるかということそれはできない。通訳者は、その学部の特殊語彙を知っていなければならないし、専門分野の知識がなければいけない。たとえば私がとっている経済のクラスで、もしアート関係の通訳者が経済関係の通訳をするとなったときには、それはできない。この単語は、手話ではどう表すのかが多くきいていかなければならない。したがって通訳者は、特定の得意の分野がなければならぬ。

ノートテイキングは、重要である。あるところでは、2時間でノンストップの講義があり、その時に依頼したノートテイクが書いたのは、たったの2ページだったということがある。それに対して、すごく驚いた。そしてなにがあったのか、コーディネータに話したことがある。ノートテイクは、大切である。それは、教員と学生が何を話して、学生が教員に何を質問したのか、それは試験にも関係してくる。

いろいろと問題があったと思われるがこのときに私は、カウンセラーのところに行った。その時にカウンセリングが、どのように回答をしてくれたのか。またどのように助けてくれたのが問題となる。

カウンセラーのもとにいき、何がおこったのかを説明する。カウンセラーは、ああいうことはやったの？こういうことはしたの？ということを書いてくる。

Q：学生がカウンセラーのところに行ったとき、何かもしっくりいかないときに、その人はたとえばチュータとか、別のサービスのところに参照されたかどうか、他の場所に移されたかどうか、あるいはニーズにあう場所に紹介されたかどうか。

A：相談にいったカウンセラーが回答を出せない、手助けができないとき、他のカウンセラーのところにいき、話をしたり、またカウンセラーは、質問したいことに関しての自分の答えをもっている人たちを紹介したりということはある。いままで、私が支援をもとめてきたときに、私のカウンセラーは、それに対して手助けをしてきた。もちろん彼がも

ってきた問題を解決できるわけではない。

Q：自分のアイデンティティを確立するときに、手話を使うとか、口話で話すことは問題にならなかったか。

A：高校時代のことですが、健聴学生と話しているとき、私は、口をよみとることができ
るが、自分をはっきり言いたいことを伝えることができなかったこともあった。たと
えば話し手が、くるりと背を向けてしまうと、何を言っているのかわからなかった。
手話をつかうようになってから、コミュニケーションの問題も徐々に解決するよう
になった。ただ外部の人たちにこういったことを、どうやって伝えていくのかは、重
要な問題である。RIT が好きで、手話を知らないひとでもいろいろと教えてくれる。外
部にこの重要性を知らせることは大切なことである。

Q：メインストリームから RIT に入った学生と、NTID の聾学生と違ったカウンセラーが
いるのか。それとも同じ人が担当するのか。カウンセラーの内容はちがうのか。

A：カウンセラーの内容は異なる。NTID に着目したカウンセラー、別の方は NTID をの
ぞいたカウンセラーである。NTID に属している学生、NTID 以外に属している学生な
ど両方ともに関わっている場合もある。

学生生活

・ 支援内容・組織構成

メインストリームの学生が、キャンパスの中でどのように生活していくのか、そしてその時に起こりうることに對して取り組んでいっているのか。このプログラムは、メインストリームの学生だけではなく、NTID に所属している聾学生にとっても大切なことである。

学生生活支援として、1つは、主にドミトリーにおいての学生生活である。メインストリームのドミトリー聾の学生が60%で、残りが健聴学生40%である。その活動は、ミーティングをおこなったりする。活動には3つある。ひとつは、活動である。2つ目は、学生生活規則の活動、そして3つ目は、ドミトリーにいる学生の支援である。主に集中して行っているのは、キャンパスにおける聾学生と難聴学生を対象に行っている。アウトリーチプログラムなどもある。リーダーシップなどを育成することに携わっている。

また女性を対象にした活動で、たとえば女性に対するセクシャルハラスメントなどである。教育のディスカッションは、Making Difference である。違いを明らかにするということである。この活動は、学生がクラスのなかだけではなく、学外でも多くの利益の支援を受けられるようにする活動である。

私たちの組織は、NTID の組織とは異なる。この組織は教育関係の人たちも携わっているし、学生と分けている。RIT のサービスとまた異なるが、RIT とも協力してサービスをしている。

支援形式としては、質問に對して答える。何がメインストリームの学生に必要とされるのか。これに對して答える。

・ 学生の問題

聾の学生に必要とされるものは、健聴学生とまったく同じものである。多少の違いはある。聾学生にとっては、よりチャレンジすることもある。このキャンパスでは、いろいろなコミュニケーションを使っている。たとえば手話、ASL (アメリカ手話) を使い、声は使わない人、ASL (アメリカ手話) をまったく知らない人、そして聾者でも手話を知らない人がおり、このためコミュニケーションの多様性がチャレンジとなっている部分がある。それが一つの問題である。健聴学生と類似した問題もあるというのを話すならば、どのように学校生活になれてくるのかである。これまで家から学校にかよっていたが、家での生活とドミトリーの生活がどのようにかわっていくのか、それは、健聴学生と類似した問題であると言える。高校時代には、両親がいろいろやってくれているので、自分では、何かをしなければならぬということはないが、大学に入ること、自分で何事もやって

いかなければならないため、そこで問題が発生する。

学生には、いつ課題をやっていいのかなどという人はいない。学生の中には、いつホームワークをやっていいのかわからない人もいる。時間をどのように使ったらよいかかわからない学生もあり、私たちの助けが必要な学生もいる。

その他交友関係をどう作っていったらいいのか、ルームメイトとどのように関係をもつていったらいいのか、同じフロアにすんでいる人たちとどのようにいい関係を作った方がいいのか、チームワークをどのように保っていったらいいのかなどである。こうしたことに関して支援が必要な学生もいる。

学生の中には何を食べたらいいのか。何を作ったらいいのかわかっていて、中には1週間ずっと、ハンバーガーやフライドポテトを食べたりして、いやになっている学生もいる。こうした問題は、聾学生でも健聴学生でも両方に起こる問題である。聾に関していえば、どのように他の学生と交友関係を保っていくのか、コミュニケーションをどのようにとっていくのが問題となる。私たちが直面している最大の課題は、聾学生の中には殻に閉じこもっている学生もいる。高等時代も通訳者を通してコミュニケーションしてこなかった。他人とのコミュニケーションがないため自分を殻にとじこめている。それが私たちの課題になっている。聾学生の中にはずっと両親やアドボケータ、アドバイザー、カウンセラーなどが自分のために主張してくれていた人たちがいたが、大学にきて一人なので、孤独感を感じてしまう者がいるのも事実である。大学生活では、自分自身が聾であることを主張していかなければならなし、自分の権限を主張していかなければならないことは学生にとってチャレンジである。

ドミトリーでは学生のスタッフも雇用している。その中には聾学生もいる。もしも、ミーティングを行う場合には、コミュニケーションの面で少し時間がかかったりする。スタッフは、全員手話ができるが、聾に話している時と健聴の人と話をするときとは、伝え方がちょっと違う。このあたりで明確に伝えるという意味で、時間がかかってしまう。学生の個人個人にあった必要性を見いだしていくのも大切なことである。なぜなら、学生それぞれが育ってきた環境は異なり、それぞれにあったやり方がある。それに合ったやり方が大切である。

私たちがかかえる問題は、学生のドミトリーのルールや行動をとる学生が中にはいる。これはアメリカだけではなく、国際的な問題である。ただアメリカとは異なるのではと思う。目的は、平穏な生活ができることである。学生を卒業した後、職業にも役立つようなことを寮生活で身につけてほしいと願っている。例として学生生活プログラムがある。幾人かの聾学生の中には、かつて聾学校にいた人と一緒になり、そうした人たちとは友人関係ができていく。そうしたことがより友人関係を作ろうと積極的になる。友人関係を支援するためにこうした部門がある。プログラムのコーディネータは、うまくいっている。学生生活でもわるい面もある。

学生の中には、孤立した中で育ってきている。聾者にとって大切な情報、有益な情報 2

を失ってきている。健聴者であったならいろいろな情報を得てきているのに、情報を得ていないと言うことである。たとえば聾学生が健聴学生と交友関係をもっていれば、得られる情報が多くあると思われるが、それをなくしてしまってきているのが問題となることである。私たちが望んでいるのは、聾学生だけの交流ではなく、多くの聾学生や健聴学生と友人関係などをもっていくことである。そして学生たちが、いままで逃してきた情報を得てもらいたいと望んでいる。そして私たちが学生たちをコントロールし、学生生活がうまくいき、成績もわるくならないようにするのが仕事である。

．ドミトリーについて

12階あり、半分に区切っている。その内のいくつかを健聴学生のためのもので、いくつかの階は聾学生だけのためである。いくつかのフロアは聾者の学生だけであったり、いくつかのフロアは健聴学生だけだったりする。あるいは聾学生、健聴学生と一緒に住んでいるフロアもある。聾学生と健聴学生とを分けているのは、学生の生活の心地よさというのがある。聾学生の中には、聾者だけいっしょに生活したいというのがある。またいままで育ってきた環境、つまり健聴者のメインストリームの中で育ってきている人もいる。このため分けている。聾学生には、聾学生のルームメイトがいる。健聴学生には健聴学生のルームメイトがいる。ここでどうして聾学生に聾学生のルームメイトを与えるのか。健聴学生に健聴学生のルームメイトを与えるのかというについて話す。

何年前、聾学生と健聴学生と一緒にしていた。というのは差別をしないためである。その後、学生たちからフィードバックがあったが、お互いに嫌いだったというものがあった。聾学生と聾学生とでもお互いに問題があった。つまり、うまくいかなかったケースが多かった。今は、リクエストがなければ聾学生は聾学生とルームメイトとする。しかし希望すれば聾学生は、健聴学生と一緒にルームメイトをもつことができるし、健聴学生が聾学生のルームメイトをもつこともできる。これは、とりわけ NTID にきて、新入学生に見受けられるものである。家族から離れてしまって、コミュニケーションに関する問題をもってしまうことはチャレンジとなってしまうことなので、できるだけ避けようとしている。もし少人数の聾学生に関して、マネージメントをしているのであればこうしたことは考えない。おそらく聾学生の少ない他の大学であったなら、同じようなことはしない。振り分けなどしない。

．スタッフについて

スタッフは、27人で、そのうち60%が聾で、40%が健聴である。スタッフのうち17人が聾スタッフで10人が健聴スタッフである。学生とスタッフの担当比率は次のようである。学生を担当するスタッフの比率は次のようになる。

Hearing	学生	スタッフ
	34	: 1

DEAF 学生 スタッフ
 24 : 1

・マッチアッププログラムとロールモデルプログラム

ひとつは、学生同士をマッチさせることである。自分と同じ環境で育った環境、自分が尊敬できたり、真似たり、比較できたりする人で学びとることができるような学生をマッチさせることである。これによってリーダーシップを期待する。

その他に同じような環境の学生を捜し出し、そして他のデパートで必要があれば、そうした学生たちを紹介し、訪ねてきた人たちの必要性に応じられるようなマッチアップを作りだしていくことである。

学生どうしのマッチアップがなぜ大切なのか。同じ環境で育ってきた学生と一緒にさせることはすごく大事なことである。それはよい結果を得るものとなっている。たとえば、スペイン系の聾の学生がいる。この場合、私たちが促してスペイン系の学生どうしと一緒にする。新入学生は、交流関係を築くのが難しい。こういう同じバックグラウンドで育ってきた人たちを、私たちが仲介して一緒にさせる。これによって、新しく入ってきたときにスムーズは、コミュニケーションができる交友関係ができるようになる。こうした支援である。

プログラムの関係、お互いにどのようにサポートしながらサービスをしていっているのかを話す。

大切なことは、それぞれの学生をそれぞれのデパートにおいやってしまうのではなく、お互いに違ったサービスを与えていくこと、お互いに協力しあってサービスを与えていくこと、これは大切なことである。独立してサービスをおこなってしまうと、私たちはその分野のスペシャリストになってしまう。必要としていない学生たちは、私たちのところにこない。お互いに協力してやっていたら、お互いに何をやっているのかがわかる、必要であれば学生をあっちの部門からこっちの部門に移動させ、サービスをすることが可能である。

たとえばキャンパスの中に女性センターがある。この女性センターで新しいディレクターを探している場合がある。この場合、女性センターで働いている人たちだけでさぐすのではなく、他の部署でも探してもらえるように互いに協力関係が成り立っている。他の人の時間を使って、ディレクターをさがしてもらうことは、大変恐縮だが、ディレクターを探すとなれば、やはり、新しくディレクターとなる人は、聾者に関して直面する知識がなければならぬ。聾に関する適切な人を探するためには、聾を理解している協力関係が必要である。適切な人材を選ぶには、聾に関係しているサービスをおこなっている協力関係が大切である。

どのようにドミトリーで生活をしているのか。私たちのところでは、RIT で契約しているホテルで生活しているひともある。特別な家であるインターナショナルハウスと呼ばれ

ている家があり、その他にもグループが滞在できるような家も提供している。その他にもキャンパス内のアパート、キャンパス外のアパートがある。スタッフメンバは、寮に滞在し、できるだけ学生を監視できるようにする。多くの監視が必要である。スタッフはキャンパス内にあるアパートにも住んでいる。そして、監視をおこなっている。キャンパス外に住んでいる学生の場合は、監視をしない。

Q：スペシャルハウスとかインターナショナルハウスは、どのようなハウスなのか。そして RIT インというホテルはどのようなものか。

A：たとえばスペシャルハウスというものは、同じ興味のある、同じ学部の人たちが集まって生活しているハウスである。たとえばコンピュータ関係であれば、同じ学部に所属している学生たちが借りて生活できるような場所であり、家である。またエンジニアを専攻している学生たちが一緒に止まれるような家である。これがスペシャルハウスと呼ばれるものである。

RIT インは、RIT が実際に与えているもので、ホテルとまったく同じものであり、一部屋に2人で学生が生活する。ホテルは、学校から3マイルくらい離れている。アパートが足りないとか、部屋が小さいから理由でホテルに滞在したいという学生もいるし、ただ RIT インに希望する学生がいる。RIT インは大きな部屋であり、プールもある。このため好んで RIT インに滞在する学生がいる。RIT には 15,000 人の学生が生活しており、キャンパス内のアパートとドミトリーでは足りないのが現状である。このため、かつて学生は、キャンパス外でアパートを借りることをしなかった。数年前にある男性が私たちにホテルを寄付してくれた。今ではホテルをコンファレンスに使ったり、学生の宿泊する設備になったりしている。したがって RIT インは、学生の生活場所のオプショとなっている。

Q：聾の学生がここに入る場合に、ドミトリーで生活することをすすめているのか。

A：ドミトリーで生活するのは、必然的なものとなっている。1年生の場合は、10 マイル以内で生活している人たちは、ドミトリーで生活する必要はない。しかし 10 マイル以上離れたところに住んでいる人は、ドミトリーで生活しなければならない。ドミトリーで生活することを強制している理由は、1年生から寮生活を学ぶことができ、学ぶことによって卒業につながると信じて、こうした措置を進めている。

Q：寮生活での問題点は何か。ワースト3は何か。

A：ワースト1は麻薬や薬、アルコールである。

次は、ハラスメント、たとえば悪質メールを送ったり、いじめたりすることである。たとえば仲間の学習の邪魔をしたりする。3つ目は、鬱になってしまうこと。それによってクラスにいかなくなってしまう。自信をなくしてしまう学生もいる。成功する気力

を無くしてしまったりするのも問題である。そのような学生の兆候が現れたら、すぐ学生に働きかけるようにしている。もし学生のそのような兆候が何回かみかけられたら、私たちに報告するようになっている。そしてカウンセラーが電話をかけ、出向き、学生をカウンセリングするようになっている。

Q：聾学生と健聴学生との間でトラブルが起きたとき、健聴学生に対して障害の理解に対する理解を行っているのか。

A：今では、依頼がない限り聾学生と健聴学生と一緒にしないようにしている。フロアによっては、聾の二人のルームメイトが住んでおり、隣に健聴学生が住んでいるということもあり得る。もしそのような時があれば、オリエンテーションでビデオを見せて、どのように聾学生と健聴学生の生活が違うのか、ドミトリーの生活が違うのかをビデオを通して知らせている。それは2つの世界というビデオである。

ビデオでは聾学生と健聴学生が、大勢いる学生生活をどのように送っているのかを見せている。ビデオの中で、ある女子学生が「はじめてこの RIT に来たときに、最初に先生をみていないで通訳をみていた」という話も盛り込まれている。もちろん健聴学生の中には RIT にきてはじめて聾や手話に興味をもって、そこから手話を習いはじめる人たちもいるし、そのまま興味をもたないま生活をしている学生もいる。聾者と健聴者のお互いの文化や学生生活の違いを知るオリエンテーションは、学生たちは必ず行われる。

Q：オリエンテーションは、いつ行われるのか。

A：実際のクラスがはじまる1週間前に強制的にオリエンテーションを行っている。「2つの世界」というビデオを見せたり、学生どうしが住んでいるフロアでミーティングを行ったりする。新入学生がとらなければならないコースの中で、聾者の紹介をおこなったり、学生生活、聾文化を知らせている。その他、毎週水曜日に聾学生が健聴学生に手話を教えるなどの活動をしている。それは、学校の単位にはならない。聾学生にはトレーニングを行い、それに対してお金を払っている、手話を教える聾にとっては、リーダシップの育成によいものとなっている。また健聴学生にとっても聾者を理解できることでよい経験となっている。

Q：オリエンテーションは、聾学生も健聴学生も強制のプログラムであるのか。

A：強制的なオリエンテーションは、9月の入学の時期におこなっているが、冬学期、春学期に入ってくる学生については、人数がすくないため、このようなオリエンテーションは行っていない。

Q：聾が手話を教えるプログラムは、大学が用意しているものなのか。

A：学校では用意していない。クラブ活動のようなものであるが、教えることに対してのお金は大学側が払う。

Q：手話の教え方をクラブで教えるのか。聾者が手話を健聴学生に教えるのか。

A：私たちが教師がわりになる学生に対しては、トレーニングを行う。そしてトレーニングを受けた聾者は、手話を教える。聾者文化についても手話をおしえる中で教えている。

．最後に

聾文化をオリエンテーションの中に盛り込むことができたのは、すごくうれしく思っている。しかしここに至るまでは大変なことであった。学校でも聾文化を教えることをオリエンテーションで行いたいと思ったら、時間がすごくかかることをお伝えしておきたい。時間がかかるが、ビジョンを無くさないでほしい。大切なことは、他の学校と強い関係をもっていることで、聾文化とか聾者を全面に出せる学校となると思われる。35年間かかって、やっとこうしたことまでたどり着いた。まだ満足はしていない。しかし私たちはやってく。私たちは違いを作っていくことが重要だ。

今年の卒業式には、一人講演を行う学生がいる。その学生は、聾学生であり、今回はじめてである。35年かかっており、みなさんは、あきらめずにやることである。

聾関係における学校間の関係作りは、成功するためには非常に大切である。ビジネスサポートは、ビジネスでよい関係をもっていたことで、あのようなすばらしいサービスができてきた。先ほどもカウンセラーについて話を聞いたが、別の部門で働いているカウンセラーと良い協力関係や友好関係をもっていることで成功につながっていることがわかる。職業指導に関しても、そこで働いているスタッフたち、外との関係を保っていることがあのようなすばらしいサービスを提供することにつながっていると思っている。メインストリームにおいて聾者の人たちが成功するにあたっては、さまざまところでの交友関係というものが大切となる。簡単な、誰でも気づくことであるが、時にだれもがあしらってしまって、軽くみてしまう。

C-Print について

参加者内訳

パム氏、イーサン氏（ソフトウェア担当）、テア氏（カスタマーサービスサポート担当）

発表パム氏

表記について Q・・・質問者、A・・・回答者、氏名は敬称略で記載
/・・・話者、< >・・・実演などの状況説明

C-Print システムは、話された内容をリアルタイムで文字にして表示するためのシステムです。このシステムは、聾学生と難聴学生、そして普通校から来たメインストリームの学生にコミュニケーションアクセスを提供することが目的であり、また、ラーニングシステムとしても使うことができます。

略語を入力していく方法と、音声認識を利用する方法の、2つの使用方法があります。C-Print システムでは、状況によっては要約しなければならないこともあるために、発話内容をそのまま文字にするのではなくて、意味にあった文字に変換（要約）します。この変換過程は通訳のプロセスと似ています。発話内容から不要なところを除いたり、重複を避けたりもします。作成された文章は、授業の後、学生が見ることもできます。リアルタイムに点字キーボードに送ることもできます。

C-Print でリアルタイムに文字を作成する担当者は C-Print キャプショニストと呼ばれており、様々なトレーニングを受けます。略語入力の方法、要約技術や授業が終わった後の編集技術といったトレーニングです。ですから、C-Print システムは、テクノロジーとテクノロジーを使う人で構成されています。

音声認識を使う場合には、マスク（マイク付）を使ったりします。略語入力のルールは、音韻論を基にして作られています。略語入力健康上の問題や入力時間の問題も回避できるでしょう。しかし、キャプショニストはこのルールに従わず、通常の入力方法で文字を入力することもできます。

音声認識利用では、2つのエンジンを利用することができるようになります。IBM社のVia Voiceには、現在対応しており、Dragon Naturally Speakingへ対応させるためのソフトウェアは開発中です。

発話内容をキャプショニストがシャドーイング（または、リピーティング）をすることの方がいいと考え、その方向で進めています。正確性の問題、編集のし易さ、文法上の問題（カンマやピリオドがあるかどうかなど）、音声登録の問題、教室のノイズ環境の問題などのために、間接的な音声認識というのを行っています。C-Print を使うときには、コントロールされた環境下で使用し、周囲からの影響を受けないようにします。例えば、ノイズに対しては、マイク付きマスクで対応します。

Q 三好 / マスクを口に押さえ付けて、発話しづらくないでしょうか？ また、発話時に音声漏れて授業の邪魔にはなりませんか？

A パム / <実際に授業で使っている市販のマイク付きマスクで実演> 確かにマスクには音漏れがありますが、シール部を変形させたりとかして、発話し易く、音漏れを少なくすることができます。

Q 平井 / 英語版の音声認識の場合、音声登録に要する時間はどのくらいですか？

A パム / Via Voice ならば2時間、Dragon Naturally Speaking ならばだいたい1時間程度必要です。以前のものよりは、早くなっています。

パム / 音声に関してもう少しご説明したいことがあります。音声認識技術というのは、現在も引き続き進歩しています。しかし、現在の段階そして教育現場では、キャプショニストを通した間接的な入力の方を好んでいます。

Q 三好 / 略語入力システムでは要約しますが、音声認識でも要約はするのでしょうか？

A パム / 要約もしますが、キャプショニストの能力によります。
もちろん、話している側が間違った場合など不要な箇所を省くような入力もします。

Q 三好 / スキルはどちらが高いと思いますか？

A パム / 略語(abbreviation)入力のトレーニングには、4から5週間必要となります。もちろん、音声認識は多少難しい、他人の声を聴きながら、発話し、しかも発話している自分の声が聞こえないという認知的な問題があります。どちらかという、音声認識の方が多少難しいとも感じます。聴きながら話すというところに、主に(トレーニングの)時間がかかってしまうということですね。

Q 白澤 / 音声認識の方にはどのくらいの時間がかかるのでしょうか？

A パム / 音声認識をさせるには時間はかかからないのですが、その後、どのように正確性を高めていくかということに時間がかかってしまいます。

Q デカロ / NTID は、聴きながら話すという音声認識を扱うための能力を高めるための研究を行ったのでしょうか？

A パム / いいえ、それに関して研究はしていません。しかし、聴きながら話すというのは両方の脳を同時に使っていることですし、通訳をしている人は、良いキャプショニストになれると感じます。もちろん、通訳者というのはすでに、そういうスキルを持っているので、さらにそのスキルを上げていくという必要はそんなにないと思います。

(デカロ) 高い能力の通訳者の話(他の事を考えながら通訳できる) 頭の中のプロセス

Q 三好 / 状況に応じて、C-Print と C-Print Pro の使い分けというようなことはあるのでしょうか？

A パム / Pro は C-Print の一部です。C-Print Pro は 3 年前に開発されました。使い分けということはありません。

Q 三好 / C-Print キャプショニストと Pro を使うキャプショニストの給与は同じでしょうか？

A パム / 待遇的には同じです。現在のところ、ほとんどのキャプショニストは略語入力システムを使っています。音声認識の方をやっている人にも略語入力もできた方が良くと勧めています。両方ができた方が良くと。

パム / C-Print Pro の特徴は、長くスクリーン上に文字が残るということです。もし自分でラップトップを持っていれば、スクロールバーで下げて見ることができます。

< 表の提示 >

この表は、誰がベネフィットを受けているかを示しています。

< C-Print 実演 >

C-Print を使うのに相応しい環境というのは講義です。グループ討論や講義中に数式や記号が出てくる講義は難しいので、普通のシンプルな講義にあります。また、グループ討論では、参加者が順番に発話するようにし、声が重ならないようにするというやり方だと、C-Print の使用が可能です。数学とか科学で C-Print を使う場合、より難しい問題が出てきます。これらの講義では、公式とか記号が沢山出てくるためです。

< C-Print ウィンドウ画面説明 キャプショニスト画面と学生画面 >

略語デモ 「cp」とタイプすると 「C-Print」と出る。

< 音声認識デモ >

学生側のソフトウェアに関する説明

- ・ ノートテイキングツールというものが組み込まれており、自分でノートを取ることができる。
- ・ 学生は使いやすいように、色や大きさなどカスタマイズできる。
- ・ 3つのオプション

- 1 . C-Print から送られてきた文字をハイライト
- 2 . C-Print から送られてきた文字をコピーし、自分のノートにペースト
- 3 . 自分のノートに文字を打ち込む

自分の入力したノートなどにはハイパーリンクのように関連性を持たされており、講義の後、何をしたのかがわかるようになっている。

保存方法は3つ

C-Print から送られてきた文章のみ保存

自分が入力などした文章のみ保存

両方保存

チャット機能の説明

キャプショニストとチャットをし、キャプショニストに質問することもできる。

このチャット画面を使って教員に質問することもある。声を使いたくない人には良いオプションである。

オンライントレーニング

モジュール1 C-Print に関する紹介

モジュール2 略語入力 (abbreviation)

独自にできるトレーニング (タイピングのトレーニング)

語彙の暗記・入力テストなど

例 「objkt」 「object」

「plstk」 「plastic」など

モジュール3 要約技能

モジュール4 授業終了後のテキスト編集技能

モジュール5 倫理的な知識

モジュール6 音声認識

上記のトレーニングモジュールは基本的なものであって、それ以上のスキル向上を促している。

C-Print 別室 (PEN-International オフィスルーム) にて

パム氏、イーサン氏 (ソフトウェア担当)、平井先生、三好の4名参加

Q三好 / プロフェッショナルなC-Print キャプショニストは何人くらいいるのでしょうか？

Aパム / R I Tには、20から21人のキャプショニストがいます。国全体では、500人以上をトレーニングしました。どの程度の技術力があるのかを確かめるためにキャプショニストの資格(サーティフィケート)を作りました。大学レベルの講義の場に、スキルの無い人を送り込むということは、大変まずいことなので、そこはすごく気にしています。

Q三好 / C-Print キャプショニストは、入力スキルと担当する講義の専門領域の知識が必要だと思いますか？

Aパム / 必要だと思います。しかし、ここではまだキャプショニストとして訓練していても、授業で教えられる中身についても専門性を高めるためのトレーニングというのは、まだやっていません。

Q平井 / キャプショニストの資格レベルは何段階かあるのでしょうか？

Aパム / レベル1とレベル2の2つの資格レベルがあります。レベル1というのは、主にリベラルアートの系の中身で、短時間に多くの説明が凝縮されて話される授業ではなく、ペースとしてもゆっくり目のものです。評価するときに難しいのは、先ほども言っていましたが、意味から意味への変換で訳すので、それが難しく、意味の塊ごとに分けて、それぞれが正しいかどうかを評価していきます。資格試験をどんな風に作っているのかというのを書いた紙がありますので、宜しければコピーしてお渡しします。実際にキャプショニングをしてテストするというだけではなくて、筆記試験もあります。どのくらい中身に関して知識があるかも見ます。

Q平井 / 音声入力できる人たちは、全員キャプショニストでもあるのでしょうか？

A R I Tのキャプショニストというのは、基本的には略語入力で行っています。音声入力は最近始まったばかりです。ですから、ここにいる人たちは略語入力で行って来ており、人によっては新しく音声入力を使い始めたような状況です。リサーチキャプショニストという人がいて、日ごろから音声入力の方をテスト的な意味もあって使っている人もいます。

Q三好 / C-Print Pro のオンライントレーニングを終えた方の人数と感想は？

A 1年くらい前からオンライントレーニングを始めたばかりで、ここにいるキャプショニストの半数程度がオンライントレーニングを終えています。RIT以外にもオンライントレーニングを受けた人はもっといます。皆さんからのフィードバックは総じて肯定的でした。今は皆さんもっとプロフェッショナルとしてのトレーニングを望んでおられるので、今そのトレーニングを開発しているところです。ここ2、3ヶ月の間、ずっと話し合ってきたのは、今ある資格の他に専門分野毎にきちんとトレーニングを受けたという資格も出していかなければならないだろうということです。まだ、それは出来上がっていないのですが、残念ながらとても小さい研究チームなので、やらなければならないことが多いわりに、人数が少ないという状況はどこも同じですね。連邦政府から貰っていたお金も、もう終わったので、これからどうやっていくか予算の獲得も含めて考えていかなければならないところです。

Q三好 / C-Print キャプショニストの収入は、それだけで生活できるレベルなのでしょうか？

Aパム / 基本的にまずどこで働いているかによります。1日に8時間もとおしてできるわけでもありません。しかも、準備をしたりとか、いろいろセティングをしたりということも出てきますし、そういうことも含めてお金を請求できるのかということも関係します。例えば、ニューヨークのような大都市であれば、すごく一杯仕事があるので、どんどん仕事を取ることができますけど、僻地の小さな町であれば、そんなに頻繁に仕事があるわけではないので、そういう意味では遠隔の字幕提示システムというものは可能性があるのかも知れません。

Q三好 / RITで雇用しているキャプショニスト以外に、キャプショニストはいますか？ また、仕事配分の優先順位はありますか？

Aパム / フリーランス(自由契約、無所属)のキャプショニストがいて、夜間開講される講義に対応していたりします。RITで雇っている人に優先的に配分し、足りなくなった場合に、不足分を外部から調達します。53人までキャプショニストの数を増やすという計画を聞いたことがありますが、それと同時に、実際にクラスで動いていない時間というのも多くなるので、経済性から考えると他の方法というのも同時に考えているみたいです。方法としては、フルタイムではなくその時間だけきてもらうとか、あるいは遠隔を利用するということを考えているようです。遠隔のシステムはこの2、3年の内にだいが増えていくのではないかと思います。

三好 / 筑波技短でも、遠隔のシステムを構築し、かなり以前から講義で利用しています。現在、音声認識も利用できるシステムを開発してしまして、キャプショニストの養成プログラムの検証を行っています。C-Printの養成モジュールにも、すでにあると思いますが。

Qパム / マイクロホンが先生に付いているのですよね。例えば、学生が質問したりとか、他の人が質問や意見をした場合には、どういう風に対応していますか？

A三好 / 今はC-Printのようにシステムが双方向ではありません(C-Printのように学生とキャプショニスト間で利用できるチャット機能は無いということ)。ですから、学生が言った内容を先生が言い直します。また、学生が書いた内容を言います。

パム / 先生はそれに関しては協力的というかハッピーですか？

三好 / お願いしています。まだ役割分担がはっきりしていないことも問題です。

パム / こちらでもC-Printなど技術を自分の授業に持ち込むのがいやだと考えている教師がおられるので、学生さんを指導したり、教師を指導したりするようなポリシーをきっちりとしないといけないですね。こちらでは技術を導入するときに良く思わない先生がときどきいるので、先ほど三好さんが言われた「先生に言い直して貰う」というのは、日本の先生は喜んでやるのかということに興味がありました。

三好 / 筑波技短では、字幕のシステムを学外からの非常勤講師のために利用しています。その講師の一部には、発話スピードが速すぎて、学生が字幕を追うことができないくらいの場合もあります。しかし、こちらの要望を講師が理解してくれないという問題もあります。

パム / よくこちらでもあるのが、先生方はご自分の教え方のスタイルとかを変えたくないというのがあって、例えば、キャプションが間違っているのをチェックしながら教えていくというのが自分の役割だとは、思ってもらえないケースというのが結構多くて、ですからそれもあって、(音声認識で)復唱者を入れているという理由もあります。

Q平井 / C-Printは、基本的には双方向システムなんですけども、スクリーンに出していくのが基本的なんでしょうか？ それとも学生のラップトップ(ノートパソコン)にも出せるのでしょうか？

Aパム / ラップトップで出すのがスタンダードです。ラップトップがあればノートテイクもできますし、双方向という意味ではやはりラップトップがないと、学生から質問などのメッセージを送ることができないので。

Q平井 / 教師も質問をラップトップで見るとはどうでしょうか？

Aパム / キャプショニストが声に出して伝えます。まず、学生が質問がある場合、手を上げます。教師がそれに気付いた時点で、キャプショニストが学生からの質問を声で先生に言います。

Q平井 / 点字リーダーで読めると聞きましたが、視覚障害学生が先生に対してブレイダー(点字の入力装置)で逆方向に質問することはできるのでしょうか？

Aパム / そういう装置が開発されているということを聞いています。名前はちょっと思い出せませんが。

Q三好 / C-Print は外部との通信手段を用意していますか？

Aイーサン / TCP/IP はコミュニケーション用に、UDP はサーバーを見つけるのに使っています。

Q三好 / C-Print は他のプログラムと通信させることは可能ですか？

Aイーサン / 現状ではそういう機能はありません。今開発中で、プラグインで対応しようとしています。

Q三好 / 音声認識のキャプショニスト養成について質問があります。C-Print の有料のオンライントレーニングに音声認識が含まれていることを知っていますが、この内容などについて教えて頂くことは可能でしょうか？ こちらでも音声認識のキャプショニスト養成のためのプログラムを試作して検証を行っていますので、ライセンスなども問題もあるでしょうから。

Aパム / オンライントレーニングの中身というのは、だいたい Via Voice をどう使うかということが多くの部分を占めているので、特にコピーライトとかライセンスとかの心配はありません。ボイスファイルをどうやってトレーニングするかとか、リアルタイムで修正をどうするかというような内容です。

三好 / マニュアルにあるような内容でしょうか？

パム / すごく近いです。それに自分たちの経験から得たちょっとしたヒントとか、よくある問題とかを加えてできたものです。

New York University (NYU)

ニューヨーク大学

・大学の概要

ニューヨーク大学 (NYU) は 14 のスクール (School) で構成されており、うち 7 つが学部にあてられている。2500 以上の学科 (学部) があり、160 プログラムが提供されている。

- 設立年 1831 (昭和 6) 年 4 月 18 日
- 場所・住所 アメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市
- 形態 私立大学
- 学科構成

学部 (7 学科)

- College of Arts and Science 人文社会学部
- Tisch School of the Arts メディア・芸能学部
- The Stern School of Business ビジネス学部
- The Steinhardt School of Education 学校教育学部
- Gallatin School of Individualized Study 個別研究
- The School of Social Work 社会福祉学部
- The School of Continuing and Professional Studies 専門性養成学部

大学院 (7 研究科)

- College of Dentistry 医学研究科歯学部
- Graduate School of Arts Science 人文社会研究科
- The Steinhardt School of Education 教育学研究科
- Leonard N. Stern School of Business ビジネス研究科
- Professional Studies 専門職研究
- Public Service 公共福祉
- Social Work 社会福祉

- Gallatin School of Individualized Study 個人研究

他に、リターニング学生（卒業後にまた勉強しに戻ってくる学生）も受け入れている。

海外キャンパス

- イギリス（ロンドン）、フランス（パリ）、スペイン（マドリード）、ドイツ（ベルリン）、ガーナ（アカラ）、ハンガリー（プラハ）、イタリア（フィレンチェ）

■ 学年歴

二学期制（一学期は3ヶ月半 = 15週）

■ 学費

一年に \$ 30,000 前後。

・ 全体 / 聴覚障害学生の全学年在籍数

■ 全体の学生総数

学生数（2004年度秋学期）		
科目履修生も含めた学生総数	39,408	
学士などの正規入学者		
	数	%
学部	20,212	51.30%
大学院（修士課程，博士課程，専修免許）	15,884	40.30%
職業教育（歯科医師，法律・哲学，薬学）	3,312	8.40%
合計	39,408	100.00%

■ 障害学生数

- 障害学生全体: 755 名
- 聴覚障害学生 12 名（ろう 6 名、難聴 6 名）

社会福祉学科に4人在籍しており、他の学生は一般教養などの学科に在籍して

いる。

国際学を専攻する学生 1 人が必修科目を履修するため、一学期だけパリに留学したそうである。パリへの留学生には、パリの手話通訳者をつける。ADA などの障害者の権利を保障する法律はもちろん国外には効力がなく、国外での学生のサポートは受け入れ先の大学と相談して進めることになる。

ビジネス専攻にも聴覚障害学生が在籍している。うち 1 人はイタリアから留学してきており、美術館の経営について学んでいる。その学生は学士を取得することが目的ではなく資格を取得することが目的で留学してきている。

■ 卒業率

1998 年に入学した学生で、学部を卒業して学士を取り、大学院まで進んだ学生（6 年間在籍）の卒業率は NYU 全体で、80.0%。

聴覚障害学生は、これまでに 1 人だけ卒業できない学生がいたが、その学生を除き、全ての学生がスムーズに卒業している。

. NYU の学生への学内施設

■ 寄宿舍

- 年間 700~10000 \$ の出費。私立大学なので州からの援助はなし。

■ 図書館

地上階 12 階、地下階 2 階。大学図書館は 3 つあり、学部生対象の図書館、大学院生対象の図書館、その他の図書館がある。CD45,000 枚、ビデオ 18,000 本を所蔵。

最上階に学長のオフィスがあり、時々下に降りてきては学生と歓談されている。

- サービス
 - ノート PC 貸し出しサービス
 - 年中無休で学生にのみ開放
 - ニューヨーク市の他大学とネットワークを通じて連携しており、借りたい本が図書館にない場合は、ネットワークを通じて他大学から借りることが可能
- 障害学生へのサービス

- ▶ 盲人学生に対しては代読サービスを提供
- ▶ 点字本はおそらく所蔵していない模様
- ▶ ほとんどの CD には字幕がつくが、字幕付きのビデオは全体の約 50%である。字幕無しビデオを教材として使用する際には、通訳をつけて設置する。また字幕つけに関しては、会社に依頼している

■ キモセンター（生活支援センター）

- 劇場をかねた講堂
- 学生用ラウンジ（2F）
- ダイニングルーム（3F）

学生オリエンテーションは主にここで行われる。学生の講義シラバスやカリキュラムなどのリソースは学部ごとに設置されており、センターにいけばリソースの場所を教えてくれる。リソースとは、学生生活を送る上での生活情報のことである。リソースは学部毎に提供されているが、まずここを訪れると短時間で、学部のどんな部門が担当なのかという的確な情報を得ることが出来る。

■ 課外活動

280 種類のクラブがある。自分自身で設立ができる。さかんなのはフェッシング、女子バスケットボール。聴覚障害学生の団体が以前はあったが、現在は解散した。

・ 障害学生支援

■ 障害学生支援センター（CSD : Center of Student with Disability）

■ 設立年： 1978 年。

障害学生支援センターが設立されてからも、聴覚障害学生の入学者数にとくに影響はなく、入学者数は年々でまちまちである。

■ スタッフ

障害学生には、LD や身体的障害、精神障害も含まれる。コーディネートを担当するスタッフは 5 人おり、うち 2 人が聴覚障害関係のコーディネートを担当している。担当であるディーナー氏はコーディネートを担当しており、またバードン氏はろう学生

に対するサービスを担当している。2人とも通訳士の資格を所有しており、業務の他に通訳も兼ねている。

■ ガイドブック

The Henry and Lucy Moses Center for Students with Disabilities

ハンドブックをそれぞれの障害ごとに作成し、ウェブから閲覧できるようにしている。

■ 情報保障手段

● ノートテイク

アメリカでいうノートテイクは、手話通訳をつけたときの補助的な役割を果たす。すなわち、日本のように授業内容を要約して書き留めるのではない。手話通訳を見ることがとノートに授業内容を書くことは同時にはできないからである。

カーボン紙は渡すがペンはノートテイク自身を用意する。もしくは、コピーカードを渡しておき、ノートテイクした紙をコピーして渡すという方法も行われている。

謝礼の関係から、ノートテイクを利用できる時間には限度がある。ノートテイクの謝礼として支出できる費用の金額を学生に伝え、学生がその金額内でやりくりする。ノートテイクは、ポスターや口コミで呼びかけて募集している。

● 手話通訳

99.9%の派遣率。27人が登録されており、27人/週の派遣がある。

通訳の派遣については、フリーランスで契約を結ぶのと、手話通訳者が登録されている団体に派遣を依頼する。ニューヨーク市には手話通訳者が多く、彼らの技術を見て、直接依頼して契約を結んでいる。

最終的に、手話通訳者はろう学生が選ぶことになっている。情報保障を受ける学生の不満は、特に通訳スキルに関する不満が多い。

● C-Print

C-Printは最近出てきた技術であり、ソフトの使い方などに習熟しなければならぬため、人材の養成が急務である。実際には、C-PrintとCARTを両方使うこともある。

● CART (Communication Access Realtime Translation)

CART サービスは 38 時間 / 週の提供 (ろう学生からの要望の 90% ぐらいは派遣可能)。CART のタイプライターは 7 人。CART の入力者は昔からおり、ベテランの入力者を集めやすい。

CART は特殊なキーボードを使用して、講義の発言内容を正確に逐次記録するシステムである。また国会や裁判所の速記者が入力にあたることが多い。タイプライターは教室内に持ち込まれて入力が行われる。基本的に機器 (ディスプレイとキーボード) を入力者が用意するだけでよい。データは CD などにて保存され、電子データで受け取ることが出来る。

最近は、CART 利用の要望が増えてきているので、CART の入力者を増員することが当面の課題である。

■ 問題点

● 学生のモラル

例えば、学生の要望に合わせた情報保障手段を用意したが、直前になって他の情報保障手段がいいと言ってくる学生がいる。このような場合、緊急で調整するが、時間的に不可能な場合が多く、情報保障を利用する学生側のモラルと理解が求められる。

● 知的財産権

CART がつけられた講義には、講義で話された音声情報が文字となって残る。知的財産権の観点から、自分の講義内容が逐次記録され、無償で聴覚障害学生に提供されることに抵抗を感じる教官もいる。また CART のデータを欲しいと希望する教官もいて、理解を求めるのが大変だということであった。知的財産権についての考え方は大学によって異なり、RIT は教官自身も授業の記録に利用できるようになっている。

■ 謝金

ノートテイクへの謝礼はセンターが負担している。また手話通訳、C-Print、CART への謝礼はその学生が在籍する学部の負担によって支払われている。手話通訳者への謝礼はセンターを經由して、その聴覚障害学生が在籍する学部 (大学) から支払われている。

- 企業からの寄付

大学で学ぶ聴覚障害学生に理解があり、資金援助をしてくれそうな見込みのある企業のリストを聴覚障害学生に教える。聴覚障害学生本人が企業のリストから選び、直接礼状やメールで依頼させる。依頼する企業の数、依頼をする、しないは本人に一任されている。

州からの援助と企業からの寄付が、ノートテイクの実費にあてられることになっているが、州からの援助だけでは資金的に苦しいので、このような方法をとっている。企業からの寄付がノートテイクの実費に活用されるが、残った場合は学生の学費に回される。すなわち、奨学金とも言える。

企業からの資金は一年ごとにまとめて支給される。年度末に聴覚障害学生が、資金援助をしてくれた企業へ一年間の学業報告をかねた手紙を書き、合わせて新たに申請を行う。その申請を受けて、企業が引き続き寄付するという形である。寄付金額と年数は決まっておらず、時には寄付が中止されることもある。

センターは、聴覚障害学生に企業から支給された資金総額を伝え、実際の資金管理はセンターが行っている。実際に謝礼が支払われるのはセンターからであり、学生が直接謝礼を渡すことはない。

- デフネス・リハビリテーション・プログラム (Deafness Rehabilitation Program)

以前は、教育学研究科 (The Steinhardt School of Education) の「カウンセリング & 学生サービス」コース内に、デフネス・リハビリテーションプログラムが以前は設立されていたが、2年前の2003年に廃止された。このコースが廃止された理由はおそらく大学上層部の政治的な理由によるもので、資金援助が減ったからではないかということであった。

以前には、このコースに盲ろうの日本人 (福島智さん?) がここに留学されていたらしい。

・ NETAC との関わり

他大学が、初めて聴覚障害学生への支援に取り組む場合には、NETAC が情報提供などの援助を行うことがあるが、NYU は、過去約 30 年間にわたる障害学生支援の実績があり、これまでの実績に基づいて情報などを NETAC に提供することもある。

TIP シートは NETAC 設立以前から NYU オリジナルのものを独自で作成しているため、NETAC 作成のものは使用していないが、内容的には NETAC の T I P シートと似通ったものになっていると思う。

■ NETAC からの援助 0329

- C-Print の人材養成の費用
- NETAC からの資源・資金提供
- PEP-Net Conference への参加費用

C-Print の人材についてはオンライントレーニングでの養成を検討中であり、衛星通信（SCS）会議で各地と通信し、情報や意見交換を進めている。

ディスカッションまとめ

日時：平成17年3月20日1時～4時

場所：Holyday Inn Meeting Room

参加者：日本視察団（根本、三好、藤井、平井、岩田、倉谷、茂木、松崎、菊池、石井、白澤）、オブザーバー（吉田、Denny）、通訳者（田村、仲村、中浦、阿部）

. 今回の視察で特に参考になった内容とこれから自分の大学で取り入れていきたい取り組みは？

<平井：静岡福祉大学>

（静岡福祉大学は、2004年に設立された新しい大学であり、現在、肢体障害学生が1名在籍しているだけで聴覚障害学生の在籍はないが、開学時より障害学生支援委員会を組織し、大学の facility の一つとして障害学生サービスを位置づけるつもりで活動を継続中である。）

TIPシートや大学ごとの障害学生サービスパンフレットがきちんと用意されている点に感心した。ぜひこうした資料を日本語に訳しながら、自分の大学にあった資料を作成していきたい。また、アメリカでは一般のホテルでもろう者に必要なaccommodation（設備）が整備されているのに対して、自分の大学はまだ十分な機器設備が整っていない。数年後には障害学生の入学が見込まれるため、その際にあわてないように今から体制作りをしていきたい。

<倉谷：関東聴覚障害学生サポートセンター>

（関東地方の聴覚障害学生支援に関するサポートセンターとして、主に東京を中心としてアウトリーチを行っている。ノートテイカーの養成や大学内でサポートサービスを充実させるためのコンサルティングなども活動の1つとして行っている。）

現在コンサルティングを行う際の材料が不足しているため、Tipシートや養成カリキュラムなどきちんと他大学に示せる物を作っていきたい。

NYUとNETACの関わりに関する話から、各大学でサポートサービスを構築していくた

めには、初期の段階でまず有効な支援を行うこと、ある程度経験を重ねた大学に対して常に最新の情報提供していくことの両方が重要であることを学んだ。特に後者については、一方的に情報の提供を受けるのみでなく、個々の大学が情報の発信者となるネットワークが必要であろう。

<岩田：同志社大学>

(日本ではじめて手話通訳者を大学に雇用した大学。障害学生への支援を「大学の責務」として行うという覚悟を決めたことが、今日の発展に繋がっている。)

今回の視察を通して学生支援全般に対する理念はやはり本学と共通していると感じた。

Tip シートや教員用・学生用パンフレット、web での情報発信など、制度やサービスの存在を知らせ、隅々まで行き渡らせるための努力がなされている。

co-opやチュータリングサービスなどでは単にサービスを提供するのみでなく、サービスを通してろう学生をいかに育てるかと言う点に力点が置かれていた。日本でもサービス提供者がろう学生の状態を的確に捉え、本人の将来を見据えて教育的な対応をしていける状態に持って行く必要があるのではないか。

やはりアメリカの大学は管理者側の覚悟が違う。パりに通訳者を派遣することなど、理屈ではその必要性はわかっていても並大抵でできることではない。

<藤井：日本福祉大学>

(日本で一番多くのろう学生を受け入れている大学(35名程度)。支援体制の構築にあたっては大学の主導ではなく、障害学生と一般学生がともに学びあう過程で自然発生的に支援の輪が広がることを最大限重視している。)

これまで一般の学生が障害学生との関わりを通してさまざまな経験をするを重視してきたが、学生同士だけでなく教員側の学びももっと育てなければいけないと感じた。

障害者差別法の確立、政府としての援助や財政支援など法律の確立についても大きな課題。

<三好：筑波技術短期大学(字幕関係技術者)>

技術者なので C-print に興味を持って参加したが、それ以外の部分も非常に興味深く聞くことができた。特に NYU を視察して、NTID のような大規模大学でない大学であ

っても、かなりのサポートができていることから、サポートの広がりを感じた。

アメリカでは文字通訳だけでも C-print、音声認識、CART 等、さまざまなオプションが用意されており、それぞれの大学で割合を変えながら共存している点が印象的だった。

日本では、技術のあるオペレーターをどのように大学内で雇用していくかが大きな課題だと思う。

< 根本：筑波技術短期大学 >

世界のろう教育の方向が大きく転換していることを感じた。すなわち、今までのろう教育は聾学校を中心とした Segregation（隔離・分離）教育に重点が置かれていたが、現在では mainstreaming（統合教育）を中心に据え、聾学校で十分な力をつけた学生を mainstream 環境に送り込む方向に大きく梶を切ったのだと思う。だからこそ NTID も、mainstream 環境下での支援の重要性を感じてあれほど前に RIT 内での支援に力を入れるようになったのではないか。これに対して筑波技術短期大学はどう対応するのか？他大学との関わりをもっと考えていかないといけないのではないか。

< 菊池：群馬大学 >

（在籍する学生の通訳のために手話通訳者を雇っている大学。ろう学生数は少なく規模は小さいが、通訳サービスの質の高さでは群を抜いている。今年 4 月より障害学生支援に関する学内規則が制定される予定。）

NYUでの話の中で、ろう学生自身が通訳者を選ぶ責任と権利を持っているという話があったが、この点について共感した。日本の大学では、ある程度サービスが得られるようになった段階で、ろう学生側が大学に依存してしまう傾向が見られるが、単に通訳がただけでなく、自分自身が主体的にサービスの内容を選ぶ環境を提供することで、自分にあった情報保障について考える意識が高まるのではないか。

< 茂木：群馬大学 >

複数のサービスがあり、またいくつかの考え方がある場合、日本ではどのやり方が正しいかを問われる状況にあるが、視察先ではそれぞれのオプションの中から自分で選べる環境が用意されている点に感心した。

<松崎：宮城県・仙台市聴覚障害学生情報保障支援センター>

(関東地区のサポートセンターをモデルにして2年前に設立。昨年1年間を通して宮城県内の大学にアウトリーチを行うことで、現在ろう学生を受け入れている大学の半分に学内支援サービスをスタートさせることに成功している。)

TipシートはNETACの重要な財産であり、日本にぜひ持ち帰るべき物であると感じた。同時に、学内で実際にサポートを行っていくためには、人員の集め方や支援者組織の構築、コーディネーターの設置などさまざまなノウハウが必要であるため、これらをコンサルティングするために必要な資料も蓄積していきたい。

視察全体を通して、ろう学生の立場からの意見が見えにくい状態にあるため、明日のパネルの際に生の声を聞きたい。

・今後の課題として以下の5つがあげられる

1. これからサポート体制を構築しようとする大学への支援

Tipシート等を用いた情報提供、支援組織の作り方等に関するコンサルティング

「どうして良いのかわからないからサポートを行わない」ことにならないための支援

2. ある程度支援経験を積み重ねてきた大学同士の情報交換

3. ろう学生への教育的支援

ろう学生を育てると言う視点。アドボカシー、エンパワメント

4. 教員への啓発・支援担当者の育成

5. 公的予算の獲得を中心とする国への働きかけ

・提案：Tipシートとコンサルティングに必要な資料を今回の視察参加者で作成することはできないか？

PEPNet-Japanの関係者会議内に編集委員会を構成し、視察参加者の協力を得て作成を進める。

<セルフチェックシート>

Tipシートのみでは大学側が実際に何をしていけばいいのかがわからないので、それを補完するために、理想的なサポートサービスとして用意すべき内容についてのインデック

スを作成し、各大学がどこまでできているのかをチェックできる形のものがあればいいの
ではないだろうか。

<モデルプラン・プランニングシートの作成>

サポートのモデルをいくつか提示し、それぞれモデルにたどり着くためにはどのような方法をとればいいのかを順を追って説明する資料。

- ・担当者の役割について
- ・組織の作り方、予算の獲得方法
- ・制度や要綱の「ひな形」
- ・時系列にそった計画表（入学時、4月、5月・・・） など

ターゲットは「職員」：人をどうやってコーディネートするか、予算をどういう論理で引っ張ってくるかといった職務レベルのノウハウが必要。（例：「担当職員一人の職務で終わってしまわないために、まずトップの人と相談して全学的な委員会を作成してください。」
「あなたの仕事は全学的な委員会を作ることです。そこで決定すれば予算をつけられますよ。」
「誰を連れてくればいいのか？謝礼はこれぐらいですよ。ここに頼めばいいですよ。」
など）

・その他話し合っておきたい議題はあるか？

<予算の獲得について>

私学振興共催事業団が毎年大学に予算的援助を行っているが、経常費補助金に上積みされているため、障害学生支援の目的にそわない形で使用されてしまう。そのため、補助金の配布状況について PEPNet-Japan として毎年情報公開請求をしていき、その情報を共有することで、目的にあった予算の使用ができるようになるのではないかと。

大学内の予算については考え方で左右される部分が大きいため、予算獲得方法に関する情報を共有するのが一番ではないか？（例：予算がないからできないと言われるが、実際には足りなければ赤字にすればよい。初年度は赤字でも、来年度から私学振興共催事業団の補助金が来ると言うことを経理当局に伝えれば納得してくれるはず。私学振興共催事業団の予算の存在を知らない職員に対しては、自分の大学が持っているはずの予算の存在を伝えるだけでも効果がある。他に、ユニークな教育をやっている大学に対して半額ぐらい

の経費が補助される。たとえ支援に 1000 万円かかったとしても、来年半分かかってくる
と言うことを伝えれば担当者の対応は変わることもあるのではないかと。

実際の所、障害学生支援に関して費用が、いくらかかるのか目安がなくて、困っているの
ではないか。このことについては、今後、PEPNet-Japanとして調査を実施する。

アウトリーチについては一つの大学の予算でできるものではないので、GP に共同プロ
ジェクトとして企画を計画したらどうか。筑波技術短期大学の根本先生を中心にすすめて
いく。

<教員の FD について>

サポートの質を上げるためには、「ろう学生をどう育てるか」、「支援者をどう育てるか」、
「教員をどう育てるか」、「担当者をどう育てるか」と言った様々な視点が必要。

教員へのFD開催も重要だが、大学の教員は他の人から教わるのを嫌がるため、教職員向
けハンドブックや制度に関するパンフレットを配布するなどして間接的に伝えていった方
がよく伝わるのではないだろうか。少なくとも、クラスの中でろう学生がどういう状況に
あるのかなどを伝えれば先生方も考えてくれるのではないだろうか。今後、Class Actのよ
うな、ろう学生側の声を交えたwebを作成できないかを検討していく。

・アメリカ視察報告会について

報告会日程：平成17年5月14日（土）

午前：ろう学生と大学職員に分けた懇談会を実施し、その懇談会にスーパーバイザーを導
入して、日頃の活動について話し合う。

午後：アメリカ視察報告会（単にアメリカの報告のみでなく、日本の大学に対する提案を
含めた報告をお願いします。）

企画は関東聴覚障害学生サポートセンターが行い、内容の検討段階から ML を用いて視察
参加者にも意見を求める形とする。PEPNet-Japan は特に資金面での支援を行う。

ラガーディア大学

ラガーディア大学側の参加者

ラガーディア大学学長

ラガーディア大学副学長

トニー氏：PDA (Program for Deaf Adult) のディレクター

キム氏：アカデミックコーディネーター

キャサリン氏：PDAのアシスタントディレクター

ロブ氏：手話通訳養成科のディレクター

ジェイソン氏：手話通訳科のコーディネーター

ジェーン氏：通訳派遣のコーディネーター

スー氏：基礎クラス担当

ディズリー氏：NETACのサイトコーディネーター

．副学長あいさつ

皆さんをお招きすることが出来たことを大変光栄に思い、また感謝しています。

私たちと同じ思いをもち、同じような仕事をしている方たちを日本から、呼ぶことが出来て嬉しく思います。私は、皆さんの実績に対して好印象を持っています。皆さんがPEN インターナショナル及び日本財団と共に活動をしてきたことに関しては、素晴らしいことだと思ふ。

今日の午後には、ラガーディア大学学長と会う予定です。学長は、ろう者に対するサポートサービスへの理解、また国際的な活動に協力的な方です。

大学のキャンパス内を、歩くと気づくと思うが、多くの留学生を見かけるだろう。私たちの大学のプログラムには、日本からの留学生も多く在籍している。また日系アメリカ人も多く在籍しており、学士取得を目指してがんばっています。

私は、ろう者のために力を注いでいる私たちのスタッフに感謝し誇りに思う。

今日は、私たちからお土産を用意しました。きっと、今日の訪問をずっと覚えていてくださると思う。ラガーディア大学においていただきありがとうございます。

．ラガーディア大学の概要

(PDAのプログラムディレクターのトニー氏より)

ラガーディアコミュニティーカレッジや、ニューヨーク市立大学について、また成人ろう者向けプログラムの概要の説明をします。

ラガーディアコミュニティーカレッジは、1971年に設立され、PDAのプログラムは1975年に作られた。ニューヨーク市立大学は19の大学で構成されており、在籍総数は218,000人、キャンパスは市内に点在している。ニューヨーク市は、マンハッタン、ブロンクス、スタテンアイランド、ブルックリン、クイーンズの5つの行政区に分かれている。皆さんは、今クイーンズにいる。

19の大学の中の1つがラガーディア大学で、12の学科がある。3つの学位(準学士・準理学士・文学士の編入プログラム)と31のプログラムを備えている。この大学は、国際的であり、また学生は159もの国から来ており、110もの異なった言語が使用されている。このように大多数が移民者である。在籍する学生は、準学士コース13,000人、生涯学習コース23,000人である。

．キャンパスツアー

1．PDAのオフィス見学

2．サインランゲージラボ

(ロブ氏、ジェイソン氏より)

このラボは州の拠出で設立され、ASL及び英語通訳の訓練のために使用されている。ここは、2年間のプログラムであり、資格取得も可能で、学士取得のために4年制の大学に編入するための単位を取得することも可能である。また準学士のコースでろう教育を専攻する学生もASLを取得するためにこのラボを使っている。

このラボは、手話から英語に換える、すなわち視覚的言語から音声的言語に換えなければならないので、それに合わせてラボを作った。これまでラボを製作してきた会社は、音声言語から音声言語へ変換するためのラボを製作していたので、ここはユニークなラボと言える。

このラボでは、手話のビデオやDVDを借りることも出来、学生は画面を見ながらヘッドホンを使い、自分の声を録音し通訳練習が出来る。それとは別のオリジナルテープでは、既に通訳した内容がテープに組み込まれているので、自分が通訳した内容と比べることが出来る。またASLのビデオを見て、自分の声を録音することができる。その後、自分の声と映像を確認することも出来る。その他に、通訳者が行なう見本のビデオがあり、それを見ながら自分のやった内容と比べることも可能である。

様々な訓練に対応するために、ラボは変化している。例えばプライバシーを守るために壁が出来たり、照明の位置を工夫するなど、学生が学習しやすいようにいろいろ工夫して作られている。

通訳のトレーニングは、まず、2人1組のペアで練習した後に、クラス全体で見せ合い、どのようにしたら良い通訳が出来るかディスカッションをしている。再びペアに戻り、通訳をもう一度やってみる、といった方法を行っている。

教員用のビデオは、全ての学生の画面とつながっていて、先生がひとつのビデオを入れれば、全ての画面に流れる仕組みになっている。

また、先生のメインコンピュータからは、例えば3番の学生がどのような通訳をしているか見たいときには、3のボタンを押すと、その学生の通訳の内容を確認することが出来る。

質問：ここにあるコンピュータはどのように使うのか？

答え：全てのブースにコンピュータがある訳ではないが、後々増やしていく予定である。学生の中にはコンピュータが得意な人と得意でない人がいるので、得意な人はカメラを操作したり、通訳の練習をコンピュータを通して行うことが出来る。コンピュータでは、VHSのビデオテープを使った練習も出来るし、CDを使った練習も出来る。

質問：通訳の養成クラスに入るには、事前にASLを知っていないといけないか？

答え：もちろん入るには、ある程度の手話の技術がないといけない。通訳が出来るほどのものすごい技術までとは言っていないが、ある程度の技術は必要とする。

手話がそこそこだからといって落とすのではなく、受け入れる態勢は取っている。そうした方にはより多くのトレーニングや指導をするようにしている。

私たちの考え方は、通訳を勉強するにあたっては、英語と手話をしっかり勉強していて、通訳のプログラムに入る以前にろう文化であるとか、聞こえる人の文化の両方を理解している必要があることが求められる。

質問：通訳養成科に入るにあたってテストや技術評価があるのか？

答え：通訳養成科に入るにはいろいろ必要なものがある。まず必要書類を書かなければならない。その次にエッセイ。自分がこのプログラムで何をやりたいのかをエッセイに書かなければならない。その他に自分が手話をしているところをビデオに撮ったものを一緒に提出することになっている。それがこちらのプログラムに届くとスクリーニングという手順があり、ろう者と聴者が一緒にビデオを見て、その生徒が通訳科に相応しいかどうかを判断する手順になっている。

書類のほかに、実際にその生徒と面談し、手話の技術を確認する。例えばビデオを見せて、同時通訳をさせてみる。また絵を見せて、例えば立体的な3Dのような絵を見せてそれを手話でちゃんと現わせるかどうかを見る。またその場でその学生の英語能力も確かめている。

また、様々な話をして、ろう者文化、手話に対してどのような姿勢をもっているか、どのような態度で望んでいるのか自体も具体的に評価している。もちろん通訳養成科に入るにあたり、ろう者文化に対する理解、姿勢も大切な要素である。このように手話通訳技術そのものは必要とはしていませんが、姿勢は重視している。

また手話通訳技術だけでなく、手話能力と英語能力を評価している。こうした書類、テストを行なって、生徒を選んでいく。

選ばれなかった生徒に対しては、ろう文化との交流などをすることを勧め、次年度通訳養成科に応募してくるようにアドバイスをしている。

質問：財政的なことについて。州からの補助金で出来ていると聞いたが、古くなった施設を定期的に更新できる費用がもらえるシステムになっているのか？

答え：州からこうしたラボに対する助成金を得ることは難しい。お金は、機材よりも制度やサービスに使われることが多いから、機材に助成金が出たことはとてもラッキーでした。

ジェyson氏より質問/皆さんの大学ではこのようなラボは使っているのか？

答え：筑波技術短期大学にはない。

ジェyson氏/それはお金、助成金が出ないからか？

私たちは、このラボを作るにあたっては、3年前からリサーチを行ない、1年半前に出来上がった。今またリサーチを行なうとしたら、マイクはワイヤレスにするなど、機材の値段を押さえることが出来たかも知れない。

質問：ディスプレイに映像が写っているが、このソフトは学校独自のものか、外で作られたものか？

答え：今皆さんが見ているビデオと言うのは、手話通訳養成科の学生が入学してきて1年目に勉強する、手話の文法の構造がどうなっているか勉強するためのビデオです。このビデオはカリフォルニア州にある、ツリーハウスという会社で作られたもの。

質問：ニューヨーク市内では、このラガーディア大学が通訳養成に関して最も力を入れているのか？ほかの大学でも同じような取り組みをしているのか？

答え：そう、ニューヨーク市内では、ラガーディア大学が一番進んでいる

質問：他の州には通訳養成クラスはあるのか？たとえばロサンジェルス州で。

答え：確かに手話通訳養成科というのはアメリカにはたくさんあるが、ほとんどが2年制の準学士のプログラムであり、通常は、1年目にASLの勉強をして、更に2年目に通訳の勉強をすることが多いので、実際あまり通用しないというのが現状であろう。

もちろんその他にも、素晴らしい通訳養成プログラムをもった、養成科をもった学校もある例えば、ボストンにあるノースイースタン大学、オレゴン州にあるウェスタンオレゴン大学、もち

ろんギャローデット大学などすばらしい学校もある。

質問：特にカリフォルニア州、ロサンジェルスあたりには、よいプログラムをもった通訳科のある大学はあるか？

答え：カリフォルニアには二つの学校がある。一つはC S U L、ノースリッジ大学。もう一つはピアスカン大学。

その他の大学で、ノーザンコロラド大学では4年制の通訳課程で学士を取得できるようにしようという動きがある。その大学では遠くにいる人でも、オンラインをとおして通訳科の勉強で学士が取れるように検討している。またさきほどの、ノースイスタン大学ではA S Lの手話通訳を教える講師を育てる、修士を取得できるところ。

質問：学生がカメラで撮影され、講師がコントロールパネルで見ることができるとの説明があったが、見ることは出来るか？

(席の数だけあるスイッチで切り替えるだけの単純なシステム。)

日本でもアメリカでも同じですが、手話と通訳の技術を同時に学習しているので、技術的なことでアメリカでも日本でも同じようなことが起っていると思う。

ラガーディア大学側より質問：アメリカにはR I Dという通訳の教育に関する統一した基準を作成している組織があるが、日本には通訳養成を統一している組織というのはあるのか？

答え：ある。

ラガーディア大学側より質問：もし通訳の資格を持っていない人も、通訳の仕事は出来るのか？

答え：日本には都道府県毎の資格というのがあって、それを取れば仕事は出来る。

ラガーディア大学側より質問：日本に手話通訳養成の学校はたくさんあるか？

答え：正式な学校は数校しかないが、他に教えているというところはいくつかある。通訳養成をしている学校はあっても、ほとんどは手話の1レベル、2レベル、くらいの内容までしか教えていない。ろう者と交流して技術を学ぶ場はあるが、正式に通訳養成科という学校はない。

質問：修士の通訳科はあるのか？

答え：現在アメリカには学士のレベルでの通訳科はある。ギャローデットには通訳養成科での修士が取れるが、他の大学ではほとんどが学士レベル。

3. 図書館 (メディア・センター)

授業に必要な字幕付きビデオやC Dの検索を行なっている。

また家にコンピュータがない学生のためにコンピュータを1台用意してある。その他に学生が使えるコンピュータはあるが、どこも順番待ちの列がある。

4. 劇場

二つの劇場 (定員200人と250人) を備えており、オリエンテーションや授業に利用されるほか、講演会や学生演劇部の公演、外部の演劇公演等も行なわれている。その際には手話通訳字幕や文字によるサポートサービスが提供される。用途に合わせて大小の劇場を使い分ける。

質問：劇場を使うクラスはたくさんあるのか

答え：演劇関係、音楽関係のクラスは利用することは多い。

質問：手話のサポート以外に、字幕や文字によるサポートも行っているのか。

答え：勿論。スクリーンに字幕を映したり、外部のCプリントやカートの技術者を呼びサービスを提供している。

質問：廊下の天井から吊り下げているディスプレイに表示される情報は、何か？

答え：LCDはろう学生だけのためではなく一般の学生のための情報提供。キャンパス内で起こっていることなどを伝える。

質問(続き)：聴覚障害学生に役立つ日々の情報、緊急のものだけでなく、日々のスケジュール、教室が変わったとか、呼び出しなどにも使われているのか。

答え：可能なことかもしれないが、実際行われているかは分からない。教室変更の場合は、もともとの教室の前に紙を貼って伝えている。

5. 廊下の公衆電話にTTY

6. ろう者対象の準備クラス

英語の読み書きの力を身に付け、実際に単位を取得できるクラスに入るためのクラス。

7. その他

子供を持つ学生のための保育園が大学内に用意されており、学生は一日中子供を預けて学習に専念することが出来る環境が整えられているとのこと。プールは学外の人たちにも利用されており、年配のご婦人の姿が見受けられた。

. 学長あいさつ

皆さん、ようこそ。皆さんが来てくださったことにとっても興奮し、嬉しく思っています。

ここにたくさんの通訳の方がいて、それぞれのコミュニケーションが移り変わっていく様子を見て興奮している。

ディズリーさんに日本の手話ができるのかどうか訊ねたが、「知らない」との答えだった。

私は、このプログラムにとっても満足しており、誇りに思っている。この大学には大勢の留学生が、150もの異なった国からここに学びにきている。今日思ったことだが、ろう者のコミュニティーもインターナショナルの留学生と同じグループの一つに数えられるのではないかと思う。通訳がそれぞれ、いろいろなところでいろいろな通訳をしているのを見るのは初めてのことなので、あちこちに目がいつている状況です。

私が日頃行きたいと思っている国の中に日本がある。それが何故なのか説明したい。私は小説を読むことがとても好きだが、小説の中でも特に日本の小説が好きです。最近読んだ小説の中に、村上龍さんの「海辺のカフカ」という本がある。皆さんもご存知ですか？彼が最近書いたお薦め小説です。書かれている内容と言うのは、昔の日本と今現在の日本がうまくつながっているような話でとても興味深い内容になっている。夢が叶って日本に行くことが出来るのであれば、皆さんを訪問したいと思っている。

ここにいるスタッフを大変誇りに思っています。最近出来たASLラボについては、これまで私たちが行ってきたものの中でもすばらしいものの一つである。ASLラボのようなテクノロジーが、学生同士を引きつけて、手話に興味を持ったり、ろう者の文化に興味を持ったりすることになって

いるので、素晴らしいことだと思っている。

質問：私たち日本各地で高等教育に関わるメンバーのために、たくさんの専門家の方たちと準備をしていただいております。

学長：「ありがとう」だけは分かります。

質問：どのようなお考えで、どのようなろう・難聴者の人たちを育てたいと思われているのか？

学長：私たちが持っている哲学のようなものは、参加型。ろうの学生が全てのことに参加できるような環境を与えるということ。ですから私たちが行なっていることは、全てのことにアクセスできるような、全ての人が参加できるような環境を作ること。

それと、もちろんろう文化を学校内で保っていくこと。そうすることによって、ろう学生が安心して学校生活を送れるように、ろう文化を学校のキャンパスの中でも保つための場所を提供することではないかと考えている。

一番難しいのはお金の問題。そこにバリアを感じる。

質問：今おっしゃっていただいたように、ベストの環境を与えることが、やはり聞こえない人の力を最大限伸ばすことだと思っている。共感する。

学長：ろう学生は、学校生活で厳しいことに直面しているので、私たちの学校でも、聞こえる学生と同じ位成功しているかと言われれば、そうではない。私たちが期待するほどにはまだ成功していない。ですから、私たちの理想を実現するために、いろいろと働きかけを行なっているところです。どうもありがとうございます。

. PDA (Program for Deaf Adult)

(トニー氏より)

私たちのプログラムは1975年に成立しました。資料に基本的な情報は載っているが、一つは「PDAについて」、二つ目は「サポートサービスについて」、三つ目は「ろう・難聴者を対象にした生涯学習について」で構成されています。

この学校は7月1日に始まり翌年6月31日までが年間のスケジュール。2003年と2004年の統計では、PDAのサービスを受けた学生は1,650人であり、その中には、学士取得を目指す31人が含まれている。101人の成人ろう者が生涯学習で学び、195人のろう・難聴が、通訳養成科や通訳に関するワークショップに参加している。106人の健聴学生がASLのクラスを受講し、1021人も学生のASL関係または通訳関係のワークショップに参加したということになっています。

PDAの中にもいくつかコースがあり、その一つが学士取得のために学ぶ学生のためのものもある。担当のキム氏が指導にあっている。ジェーン氏が通訳派遣に携わるコーディネーターを務めている。もう一つのプログラムが生涯学習で、そのアシスタントディレクターがキャット氏さん。この大学には手話通訳養成科があり、2年間のプログラムで養成し、また通訳のワークショップも実施しています。通訳科のディレクターがロブ氏です。

PDAのプログラムが複数ある中で、最後の一つがNETACである。ディズリー氏が担当しています。

1. サポートサービス (キム氏より)

私は、サポートサービスのコーディネーターを担当。アカデミックカウンセラー (学生指導員) です。実際に関わる学生は、ろう学生、難聴学生、盲ろう学生です。学生は全米から集まり、また

留学生も大勢いる。この大学の受け入れ条件は、高校を卒業していること、または他の大学で取得した単位を移行することも可能である。そうした学生と初めに会う。コミュニケーションも取りやすく、ジェーン氏や他のスタッフが一緒に話をすることもある。

サポートサービスでは、通訳の派遣、ノートテイカーやチューターといったサービスを受けることができる。サポートサービスを提供する理由は、この大学はインクルージョンの状況であり、ろう学生が成功していくためにはこうしたサービスが必要であるからです。

(ジェーン氏より/通訳のコーディネーター担当)

日本の状況は分からないが、このような環境、サポートできるサービスがあることを幸運に思っています。ろう学生も聞こえる学生と同じように、平等に講義を受けられるサポートは法律で義務付けられている。法律でいろいろなサービスを提供しなければならないとされているが、このラガーディア大学を特別なものにしてしているもの、学長から話があったと思うが、ろう学生が聞こえる学生と同じように、どのサービスにも平等にアクセスできる、というところにある。

サポートサービスの内容は、

1) 先ず学生はアドバイズメントを受ける。

ここでは学生と、長期的な目標は何か、専攻する科目によって何を履修するか、などを話し合う。

2) 基礎的なリーディング、ライティングのクラス

始めは、スキルアセスメントテストを行う。これはCUNY (City University of New York) にて作成したテストで、その後45時間の授業を受けて達成度を測るための次の学力テストが課せられる。それは理解力を問うテストであり、テストの結果が65点以下だった学生は、基本的な読解力・筆記力のクラスの受講が課せられる。

白澤記録: アセスメントテストを受験 65点以下 45時間のクラス受講 ポストテストを受験 (CUNY Skills Assessment)

私がこの大学に来たのは1985年。それ以前にはこうしたテストがなくて、ろう学生はいきなりメインストリーミングに配置されてしまうので単位を落とすことが多く、落第する学生が多かった。大きな違いは、聞こえる学生が持っている読解能力・筆記能力と、ろう学生が持つ能力とは違っている。また先生が何を言ったのか、理解力も違っている。ノートを取れないという学生には時間を与えてノートを取らせる。大切なことはどのASLがどの英語に対応しているのか、をしっかりと教えている。

学生のレベルに合わせた教材を使い指導している。リーディングのクラスでは学生が読んだ内容について文法に重点をおくのではなく、要点をつかんでいく形で授業を進めている。ライティングのクラスでは文法に重点をおいている。

X-WORDグラマーというのは、1971年にコロンビア大学で作られたもので、英語の文法を簡潔にまとめたもの。一つはbe動詞、例えばam, wasなど20の動詞を教える。その動詞を使って否定文を作ったり、この主語にはこの動詞を合わせる、といったこと。

ろう者のための筆記能力を高めるクラスでは、たくさんのエッセイを書かせている。書いたものに更に書き足したり、間違ったところは直す作業をしている。

私が担当しているクラスと、普通のメインストリーミングのクラスとの違いは何かと言うと、私のクラスでは、学生に自主性を持ってもらい、積極的に参加させている。一方メインストリーミングでは、普通は先生の言うことを聴いてあまり参加型ではない。特にろう学生のために基本的な学力を身につけさせるクラスでは、学生の積極性、自主性に重点を置いている。

質問：資料にSAT (Skills Assessment Test) とあるが、1985年以前にはSATなどの試験に関係なく入学を許すことがあったのか。また今、試験に関係なく入学することは可能か。

答え：1985年以降は違う試験を行っており、今はSATに代わってACT (American College (?) Test) を行っている。大学に入学するためには、このACTを必ず受けないと入学できない。

ここにあるACT (CUNY - ACT) とは、高校生が大学入学のために受けるACTとは異なる。名前が同じACTでも、特に読解力を確かめるためのテスト。

質問：LD (学習障害) をもった学生が入学することはあるのか。

答え：学習障害を持つ学生も同じ試験を受けて、その結果によって決まる。私のクラスに入るにあたっては、一般の聞こえる学生の2倍の試験時間を設けて受験させている。

もう一つの試験は卒業に必要な試験。私が誇りに思っていることは、私のクラスの5人のろう学生がCPEという試験に合格したこと。

3) 手話通訳

通訳の派遣をしているところは、メインストリーミングの学校の中で、ろう学生が行われていること全てにアクセスできることになっている。通訳の派遣は授業以外にも、ろう学生が必要とするのであれば、教員と1対1で話をしたいときや、グループ学習、キャンパス内で行なわれる様々なイベントに通訳が必要と思われたときには私たちがサービスを提供している。

通訳の必要性というのはとても大きなことなので、キム氏と相談して、全てのろう学生が通訳を受けられるように、サービスを提供している。

4) ノートテイク

通訳以外に重要なサービスがノートテイクである。ろう・難聴の学生は手話通訳を見て講義を受けているが、ノートをとるときに目を落としたときに何かを言われても分からない。そのためにノートテイクが必要になる。

ノートテイクは、ろう学生と同じクラスをとっている学生にお願いして、その学生にはお金を支払い、ノートテイクという仕事をやってもらっている。

ノートテイクの学生にはトレーニングを課している。それはNTIDが立上げられたオンライントレーニングを活用している。ノートテイクの方々にはノートテイクをするにあたって、ろうの学生に関して、ろう文化に関して、事前に知識を持つことになっている。ノートテイクというのはローテクノロジーであるが、最近新しい電子機器を使った、ノートテイクという試みも行なっている。

5) C-PrintやCART

電子的なノートテイクの中には、C-PrintやCARTという新しいサービスがある。これらはコンピュータを使ったサービスであって、ろう学生がラップトップ・コンピュータを使ってクラスで行なわれている情報を得ることが出来るようになっている。

しかし今、C-Printが出来るキャプショナーの数が少ないので、将来的にはその数をもっと増やして、C-Printのサービスを拡大していこうと考えている。

6) チューター

1対1で学生に指導を行なう。チューターという人は、手話を知っていて、それぞれの分野に長けており、普通はだいたい学士を持っている方。社会学・数学・英語といった様々な分野のチュー

ターという方が存在する。全ての学生にチューターが必要かというわけでもないし、また強制的でもない。学生がもし数学が苦手というときに、先ず私のところに来て、私がチューターを探して学生に提供している。

7) API (Academic Peer Instruction)

難しいコースをとっている学生のためには、APIという特別なチュータープログラム、学習指導プログラムが用意されている。

APIは、先ずAPIリーダーが、ろう学生と一緒にクラスを見に行く。その後でリーダーと学生がクラスの状況を確認し、どのように勉強していったらよいかを話し合う。ろう学生がクラスに2~3人いる場合もある。

質問：APIリーダーは学生か、学生ではないのか。

答え：学外から雇う場合もあり、時には学生の場合もある。例えば化学の分野であるとする、その分野の知識に長けた人が担当する。ろう学生と相談するときはもちろんコミュニケーションは手話。

APIというプログラムは健聴学生のためにもある。その場合のAPIというのは、学生が履修している分野で優秀な成績をとっている学生がリーダーになる。

ろう学生のAPIというのは、健聴学生のAPIをモデルにして活動しているが、学外からリーダーを選ぶこともあり、ときには優秀な学生を雇って行なうこともある。

私が思うに、APIというプログラムはとても成功していると思う。APIを活用した学生は落第することなく、ちゃんとクラスについていっていることが分かっている。

8) 試験の際の配慮

例えば時間延長などを申し出る。

9) FMシステム

難聴学生にもいろいろなサービスを提供している。難聴学生に対しては、FMシステムといった補助的な機器があり、小さなマイクを先生のジャケットの襟に付け、しゃべった内容が学生のレシーバーに大きな音になって伝わるもの。

10) 字幕

教室内で必要とされるものは、ビデオテープ、DVD、字幕といったものがあげられる。先生は古くて字幕のついていないビデオテープを使うことがあるが、字幕付きのものを使用するように言っている。

字幕付きというのはろう・難聴学生だけが必要というわけではなく、ラガーディア大学にはいろいろな国から大勢の留学生が来ているので、そうした英語を第2言語としている学生にとっても有効なものになっている。

11) ジョブ・デベロップメント

大学を卒業して職を探す際に、みつけ方や履歴書の書き方などを教えている。

質問：ノートテイクについて。NETACがはじめたオンライントレーニングを、昨年の夏から受けているということだが、それ以前はどのようにしていたのか。

答え：このトレーニングが始まる前は、何もなかった。先生がクラスをどの学生がとっているかを見つけて、先生に聞いてアシスタントをしたりとか、以前にそのクラスをとっていた学生がノート

テイクをしていた。

質問：ノートテイクサービスの中には手書きだけでなく、CART、C-printなどの形があるが、CARTはほとんど使っていないで、C-printがよいので使っていると資料にある。何故C-printを選んでいるのか。

答え：C-printのほうがCARTより効果的であるということがあげられる。

というのも、サインを使わない人にはC-printやCARTのような文字情報の方が効果的に情報を得られるが、CARTは話したことを全てが文字化されてくる、C-printは要約して出てくるものなので、C-printのほうが学生にとってはわかりやすい。

例えばCARTで打ち出されたものが60ページあるとすると、それに対してC-printで打ち出されたものが20ページ。それを読む際にしても20ページのものを読んだほうが効果的であるし時間も取られない。

もちろん、講義で教官が話した全ての言葉を知りたいという要望から、より高いレベルの講義をとっている学生の場合は好んでCARTを使っていることもあるだろうが、短期大学ではCARTを必要とするほどのクラスはないので使っていない、ということになる。

質問：学生の読み書き能力に合っているから効果的、ということか。

答え：そのようなことが言えると思う。学生の学習能力が合っているから、C-printのほうが効果的だと考えている。

質問：教えているインストラクターはどのような人たちなのか。手話に熟達して専門の内容も分かっている人が教えているのか。

答え：そう。もちろん手話を知っている人であるし、それが先生を雇うときトップの必要条件になっている。コミュニケーションが大切なものなので、手話を知っている人が、ということ。

2. 生涯教育（キャサリン氏より）

成人ろう者のための学習を提供している。この生涯学習は、ろう者のためでもあり、聞こえる人のためでもある。生涯学習は3つのカテゴリーに分けることができる。1つは、学習能力の向上。筆記・読解力などの技術を向上させるというもの。2つめは自己能力を向上させるための内容。3つめが手話プログラムである。

例えば学習能力向上のためのプログラムでは、学生一人一人経歴により読み書きの能力は異なる。また外国から来た学生の中には、自国では優秀であったのに、初めてアメリカに来てコミュニケーション障害に直面する学生もいる。こうした学生のために、大学のプログラムに入ってきたときは、先ず学生の能力、レベルを計り、その学生に何が必要かをしっかり見極めて似合ったサービスを提供し、大学に入学できるような能力を身に付けさせるように指導している。

また、高校を卒業していない学生のためには、高校卒業のテストを再受験し、合格すると大学に入学できるようなプログラムを提供している。こうした学生には1対1またはグループ指導も行ない、将来の方向に付いて相談、指導を行なっている。その他に学生たちが市民権を得るためのテストについても指導している。以上のようなことから、提供しているプログラムは、タイピングのクラス、コンピュータ技術を学ぶクラス、運転のクラス、など様々な内容である。

ろう者は州からの助成金を得て学ぶことができるようになっており、聞こえる人でも他に障害がある人、例えばアルコール中毒のような科学物質の中毒者、にも州から助成金が払われることがある。

3. 手話通訳養成科(ジェイソン氏より)

通訳養成科には州からお金が出て、2年間のプログラムになっている。学生の学費は無料だが、卒業後の義務がある。それは卒業後2年間(12,000時間/年) 病院など通訳を必要とする場に派遣される義務。例えば、州から助成金を受け手話通訳科に1年間在籍した学生には、1年間というのは1,200時間分が加算される。1年間無料で学んだ学生は、1年間1,200時間働かなければならないということ。2年間手話通訳科で学んだ学生の場合は、この2倍の2,400時間(卒業後2年間)働かなければならないことになる。

質問：州から助成金があるということということだが、学費相当分を補助してもらい教科書代だけをだしてもらおうのか、お金をもらおうのか。それに対してあとで働くということか。学生の時にもらおうと言うのは、ちょっとした生活費ももらおうということなのか。

答え：学費だけに対して支払われる。学生生活に対するサポートは支払われない。私たちの大学には寮というものがないので、学生生活を支援する助成ではなく、学費だけを援助している。

手話通訳科の学生に必要な要件は、先ず準学士の取得が必要。そしてモチベーションがとても大切。ろう者と交流する、ろう文化からたくさん学ぼうとするモチベーションを持っている人が資格要件になる。(既に手話を習得している人に通訳技術を教えるコースであるため、後で説明するように手話技術も必要)

また学生には2つの選択肢がある。1つは、通訳養成科で2年間学び資格を取得する方法。もう1つは、私たちの大学はエンパイアステイトカレッジと提携していて、ここでの2年間の学習後そちらに編入する、そこでは学士取得も可能。

手話通訳クラスは1レベルから6レベルある。その中で通訳の仕方を学ぶ。例えばASLからASL、ASLから英語、またその逆もあるように、いろいろな手話通訳の手順を学ぶ。このコースの中では、ASL言語学や社会言語学も学び、手話通訳を行なう上で、ASLが環境によってどのような使い分けがされているか、そのようなことについても学習する。

アメリカにはRID(The Registry of Interpreter for the Deaf)という手話通訳を統制する機関があり、学生にはそこが実施する資格試験を受験させており、その際の実験料は大学が負担している。そして手話通訳養成科を卒業した人が、卒業後も手話関係に携わっていけるように、プロフェッショナルなものを提供している。

通訳科の紹介(黄色の資料)と、入学の資格(白色の資料)には、エッセイやビデオを提出しなければならないことなどの情報が載っている。

質問：RIDの試験の合格率は？

答え：最近RIDの資格条件というのが変わりテスト内容が変わっているが、半分くらいは合格するのではないかと。資格条件が変わった後、全ての学生が合格できればいいなと思っている。

質問：定員は何人か。志望者は毎年何人くらいか。

答え：通訳科は2年間のプログラムで、今年目の学生は14名、2年目には9名。志望人数については、50~60人の応募がある。

その人たちが自分の手話をビデオに撮って送ってくる。それをスクリーニングプロセスといって、私たちがビデオを見て、技術があるかないかを見て、30人くらいに絞る。

次に、直接のインタビューを行なう。中にはインタビュー当日に来なかった人もいるが、そこでまた10~12人に最終的に絞り、その人たちが通訳科に入れる。

お分かりのように、手話通訳科に入るにはとても厳しい条件になっている。もちろん通訳科では手話を教えるということはない。手話を教えるのではなくて、手話を知っている人にどのように通訳をするのか技術を身に付けさせる場所あるから、そのためにスクリーニングプロセスで、応募者を絞る時には、手話の技術がある程度身に付けている人を選ぶことになる。

さきほども言ったが、州がお金を出してくれて学生はプログラムに参加できる。そしてその手話通訳科コースというのは、主に教育現場での通訳に関してのトレーニングを行なっている。

幼稚園から高校3年までのレベルの教育通訳に関して、教育現場での通訳に関してのトレーニングを行なっている。だからこそ、卒業後の2,400時間という手話通訳の仕事が、学費にあたるわけで、その時間というのは、教育現場で使われる時間ということになる。

パネルディスカッション～ろう学生からみたサービス～

司会：ディズリーさん

ミノル氏 / R I T 卒業。日本出身。

ケリー氏 / N T I D からラガーディアン大学に編入。ジャマイカ出身。15歳の時にアメリカへ。法律関係を専攻。

エマニエル氏 / ニューヨーク大学卒業。ヨーロッパ史専攻。

ジョーン氏 / N T I D からラガーディアン大学に編入。両親は中国からの移民者でアメリカ生まれ。ろう学校卒業。コンピュータ科学専攻。

スラバニア氏 / ハンター大学卒業。ロシア出身。社会学専攻心理学副専攻。

リチャード・ヘレン氏 / ハンター大学院生。ろう者と難聴者のためのプログラムに所属。

司会 / 私たちが提供しているサポートサービスについてなにか話してください。

リチャード氏 / 私は以前、マーフィーカレッジにいた。健聴の学生がいる大学だが、そこで通訳などのサービスを使っていた。専攻は行動科学。その後、現在の大学院に移り、サポートサービスを受けながら勉強している。

スラバニア氏 / ロシアから初めてアメリカに来たとき、私には言語がなかったので、すごく助けが必要だった。だから、ラガーディア大学に入ったとき、いろいろなサポートを受けて、外国語から英語に直すようなトレーニングを受けました。2年間で準学士を取得する間にチューターの使い方、ノートテイクの使い方、通訳の使い方なども学んだ。

その後ハンター大学で学士の勉強をした。そこでも通訳やチューターのサービスを受けた。それはすばらしい経験だったし、最終的には卒業後に仕事を得ることもできた。すばらしい経験になっている。

司会 / ここに来たときに言語がないといていたが、それは正しいこと？

スラバニア氏 / 私の場合は英語もしゃべれないし、アメリカ手話も知らなかった。言ってみれば本当に言語がなかった。

司会 / アメリカに来たときに英語とアメリカ手話は知らなかったけれど、ロシア語とロシア語の手話は知っていたのだから、そのことは伝えておかないとね。

ミノル氏 / 手話通訳の場合、講義内容だけでなく、文字だけでは伝わらない先生の表情や感情が伝わってきた。

エマニエル氏 / ニューヨーク大学にいて、チューターや通訳、ノートテイクなどのサービスを受けたが、私の場合は、外国へ行く特別なコースを取っていたので、ちょっと状況が違っていた。私の場合はパリに行く必要があったので、フランス語とASLが出来る通訳者を探す必要があった。このように、ろう学生一人一人の必要性や通訳者は異なっていると思う。

ケリー氏 / 私の場合、高校はろう学校で、つまり教員もみな手話ができるからコミュニケーションは簡単だった。大学に入学してから、メインストリーミングなので、クラスの中でろう者は私一人

という立場で、初めて情報が間接的に伝わってくる状況に置かれた。そこで初めて通訳の使い方を学び、サービスを受けるようになった。

ジョーン氏/私は、高校を卒業後、NTIDに入ったが、そこでは満足が得られずニューヨークに戻ってきた。新たに大学に戻るにあたって、ろう者に対するプログラムがある大学を探し、その結果、見つけたのがラガーディア大学だった。ここは、ろう者に対するサポートプログラムがしっかりしているので満足している。

司会/メインストーリーミングの大学で学ぶにあたり、最大の課題、チャレンジは何ですか？

エマニエル氏/いくつかある中で一つは、直接的なコミュニケーションの問題。私はずっとろう者として手話を使って直接的なコミュニケーションに慣れていて、ギャローデット大学にも行ったことがある。しかしニューヨーク大学に編入したときには、クラスの中でろう者は私一人、初めて間接的なコミュニケーションを経験してカルチャーショックであった。通訳に頼らなければならない初めての経験だった。直接的なコミュニケーションが取れるか取れないかが一番のチャレンジ。二つ目は、さきほど言ったフランス語を学ぶにあたって起きたチャレンジ。通訳を通してどのようにフランス語を学ぶかが課題。ギャローデット大学では筆記で学んだが、ニューヨーク大学はメインストーリーミングなので、音声を頼りに学ぶわけで、通訳を介して外国語を学ぶことがチャレンジだった。

スラバニア氏/ロシアの大学ではファッションを学んでいた。ろう者は私1人で、サポートサービスはなく、孤独だった。アメリカに来ていろいろなサービスがあることを初めて知り、びっくりした。ロシアでは通訳がなかったので、学生とのコミュニケーションはとれなかった。アメリカでは健聴の学生と一緒に参加できるようになり、平等になったことが一番大きいこと。

ミノル氏/RITには、ろう学生が大勢いるので安心できると思っていたが、通訳を頼むことが差別的に見られることがあった。

ケリー氏/通訳を使えるようになったことが一番。ジャマイカの手話は、BSLでしたが、アメリカに来て、ASLを2カ月で習得することでサービスを受けることが出来るようになった。

リチャード氏/聴覚障害のことを教員に理解してもらうために、私が説明しなければならなかった。

ジョーン氏/NTIDでは、健聴の教員とのコミュニケーションも手話で問題がなかったが、ラガーディア大学に来て、手話を知らない先生とのコミュニケーションが問題だった。早口だったり、トピックが次々に出てきて質問したいときに通訳を介するとタイムラグが生じる。通訳者も教員も忍耐が必要だ。

司会/クラス以外のカリキュラムなどで、ろう学生同志が交流する機会はありますか？

ケリー氏/ラガーディア大学のろう者のASLクラブに、参加している。SACとも話し合いをしている。

スラバニア氏/大学時代は、組織の代表をやっていた。ろう文化やろう教育などについてディスカッションをしたり、通訳養成などサービス向上については、カウンセラーと話し合いをした。

エマニエル氏 / あまり参加していない。手話を知らない教員や友人にASLを教えた。

リチャード氏 / NTIDの前にギャローデット大学では、地域貢献をするクラブで活動した。今はASLを教えている。

ミノル氏 / 昨年「ろう国際学生協会 (DISA)」を立ち上げました。

ジョーン氏 / /メトロポリタン・ろう協会に参加。ニューヨークとニュージャージーのろう学生が70人ほど集まったことがある。

司会 / それぞれの大学で一番良いところは？

ケリー氏 / チャレンジ、多様性。卒業後社会に出て、健聴者に囲まれて生活するときに、自分自身の守り立て方を学んだ。

スラバニアさん / 社会学と心理学を学んだが、難しいコースだった。ろう者として学ぶ中で健聴者と平等であることを学んだ。ソーシャルワーカーとして、仕事をするときに、学んだことが活かされると思う。

ジョーン氏 / 通訳と関係をもてた。そのことから健聴者とのコミュニケーションが出来て、たくさんのことを学んだことが一番良かった。

エマニエル氏 / ギャローデット大学で自分自身がすごく成長した。ニューヨーク大学で学力が成長し、パリに行くことが出来た。

リチャード氏 / 1つはギャローデット大学。大勢のろう者と出会い、手話のスタイルを知った。2つめはNTID。健聴者が多くいる環境で、テクニカルの勉強をし、世の中とは何かを知った。3つめはマーシー大学、初めて講演をしたところ。「ろう文化」や自分のことを知らない人に伝えることはすばらしい経験だった。

ミノル氏 / 学力を高めること、ろう学生との交流、卒業後のネットワーク作りを実現した。

ケリー氏 / 学生生活の一部が、ろうであることを講演してまわること。健聴者が間違った情報を持ってるところを修正することで感謝され尊敬の念を得られる。

司会 / サポートサービスを始めた大学に対するアドバイスは？

ジョーン氏 / 1つは通訳の必要性を感じているので、通訳をたくさん雇ってほしい。2つめは、通訳の質の向上、柔軟性をもってスケジュール対応をしてほしい。その他、ろう者は手話を見ているとノートをかけない。音声認識などの技術でカバーすることが必要。

ミノル氏 / 通訳の数が足りないということだけでなく、ろう学生が満足しているのかどうか確認していく必要がある。

ケリー氏 / 通訳をしっかりと評価すること。数の増加と同時に質の向上。

スラバニア氏 / ろう・難聴者だけでなく、盲ろう学生へのサポートも必要。それは、ASL通訳やチューターだけでなく、点字やテキストの拡大など、盲ろう学生に対応したサービスが必要。

エマニエル氏 / コミュニケーションの促進や、ろう学生のニーズに合わせた通訳との適合。例えば「ろう」と一口でいっても、抽象的な概念は難しいとか、手話は得意だが英語は、苦手など、多様な経歴を有しているので文化への配慮や、ニーズに対応していくことが重要だと思う。また、問題が生じたときに、その場の話をきちんと繋いでいくことを通訳が担っていると思う。

スラバニア氏 / カレッジでの体験。通訳の派遣はコーディネーターに依頼した。コーディネーターは、よく取り計らってくれ、先生に対して通訳と学生が授業にスムーズに入れるように配慮してくれた。

リチャード氏 / 1つは、サポートサービスを受けることでろう学生・障害をもつ学生にハンディにならない。ろうだけでなく他のいろいろな障害者がアクセス出来るサービスがあることが必要ではないか。2つめは、大学にろうプログラムを設けているところでは教員の人選に配慮が必要。例えばハンター大学にろうプログラムがあるが「ろう教員」はいないので「ろう教員」を雇用すること。また通訳が足りない事態にはちゃんと雇用してほしい。

HUNTER College

．ハンター大学の概要

パンフレットの紹介、約2万名の学生が在学、内600名が障害学生。
Hunter College の創立は1870年。ろう学生17名、難聴15名である。

．挨拶

1．ディーン学長の挨拶

おはようございます。ハンター大学によろこそいらっしやいました。私の名前は、ディーンと申します。私は、スチューデント アクセス アコモデーションの学長をしています。こちらで提供しているサービスをととても誇りに思っています。一つの問題として、コストの問題があげられます。市立のシステムの中で、目指すサービスをしようとすると問題が生じます。助成金の額を上げるために、いろいろと資料を集めています。よろこそ、ハンターカレッジにいらっしやいました。いろいろな情報に関しましては、スタッフから聞くことができます。

2．エイア アラブライアー副学長

私は、シュリーさんとダナーさんが行っている仕事をとても誇らしく思っています。もし、皆さんがキャンパス内を歩かれるとお分かりと思いますが、障害学生に対するサービスが充実していて、障害学生が孤立しないで普通の学生と同じようにやっていることがとお分かりだと思います。そして、多様性を大事にして、サービスを提供しています。よろこそ、ニューヨークへいらっしやいました。みなさん、もし、ご質問がありましたら、この二人にお尋ねください。二人はこの道のエキスパートなのでお答えできると思います。

3．シュリー（ディレクター）の挨拶

よろこそ。アクセス&アコモデーションのろう、難聴学生のためのサービスお話をします。時間が限られていますが、できるだけいろいろな情報をお話しします。ハンター大学は、ラガーディア大学に次ぐろう学生の多い大学です。29名のろう、難聴の学生がいます。今日、ダナーさんがプレゼンテーションを用意しています。いろいろなサービスの内容が、そのプレゼンテーションの中に盛り込まれていると思います。ろう学生にかかわっていくということは、単に通訳のサービスをおくというだけではなく、その背景にある文化的なことも踏まえてあたるということです。大切なことは、個人のプレーではなく、グループで個々の問題にあたるということです。たとえば、ひとりで得た情報をみんなにシェアということです。それとろう学生に対する理解を深めるために教育することが大切です。ニューヨークの市立のコーディネーターたちは、そのようにして、いつも情報交流しています。

この訪問が終わったと、みなさん、なにか質問などありましたら、こちらの方に連絡を取ってください。お互い何か情報交換したり、トレーニングについてアイデアを交換したりするよい関係を作っていきたいと思います。ありがとうございました。

4．日本側の自己紹介、ネームカード（略）

Q: 学生サービス支援センターは、学生サービスセンターに組み込まれているということ
でよいのでしょうか？

A: 2万人の学部学生と、大学院生がいます。その学生すべてに対して、このフロアーが
担当していて、アクセス・アコモデーションというのは、学生サービスセンターに組み
込まれています。その障害学生に対するサービスというのは、600人から700人の
障害学生に対して行われています。そして、その600ないし700人の障害学生の内
29人のろう学生に対して、サービスが行われています。

Q: 普通の学生に対しては、どのようなサービスがあるのですか？

A: 普通の学生に対するサービスは、アカデミックアドバイス、個人的なカウンセリング、
そのほか、職業関連のアドバイスや新入生、編入生に対するオリエンテーションなどが
あります。学生センターほかに、キャリアセンター、健康に関するオフィスもあります。
そのほか、成績が良くない学生、進級や卒業が危ぶまれる学生に対して支援をするコー
ディネーターがいます。

Q: 過去10年ぐらいの聴覚障害学生数の変化は？

A: ここ7, 8年は増えています。午後にくわしくお話します。1997年には7名の聴
覚障害学生がいました。私は、そのときパートタイマーでした。今日で2倍以上になっ
ています。ろう学生に対するサービスはラガーディア大学に次いで規模でサービスを
行っています。

Q: もし、私がこの学生になったとすると、一つのセメスターでどのくらい費用がかか
るのか？

A: 留学生は74ドル(?)

Q: 逆にお尋ねしたいのは、皆さんの大学では、どのようなことをやっておられ、どのよ
うなことにチャレンジさせているのかお聞きしたいのです。

A: 日本の大学も最近変わってきています。ノーテイクサービスなどしています。日本の
大学、主に筑波技術短期大学に関して質疑あり。(略)

・学内ツアー

あちこちにコンピューターサービスがある。

ここ以外にキャンパスがあって、そこでは社会福祉学部がある。

テクノロジーセンターは、1日100名ほどの学生が利用している。ワークショップ
を開くこともある。普通のコンピューターと視覚障害者用のマイクロソフトコン
ピューターがある。音声のスピードを速めているもの。

舞台のある講堂(ろう者劇団の公演もある)

トレーニングルーム

体育館

Q：予算獲得はどうしていますか？

A：ニューヨーク市の29の大学がCUNYという組織を作り、それぞれの大学から代表者が出てオフィスで協議し、州に要求します。獲得した予算の配分についても協議します。障害学生の意見も尊重します。毎年約11万ドルの予算です。CUNYスクールに属している大学は、それぞれ特徴を持っている。たとえば、ラガーディア大学ではろう学生に対するサービスに力を入れています。それぞれの大学は、その大学の特色を生かして州に訴えています。市のほうから、州のほうから、国からなど、また大学から財政支援をしてもらっています。

Q：ノートテイクのサービスは、学生がやっているのか？

A：はい、学生がやっています。その学生は、4段階評価の3.5以上の成績のものです。視覚障害やその他も含めて600人の障害学生がいます。クラスの中でボランティアを雇っているのです。大学院生。3.0以上とり続けている学生。

Q：日本では、自分の障害を表にあらわさない学生がいて、そのような学生に対して、どうして行くのかということが課題になっていますが、NETACやこちらではどうですか？

A：まず、私達がやっていることは、アウトリーチとして、周りに対して自分たちのやっている内容を呼びかけ、知らしめるように努力しています。そして、私達がどんなことをやっているのか知らせることが重要です。私達がやっている任務やオフィスがあることを手紙で知らせます。障害に対してデリケートな学生に対しては、この大学には100人も登録している障害学生がいることも知らせ、孤独感を感じなくてもよいことを知らせます。質問にあったようなことは、目に見えない障害を持っている学生に見られます。たとえば、ろうの中でも、手話のわからない学生だとか、うつ病、学習障害の場合、アメリカの場合50%ぐらいがうつになっているともいわれています。目が悪くなった場合は、お医者さんに行くようにというような感じでアドバイスをする場合もあります。学内ツアーで見られた健康フェアのような場でも、私達の活動をわかってもらえるようにしています。そのようなことを通して、そのような学生に対して対応しています。

Q：養成はどのようにしていますか？また、オンラインでトレーニングしていますか？

A：養成はしていませんが、学生に対しては、ノートテイクについてオリエンテーションをしています。オンライントレーニングは、まだできたばかりなので、まだ導入していませんが、これから導入することを考えています。実際の養成はしていませんが、オリエンテーションのときに話しています。

Q：コーディネーションをうまくやっていくための、情報源や資源について、情報を得るのには、CUNYのなかの交流の他、NETACによるトレーニングや資源を利用する場合はあるのか？

A：もちろん、私達が何かやろうとするときは、何か、どこかを頼りにします。わたしがここに雇われて、聾者のために組織を立ち上げサービスを提供しようとしたとき、全て

の情報源を活用しました。ありとあらゆる情報源を求め、会議などに参加しました。試行錯誤を繰り返して、わからないことは学生たちに直接聞いて、そして、学生からの評価も受けて、すすめました。私がここにきて最初にしたことは、サービスを必要としている学生たちに意見を聞き、サービスしていることが機能しているかどうかということを確認することでした。そのようなことをして、NETAC などから必要な情報を得ることでした。

Q：学生からの意見以外は、誰からの情報が一番役にたったのでしょうか？

A：情報源に携わっている方達は、全てがスペシャリストで、比べようがありません。それぞれに長けているところがあります。そのほか、すでに、ろう、難聴者にサービスしているところにも行きました。状況に応じて、その活用は異なりました。

Q：ろう学生のクラスにいる先生に対する働きかけはどうしていますか？NETAC のものを利用してありますか？

A：ろう文化などについての知識を伝えています。NETAC のものやあらゆる情報を活用しています。

、プレゼンテーションから

1. ハンター大学の歴史

1870年創立。ニューヨークの都心にある大学の中では一番大規模な大学。18歳から86・7歳までの20000人が在学しており、100語の母語を持つ140カ国の学生が在学中。

2. 4つのプログラム

芸術と科学部門がある。健康と専門職。ソーシャルワーカー。55の学部学科。15の学士と修士の学科、70以上の修士課程がある。

3. 障害学生支援サービス(アクセス&アコモデーションサービス)

サービスの利用登録をするためには、証明書や診断書が必要(セラピストの証明書。薬の副作用があるか。その対処法。機関からの推薦状。など)

4. ろうおよび難聴学生のプログラム

1980年；2～5名。はじめは、ろう学生のカウンセラーというより、障害学生全体のカウンセラーとして雇われていた。当時は学内にいないので、手話通訳、ノートテイクは外部に依頼していた。

1997年；7人の聴覚障害学生がいて、手話通訳派遣を依頼していた。パートタイムのカウンセラーがいた。ADA法に基づき、ハンター大学として手話通訳の料金を支払うようになった。

1997年～現在；29名の聴覚障害学生が在籍。フルタイムのスタッフが2名。3名の手話通訳スタッフが20～25時間勤務し、16名の手話通訳が派遣されている。シュリーさんは、その管理やお金を動かす仕事をしている。1997年当時は、お金がなかった。私はレギュラーカウンセラーとして雇われたが、アクセス&アコモ

デーショで、自分の能力を提供することで働くことができた。ろう学生サービスにはニューヨーク市から出される予算があてられているが、通訳者をフルタイムで雇うようになってから、以前の 1 / 3 の予算で手話通訳派遣が可能になったため、身分保障などのベネフィットをつけても、同じ金額で 3 倍の手話通訳を付けることができるようになった。

質問に答えて ; ろう学生が増えるのは、口コミで「ハンター大学は、ろう学生がサービスを受けられる」とうわさが広がったことで増えている。コーディネーターたちがリクルートしているわけでないが、ろう学生が自然に集まってきている。大学としては学生募集に制限を設けていない。スタッフとして手話通訳者を雇ったときは、ハンター大学として一般会計から支出してくれる。

スタッフを雇うことで、むしろかかる費用の 3 分の 1 が節約できた。3 名の手話通訳者に対してはハンター大学から支払われる。

5 . Mission (派遣)

全ての教育に対して平等にアクセスできることを旨としている。

聾や難聴の学生が教育的環境にスムーズに統合できるようにする。

大学に対して、ろう文化とは何かを教育する。

6 . サービス内容

クラスゼミや講義、試験などに対してサービスを用意する。

個人的なことや就労などに関してカウンセラーサービスを行う。

ここの学生に対して、必要に応じて種々のサービスを行う。

ろう学生に対しては、クラス登録が優先的にできるように手配する。

手話通訳費用も安くできるようにする。

2 ヶ月前に履修登録できるようにする。12 単位がフルタイムになっている。

テストの代替え処置 (第一言語が英語でない場合) など、時間延長。

7 . NETAC の支援サービス

募集のとき、差別はしない。必ずサービスを提供しないといけない。

ハンター大学は法律に従っている。もっとよいノートテイクがあるかもしれないが、ここでは学生がノートテイクをしている。

ろうおよび難聴学生のサービス内容は NETAC からのものである。

トレーニングやワークショップについては、提供してもらっている。

最新のリサーチ情報やテクノロジーについての情報も提供してもらっている。

8 . Additional Accommodations (特別な援助)

ノートテイク

いつでも指導サービスを受けることができる。

チューターサービス

求職者紹介・推薦

9 . Types 別の対応

ろう学生

難聴学生

中途失聴

人工内耳

10 . Funding Resources (財政基盤)

国からの配分

州からの配分 ; 州の職業的リハビリテーション (VESID) から、年間 4 万ドルの分配。

ハンター大学から支出

11 . Popular Degree Programs

卒業まで (社会学、メディア関係、哲学関係、マスコミ関係、歴史学、英語)

卒業 (ソーシャルワーク、ろう教育)

卒業生 20 % が修士課程へ。80 % が、社会的なサービス、教育分野、マスメディア関係の仕事をしている。

12 . Special Features

海外で勉強できるプログラム (手話通訳を派遣する)

ろうや難聴のクラブを 100 作り交流会やパーティを開催する。